

北海道の基礎を築いた指導者たち

<第3冊>

北海道マサチューセッツ協会 「HOMAS」 ニュースレター 掲載記事 他

北海道開拓使時代の指導者たちの具体的な人物像とその業績を、各種の資料調査をもとに簡潔にまとめたものです。 (執筆担当 中垣 正史)

<発行日>

- | | |
|----------------------------------|-----------------------|
| 21 北海道農業・酪農の基礎を築いた先駆者たちの足跡とその業績① | (NO. 66) 2012. 7. 31 |
| 22 北海道農業・酪農の基礎を築いた先駆者たちの足跡とその業績② | (NO. 67) 2012. 12. 10 |
| 23「北前船」交易の歴史と蝦夷地に繁栄をもたらした豪商たち① | (NO. 68) 2013. 3. 15 |
| 24「北前船」交易の歴史と蝦夷地に繁栄をもたらした豪商たち② | (NO. 69) 2013. 7. 31 |
| 25 新渡戸稲造の生涯と業績・・長く受け継がれた「遠友夜学校」 | (NO. 70) 2013. 12. 10 |
| 26 近代日本の女性医師第1号・・荻野吟子の生涯と業績 | (NO. 71) 2014. 3. 15 |
| 27「ニッカウキスキー」をつくった竹鶴政孝の生涯と業績 | (NO. 72) 2014. 7. 31 |
| 28 優れた蘭医・西洋医学を極めた関寛斎の生涯と業績 | (NO. 73) 2014. 12. 10 |
| 29 北海道開拓期の官営工場設置から民営工場の建設へ | (NO. 74) 2015. 3. 15 |
| 30 北海道の鉄道-開拓使時代からの変遷史をたどって | (NO. 75) 2015. 7. 31 |

北海道農業・酪農の基礎を築いた先駆者たちの足跡とその業績

—大友亀太郎、エドウィン・ダン、町村金弥、宇都宮仙太郎、町村敬貴、黒澤酉蔵—

＜原稿が長くなりましたので、2回に分けて掲載します。 町村敬貴・黒澤酉蔵については、「HOMAS」67号に掲載します。＞

■ まえがき

広大な緑の牧場が広がっていて、そこに牛や馬が放牧されている・・・これが、北海道の原風景のようなイメージの感があります。しかし、北海道が「酪農王国」に至るまでには、まず、1876年(明治9年)、エドウィン・ダン(1848～1931)が、開拓使の招聘により来道して、札幌の原始林を切り開いて「真駒内牧牛場」建設に着手したことはじまります。そして開拓使廃止(1882・明治15年1月)後、町村金弥(1859～1944)がその運営を受け継ぎます。その長男町村敬貴(ひろたか)(1882～1969)が、米国留学・きびしい酪農実習をして帰国した後、本格的な酪農経営に取り組みます。

時代が少し前後しますが、苦労を重ねて酪農業を立ち上げた宇都宮仙太郎(1866～1940)や黒澤酉蔵(1885～1982)らの努力があって、後に雪印乳業設立の重要な役割をはたすことになります。黒澤は、1933年(昭和8年)、江別に「酪農義塾」(現在の酪農学園大学)を設立しています。

今回は、こうした「酪農王国」北海道の基礎を築いた先駆者たちの苦労とその業績にスポットをあてて検証してみたいと思います。まず、その前史ともいべき幕末、そして明治の開拓使時代(1869～1882)の農業、牧畜・酪農の歴史をたどることから始まります。

■ 時代背景として—札幌村の開祖 大友亀太郎

江戸幕府は、ロシアの南下に対する蝦夷地警備のために、1854年(安政元年)箱館奉行所を設置し、ます。そして、内陸部開拓のために、二宮尊徳(1787～1856、江戸後期の農政家)一門に協力を要請します。1858年(安政5年)になって、報徳思想を体得した門下生の「大友亀太郎」(1834～1897、当時25歳)が、幕府の命令により蝦夷地に渡ることとなりました。

大友亀太郎は、箱館奉行から開墾場取扱いの辞令を受けて、苦労の末原野を切り開き、道路を作り、用水路を掘って、木古内・大野村・次いで七飯に御手作場(おてさくば・開拓農場)を開設しました。

また、1868年(明治元年)7月、箱館府の99年間租借地契約による、ガルトネル七重村開墾農場は、開拓使が交渉を重ね、1870年(明治3年)12月、明治政府が莫大な賠償金を支払って取り戻しますが、彼の西洋式農業経営紹介は、道南の農業開拓の基礎となり、その功績は大きいといわれています。

大友亀太郎は、開墾農場開設の業績が高く評価されて、1866年(慶応2年、当時32歳)、蝦夷地開墾掛を命ぜられ、石狩開墾に関する計画書を提出して、4月23日、高木長蔵ら数名とともに石狩に入りました。早山清太郎を案内役として御手作場(おてさくば・開拓農場)をサホロベツ(アイヌ語で大きな乾いた広い土地という意味)と決定して、伏古川のほとりで開拓に着手したのでし

た。(これが「札幌村」の原点となりました)。当時、大友亀太郎より先に、発寒には山岡精次郎、篠路には荒井金助、早山清太郎、豊平川両岸には志村鉄一、吉田茂八らが入植していました。

大友亀太郎は、田畑の開墾に先立って、資本を導入して、石狩などから多くの人夫を集めて、豊平川支流から水を引いて、北に水路を掘り進め、現在の南3条から北6条までは直線に(現在の創成川)、そこから東北に曲って北13条東16丁目のところで伏古川に合流するという用水路の大工事を、1866年(慶応2年)5月から始めて、同年9月9日に完成・通水させています。

*これが「大友堀」といわれるもので、堀の大きさは長さ約4km、深さ約1.5m、上幅約1.8m、下幅1.2mという大規模工事で、毎日40~50人の人夫が働く「一万両の大工事」といわれるものでした。完成した「大友堀」は、用水路、運送路として、多目的に利用されましたが、1925年(大正14年)ごろ、北6条から伏古川の間は埋めたてられました。その後、札幌から茨戸までの「寺尾秀次郎堀」と結ばれて、一直線の川筋として今日に至っています。

大友亀太郎は、さらに道路や橋なども作り、翌1867年(慶応3年)4月、箱館近郊から20戸70余人の入植者を迎えて、田畑を開墾し、その年の秋には若干の米も収穫します。こうして、明治以後の札幌開拓の先駆的な役割を果たしたのでした。(後に、札幌官園のエドウィン・ダンなどの指導で各種作物が栽培されます。)

大友亀太郎は、1868年(明治元年)7月、箱館裁判所付属となります。12月石狩当別の土地調査・移民受入れに着手。明治2年(1869)8月、苗穂村を開墾しますが、この年の12月に、元村・苗穂の開墾地を開拓使に引き渡して、翌1870年(明治3年)1月、新しく拝命した開拓使掌を辞して苦難の開拓12年の北海道を去りました。その後の大友亀太郎は、茨城県・島根県・山梨県の大要職を経て、1874年(明治7年)故郷神奈川県に帰り、戸長などを務めて、1881年(明治14年)県会議員に当選、以後4期連続当選。1897年(明治30年)12月14日、64歳の生涯を終えています。

■ 開拓使時代のお雇い外国人—ケプロン人脈の指導者たち

さて1869年(明治2年)7月、明治政府の開拓使設置により、北海道の本格的な開拓がスタートしますが、1870年(明治3年)5月、開拓次官となった黒田清隆(1840-1900)は、北海道の開拓や農業経営の模範を米国に求めて、マサチューセッツ州出身の米国農務長官ホーレス・ケプロン(1804-1885、当時67歳)を開拓使顧問として招聘します<この経緯は「HOMAS」No.43に詳述>。

ケプロン(1871年(明治4)8月25日来日~1875年(明治8)5月23日離日)は、1871年(明治4年)8月、書記兼医師としてジョウジタウン医科大学解剖学助手・合衆国農務省図書館司書をしていたエルドリッジ、科学技術師として工学・地質・鉱学関係担当の技師として合衆国農務省に勤務していたアンチセル、測量・土木関係担当の技師としてバルチモア・オハイオ鉄道に勤務していたワーフィールドという優秀なスタッフを伴って、最初の開拓使お雇い外国人として来日します。ケプロンの指導で、早速、東京の青山・赤坂・麻布に官園(農業試験場)が設けられ、北海道に導入する作物の試作・家畜の飼育や農業技術者の養成が行なわれます。(この事業責任者が村橋久成です。)

最初に、アンチセル、ワーフィールドの開拓予備調査。そしてケプロン自身の3回にわたる道内各地の長期視察・調査を通してまとめられた「ケプロン報告書」<①明治4年(1871)11月、

②明治6年(1873)11月、③明治8年(1875)3月>、さらに離日に際して、「報文要略」を開拓使に提出しています(ケプロンの滞日3年10ヶ月)。これらの、「報文」は、北海道の基本的な開発計画を提言し、札幌を首都とすること、農業開発のために高等教育機関を設置することなどを提言、その後の北海道開拓の重要な指針となります。

*ケプロンは、帰国後はワシントンに在住して静穏な余生を送ったといわれます。1876年(明治9年)には、ワシントン哲学会で「日本」と題する講演をし、また1877年(明治10年)西南戦争に際しては、黒田の要請(黒田は65,000ドルをケプロンに送金)に応じて鉄砲・弾薬の調達をしたり、開拓使からのいろいろな依頼に対応してなお日本に目を向けていたといわれます。晩年のケプロンにとって、日本とのきずなは貴重であったようです。ケプロンは時折、自宅に議員や各省の高官を招いて、日本から持ち帰った美術工芸品を披露するのを楽しみにしていたそうです。ケプロンの人柄は、いつも誠実で奥ゆかしい態度で人に接し、虚飾を廃した質素な生活を好んだといわれます。

1884年(明治17年)1月、日本の天皇から勲二等旭日章が授与されました。ケプロンは、勲章と日本でのケプロンの功績を書き連ねた天皇署名入りの賞状に「深い感動」をおぼえたといわれます。

そして、1年後の1885年(明治18年)2月21日、ケプロンはワシントン記念塔完成を祝う式典に出席します。その日はよく晴れていたが、風の冷たい日であったそうです。帰宅後、気分不調を訴えたケプロンは、その翌日、80歳の生涯を閉じたのでした。

ケプロンは、開拓使顧問在任中は、黒田の信頼もきわめて厚く、職務にたいしては誠実そのものであったといわれます。しかし、ケプロンの指導による北海道開拓事業の成果にたいしては、開拓使官員や内外新聞の批判、多くの優秀な部下たちとのトラブルなどもあって、きびしい評価もあったようです。ケプロンの北海道の総合的な開発の計画・構想は開拓使に対してのみ向けられ、顧問としての職分に徹していたようです。

ケプロン在任中のお雇い外国人の大半は、ケプロンの推薦・承認のもとに採用されたこともあり、多くのアメリカ人技術者が中心となっています。地質・測量・鉱山開発のベンジャミン・S・ライマン<(1835-1920)><1873・明6,1,18来日~1880・明13,12,22離日・滞在6年半> 助手マンロー(1872・明5来日~後,コロンビア大学 学部長)などがいます。

また、ケプロン帰国後も、札幌農学校関係では、初代教頭・農学・化学・数学のウィリアム・S・クラーク 1826-1886)<1876・明9,7,31来札・当時50歳~1877・明10,4,16離札・滞在8ヶ月16日>、土木工学・数学・第2代教頭で、時計台・モデルバーン・豊平橋などを設計したウィリアム・ホイラー(1851-1932)<1876・明9,7,31来札・当時25歳~1879・明12,12帰国・滞在3年半>、化学・農学・数学・第3代教頭で、石鹼・ローソク・マッチ・コークス・魚油などの製造実験をしたデイヴィッド・ペンハロー(1851-1932)<1876・明9,7,31来札・当時22歳~明13,8・滞在4年間>、農学・官園監督・第4代教頭で、丘珠タマネギ・トウモロコシ・カボチャ・トマト・キャベツなどを栽培したウィリアム・ブルックス(1851-1938)<1877・明10,2来日・当時26歳~明21・滞在10年7ヶ月>、生理学・解剖学・病院医術顧問で札幌の病院施設の充実・学校の身体検査の創始な

どに努めたジョン・C・カッター(1851-1909) <1878・明 11、9 来日～1887・明 20、1・滞在 8 年 4 ヶ月>。

*カッターの死後 1910 年、遺言により札幌市に寄付された 500 ドルをもとに 1938 年(昭 13 年)に大通西 5 丁目の「聖恩碑」四隅にカッターさんの水飲み場が設置されて、今日も使用されています。

数学・土木のピーボディー(1878・明 11、12 着任～明 14、7 離任)、サマーズ(1880・明 13、6 着任～明 15、6 離任)、ストックブリッジ(1885・明 18、5 着任～明 22、1 離任)、ヘート(1888・明 21、1 着任～明 25・8 離任)、ブリガム(1889・明 22、1 着任～明 26、11 離任。 <外国人教師の最後>)など合計 10 名を迎えています。これら札幌農学校初期の米国マサチューセッツ州出身の教師は、総じて勤勉で献身的に職務以外の仕事にも非常に熱心に取り組み、ほんとうに北海道開拓期の立派な指導者でした。

さらにまた、茅沼・幌内炭鉱のゴージョー、ダウス(2 名、1879・明 12 来日～)、鉄道敷設・土木顧問のジョセフ・クロフォード(1878・明 11 来日～)、水産加工・魚肉缶詰製造のトリート(1877・明 10 来日～)などが招かれており、ケプロンを筆頭に、合計 78 名の「お雇い外国人」中、48 名がアメリカ人でした。

■ 北海道牧畜酪農の指導者—エドウィン・ダン

ケプロンの進言により、まず、1873 年(明治 6 年)7 月、オハイオ州で牧場経営をしていたエドウィン・ダン(1848～1931)が、A・B・ケプロン(ホーレス・ケプロンの息子)の依頼を受けて、米国の進んだ畜産技術指導のために、牛 20 頭・羊 100 頭とともに大陸横断の苦難の末来日します。早速、東京麻布の第 3 官園で約 30 人の生徒に実技指導を行い、北海道開拓に役立つ技術者養成のために実技を主体にした畑作や畜産の技術を幅広く指導します。

ダンは、1875 年(明治 8 年 5 月、北海道「七重官園」(現在の七飯)に、5 ヶ月の長期出張で来道、農業技術や馬の改良に欠かせない去勢技術の普及に努めます。この期間中、札幌官園、新冠牧場も視察しました。また七重では「妻となるべき女性」ツルにも出会いました。後に、国際結婚の難しい手続きを経て、正式に結婚。日本永住の決意を固めたのでした。

1876 年(明治 9 年)6 月、ダンは、園芸担当のポーマーと共に「札幌官園」に転勤し、直ちに真駒内牧牛場の建設に着手、搾乳場・乳製品加工場・用水路など、酪農・牧場の基礎が整備されていきました。

とりわけ、エドウィン・ダンが完成させた「真駒内用水路」(～明 12 年・1879 年完成)は、真駒内川から取水され、現在の中央公園の池を通り、緑町、曙公園から陸上自衛隊駐屯地を通り、精進川に注ぐ約 4km に及ぶ灌漑用水で、家畜の飲料水・農業用水・水車などにも利用され、真駒内牧牛場地域だけでなく、後には広く、平岸・豊平・白石など広域に用水を供給してきた歴史をもっています。これは北の「創成川」 <「大友堀」(慶応 2 年)・「吉田堀」(明 3)・「寺尾堀」(明 3)の総称>に匹敵する歴史的価値のあるものです。

* 1876 年(明治 9 年)7 月 31 日、マサチューセッツ州立農科大学学長ウィリアム・S・クラーク(1826-1886)が、ウィリアム・ホイラー、ディビッド・ベンハローとともに札幌着任。8 月

14日、札幌農業校開校、初任教頭(学長)となります。これに伴い札幌官園の大半が農学校の農場となったこともあり、エドウィン・ダンも、彼等と協力して、明治10年(1877)我が国最初の模範家畜房(モデルバーン)を建築しました。これは、今日も北大構内に、重要文化財として保存されています。

明治10年(1877)ころには、真駒内の牛舎には牛107頭、馬は農耕用・乗馬用あわせて10数頭、豚も40頭くらいいたそうです。当時のエドウィン・ダンは、本府近くの虻田通り(現在の中央区北4西2)の官舎に妻ツル・長女ヘレン(明10生)と住み、毎日真駒内牧牛場に通っていました。

1878年(明治11年)、ダンの提言により「新冠牧馬場」が整備され、馬産王国北海道の基礎ができたのでした。馬の改良と増殖が進められ、開拓使が米国農法を模範として、馬を使用する農機具の導入を図ったこともあり、馬による大型機械が普及して、北海道の大規模農業の発展に大きく貢献しました。また、ビール製造用の大麦・小麦・亜麻の栽培等、暗渠排水による土地改良なども、ダンの指導によるところ大であったといわれます。(今日も、多くの農機具は、プラウ・ハロー・ホークなど英語名で呼ばれています。また、バター・チーズの製造、ハム・ソーセージの加工、ミルクなどの普及もここからはじまります。)

1882年(明15)1月、開拓使の廃止により真駒内牧牛場は農商務省の所管となります。エドウィン・ダンは、この年12月、6年半にわたる北海道滞在に多くの業績を残して、家族と一緒に東京に移りました。この年、札幌農学校2期生の「町村金弥」(1859-1944)が真駒内牧牛場に勤務して、短期間ではありましたが、ダンの直接指導を受け、その技術を実地に受け継いだ最初の人となります。札幌農学校の卒業生からは、新冠御料牧場に1期生の黒岩四方進が入って、北海道の馬産に貢献し、また、2期生の南鷹次郎(1859-1936、北海道帝大初代農学部長・後第2代学長)は、札幌農学校園の経営にあたり、多くの指導者を養成し、北海道農業全般の発展に大きく貢献しています。

* その後のダンは、明治16年(1883)、長年にわたる北海道農業・畜産指導の功績により勲五等旭日双光章を受章。米国オハイオ州に一時帰国しますが、1884年(明治17年)、駐日米国公使館の二等書記官として再来日、1897年(明治30年)まで外交官として勤務。後、石油採掘事業を起こし、1912年(大正元年)三菱会社勤務。1931年(昭和6年)5月15日、東京代々木の自宅で永眠しました。(享年83歳)

■ ダンの薫陶を受けた町村金弥

1882年(明治15年)1月、開拓使の廃止により真駒内牧牛場は農商務省の所管<後に「真駒内種蓄場」(明19)、「北海道種蓄場」(明26)と改称>となります。この年、札幌農学校2期生の「町村金弥」(1859-1944)が真駒内牧牛場勤務となり、エドウィン・ダンがこの年12月札幌を離れるまでの短期間でしたが、ダンの直接指導を受けたのでした。エドウィン・ダンの牧牛場からはじまった真駒内の開拓は、肥沃な土地に恵まれたこともあり、地域の人々の野菜・果物作り、また種蓄場に納める牧草や根菜類の耕作も広まっていきます。

町村金弥(1859-1944)は、1859年(安政6年)1月、越前国南条郡武生(現福井県武生市)生。12

歳の時上京して、同郷の日本橋の蚊帳問屋奉公しながら苦学力行、東京英語学校で英語を学び、1977年(明10)、工部大学校予備校(東大工学部前身)に合格しますが、同年、官費生募集の札幌農学校を受験して、2期生として入学して、畜産学を専攻します。札幌農学校2期生18名には、宮部金吾・太田稻造(のちの新渡戸稻造)・内村鑑三、築港工事権威者となる広井勇、第2代北海道帝国大総長の南鷹次郎、十勝農業の基礎をつくった諏訪鹿三などがいました。

金弥は、在学時代、ブルックスの農学の講義とアメリカ式大農経営、さらにダンの指導も受けて欧米式大農場の経営法を学んでいます。1881年(明14)7月卒業すると同時に開拓使御用掛に採用され、真駒内牧牛場の担当となり、短期間ですがダンの精力的な指導を受け、翌1882年(明15)には真駒内牧牛場長(農商務省管轄)になります。この年2月開拓使は廃止となり、ダンは職を解かれて札幌を去ります。金弥は、真駒内牧牛場が、1886年(明19)北海道庁管轄「真駒内種畜場」になるまでの5年間勤めています。金弥は本庁に戻りますが、その後、北越殖民社、雨竜華族農場の指導、十勝開墾合資会社などの大農場の経営指導にも当たっています。北海道庁の指導を受けて、1887年(明20)北海道製麻株式会社の雁木農場や、1888年(明21)北海道製糖株式会社の野幌農場設計・指導にも当たっています。事業家を招いて北海道開拓を推進、欧米農法・酪農畜産の技術指導に功績を残しています。1901年(明34)陸軍技師となり、馬の飼育改良に貢献します。晩年は、東京の大久保に在住、10年間町長を務めています。最後は、疎開先の郷里武生で1944年(昭19)没、86歳の生涯でした。

このように、金弥は、多くの大牧場開設経営の指導に当たっていますが、最も大きな功績は、後に北海道の酪農界を代表する、「宇都宮牧場」の宇都宮仙太郎と「町村牧場」の町村敬貴の二人を養成したことだといわれます。

宇都宮は大分県中津の出身。1885年(明18)、金弥が、牧畜を志して真駒内牧牛場を訪れた宇都宮熱意にほだされて採用、アメリカ修行、牧場独立などの援助をします。また、長男敬貴も、札幌農学校卒業後、宇都宮の世話でアメリカへ酪農修行に送り出します。敬貴が10年間修行して帰国したとき、金弥は、樽岸農場の牧草地に独立の足場を与えています。敬貴は、その後江別に移り、模範的農場経営に成功して、わが国屈指のブリーダーとして活躍するにいたります。この二人を世に送り出した、金弥の先見の明と深慮・援助は高く評価されるべきものといえます。

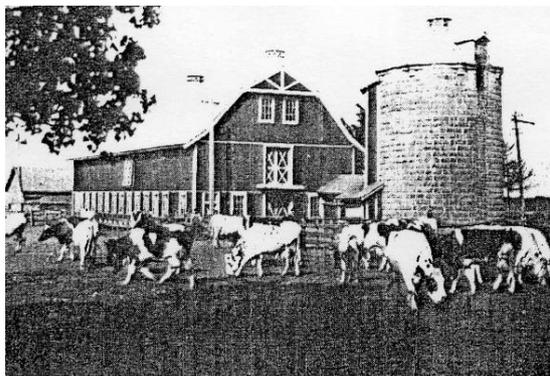
■ 宇都宮仙太郎

北海道の酪農業の基礎は、エドウィン・ダンや町村金弥などによって固められました。しかしながら、まだ、牛乳や乳製品の一般的な需要が少なく、本道乳業者は苦境に立たされていました。この新しい産業第1のパイオニアが宇都宮仙太郎(1866-1940)といわれます。

宇都宮仙太郎(1866~1940)は、1866年(慶応2年)4月14日、大分県下毛郡大幡村(現中津市)に、父武原文平の次男として生れますが、母方の家を継いで宇都宮を名のります。地元の中学校卒業後、志を立てて上京し、神田の共立学校(高橋是清校長)に入学します。下宿屋近くの牛乳屋の主人がいつも「身体を丈夫にするには何よりも牛乳が一番」という宣伝を聞きその言葉を信じたという。仙太郎は、慶応義塾の同郷中津藩出身者福沢諭吉の感化を強く受け、1885年(明18)8月、20歳の時、牧畜業経営の希望をいだいて北海道行きを決意したのでした。

当時、エドウィン・ダンが設立した真駒内牧牛場(後、「真駒内種畜場」に改称)は全国的に有名で、牧場長は町村金弥でした。金弥は、仙太郎の尋常一様でない熱意をみこんで、あまり丈夫でもなさそうな若者を、牧夫見習いとして日給 20 銭で採用したのです。仙太郎は、すぐに熱心な働き手となりますが、1887 年(明 20)4 月、金弥の手引きにより、あこがれのアメリカ牧畜業研究のため渡米します。最初は、放浪者のような生活の末、ワシントン州のデビス牧場を振り出しに各地の牧場で実習を積み、最後はイリノイ州のガラー牧場でした。ついでウィスコンシン州農事試験場の実習生となり、州立農科大学のショートコースに学び、1890 年(明 23)3 月帰国します。

仙太郎は、しばらく金弥の農場で働きますが、1891 年(明 24)9 月、金弥からホルスタイン 2 頭を借り受けて独立し、元札幌農学校長森源三の土地(現知事公館の西北角)を借りて、市乳の配達販売を開始。残りの牛乳はバターにして豊平館に収めたのです。これが北海道酪農史上、民間のバター製造販売の最初といわれます。仙太郎は一時上京して、牛乳販売をしますが東京進出はうまくいかず、1898 年(明 31)9 月再び札幌にもどって、「札幌バター」の製造に取り組みます。



上白石にあった宇都宮牧場(1922 年・大 11 頃)



上野幌の宇納牧場(1927 年・昭 2 頃)現雪印種苗センター

1902 年(明 35)5 月、上白石に土地 20 町歩を購入して、牛舎を新築、大型のサイロも建て、ホルスタイン種 20 余頭を飼って、牛乳販売・バター製造などを開始します。以後 25 年間「宇都宮牧場」の本格的な酪農経営に当たります。民間人初の種牛輸入による品種改良、共同組合方式の資材調達、本格的なバター製造など、日本近代酪農の基礎を築いたのでした。仙太郎は全国から慕って集まってくる後継者を育て「日本酪農の父」と呼ばれ、アメリカに留学してホルスタインの品種改良に務めた長男の勤は、「日本ホルスタインの父」といわれました。

1905 年(明 38)7 月 31 日、後の酪農学園創立者となる黒沢西藏 19 歳が、当時の札幌区長阿部宇之八の紹介を受けて、この宇都宮牧場を訪ね、牧夫としての第一歩を踏み出します。西藏は、仙太郎の説く“酪農三徳”「牛飼いには三徳がある。第一に役人に頭を下げなくてもよい。第二に牛には嘘をつかなくてもよい。第三には牛乳が飲める。牛乳は人を健康にする。」という言葉に心酔したといわれます。この宇都宮牧場には、多くの若者が集まってきました。その中に、小学校 4 年生の佐藤貢(後、雪印乳業初代社長)もいました。これは、父佐藤善七(道庁役人・後札幌信用金庫理事長)が、仙太郎の真剣な働きぶりに感銘をうけて息子を修行のために送り込んだと

いわれます。

1906年(明36)、40歳の仙太郎は、再び渡米して、同業者の協力も得てホルスタイン牛50頭を買い付けます。これが、後の北海道はもとより、広く日本全国の酪農業を大きく向上させる「基準牛」になったといわれています。

1915年(大4)、市乳業者が結集して札幌牛乳販売組合(後の[札幌酪農組合])をつくり、仙太郎が会長に選ばれます。1921年(大10)、第16代北海道長官宮尾瞬治が、道の方針として酪農振興を取り上げ、デンマーク農法を導入することとなり、北海道の酪農業は、ますます発展していきます。

1924年(大13)宇都宮牧場を上白石から上野幌に移転。デンマーク留学帰りの出納陽一と「宇納農場」を開きます。そして、アメリカオハイオ州立大に留学していた佐藤貢を工場技師に迎えて、バター・チーズの本格的製造を開始、乳価問題など多方面の問題に対応していくこととなります。これが、後に「雪印乳業」と名を変えて、牛乳・バター・チーズなどの製造販売で、日本の食生活を大きく変化させることとなります。

1925年(大14)5月、全道の酪農家629人が結集して「北海道製酪販売組合」(雪印乳業の前身)が発足。組合長には、最も信頼厚い59歳の宇都宮仙太郎が就任したのです。その後、全道に工場を設け、さらに市乳やアイスクリームなど多方面の製品を出し、次第に大企業体に成長していきました。仙太郎はそんな多忙の中にあっても、長男の勤に種牛を輸入させて、優良なホルスタイン牛の飼育・普及を大事にしていました。国内の品評会では他の追随をゆるさず、優勝をかさねています。

1934年(昭9)6月7日、仙太郎は、畜産指導講習会で、北海道における家畜飼料について講義中、突然脳溢血で倒れたのです。その後回復はしますが、1940年(昭15)3月1日逝去。74歳の生涯でした。勲6等瑞宝章を授与されています。

★ 札幌村の開祖 大友亀太郎(1834~1897)を記念するもの

①「大友亀太郎像」(札幌市中央区北2条西1丁目)

昭和61年(1986)5月、農民彫刻家松田与一氏(上川管内東川町)制作による「大友亀太郎像」が、昔、「大友掘」と呼ばれた創成川沿いに建てられています。詳しい歴史説明の石版もあります。創成川通大規模工事(2005-2011)の期間、札幌村郷土記念館前に移設。復元後、札幌村郷土記念館保存会により、郷土記念館前にも、東区役所ロビー像を複製した「大友亀太郎像」が、新たに建立(2011.11)されています。

②「札幌村郷土記念館」(札幌市東区北13条東16丁目2-6)

昭和52年(1979)4月、地域の人々によって、大友亀太郎の札幌開拓の先駆的事業に関する資料、わが国の「玉ねぎ」栽培の先進地としての歴史的資料などを保存する資料館として開設されました。昭和62年(1987)2月札幌市有形文化財指定。記念館の敷地は、大友亀太郎役宅跡として史跡に指定されています。入館無料・10時~16時。(月曜日と祝日の翌日、年末年始は休館です)

③「大友公園」(札幌市東区北13条東16丁目3)

昭和42年(1967)、札幌市が土地区画整理事業により、この地に公園を設置しました。その際、厳しい北国の自然

と闘い、遠大な理想をもって開拓を進めた先人の偉業を偲ぶ記念公園として、「大友公園」と名付けられました。当時の歴史再発見の広場となっています。詳しい歴史説明板があります。

★ 日本畜産の指導者 エドウィン・ダン(1848～1931)を記念するもの

① 「エドウィン・ダン像」(七飯町庁舎内)(札幌市南区真駒内泉町1-6 エドウィン・ダン記念公園内)

1962年(昭37)設立「エドウィン・ダン顕彰会」(会長町村敬貴)により、ダンの銅像・記念館の建設、「エドウィン・ダン日本における半世紀の回想」(高倉新一郎編・昭37刊)の出版などが計画されます。この銅像は、彫刻家峯孝氏の制作により、昭和39年に建てられたものですが、明治初期に、ダンが畜産指導にあたった七飯官園と真駒内牧牛場との両地にあります。

② 「エドウィン・ダン記念館」(札幌市南区真駒内泉町1-6 エドウィン・ダン記念公園内)

エドウィン・ダン(1848～1931)の指導により、明治9年(1876)から建設に着手、真駒内牧牛場の施設が整備されて、本格的な酪農畜産がスタートしました。明治26年(1893)には、北海道種畜場になり、名実ともに、北海道の家畜改良や技術普及のセンターとしての役割を果たしてきました。しかし戦後、米軍が接収されたため、一時新得町に移転しました。その後、この由緒ある建物をぜひ残したいということになり、昭和39年10月、「エドウィン・ダン顕彰会」により、現在地に移設され、関係資料を展示することになったものです。

この記念館は、昭和40年から、一木万寿三画伯によるダンの生涯と業績を描いた絵画を中心に、北海道の開拓初期の写真、種畜場の模型などを展示しており、平成12年に、国の登録有形文化財に指定されました。建物は昭和40年、札幌市に移管され運営されていましたが、老朽化のため約8,000万円をかけて本格的な改修工事を行い、平成15年5月リニューアルオープンを機に、地元住民「エドウィン・ダン記念館運営委員会」、平成23年度から有志「エドウィン・ダンの会」により運営されています。入館無料・9時30分～16時30分。(毎週水曜日休館：11月4日～翌3月末日は金・土・日のみ開館しています。)

★ 日本酪農の父 宇都宮仙太郎(1866-1940)を記念するもの

① 「日本近代酪農発祥の地」碑(札幌市白石区菊水1条3丁目、現在菊水やよい会館前)

1902年(明35)～1927年(昭2)の25年間、20ヘクタールの宇都宮牧場(写真7頁)があり、サイロなどをもつ本格的な牧場で、ホルスタイン20余頭を飼育、牛乳販売・バター製造など、日本近代酪農の基礎を築きます。

② 「宇納農場」(札幌市厚別区上野幌1条5丁目1-6、現在雪印種畜園芸センター敷地)

1924年(大13)、もともと「出納農場」を、宇都宮仙太郎が参画して、デンマーク留学帰国の出納陽一と共同で「宇納農場」として開設。バター工場を造り本格的に製造を行う。現在は、○雪印乳業の前身・北海道酪農販売組合が1925年(大14)宇納農場の製酪所を借りてバター製造を開始した「雪印バター誕生の記念館」、○「酪聯発祥の地」碑(1958年・昭33 建立、黒沢西蔵書)、○マンサード屋根の美しい「出納邸」(出納陽一氏邸宅、1925・大14 建)、○札幌軟石のサイロ、などが保存されています。

■ あとがき

この「北海道開拓の基礎を築いた指導者たち」シリーズの原稿執筆にあたり、北海道近代化の歴史が、いかにアメリカの深い影響下に発展してきたかと驚きを新たにしています。開拓使設置、黒田清隆によるホーレス・ケプロンをはじめとする多くのアメリカ人指導者の招聘・・・今回の北海道酪農業の分野においても、エドウィン・ダンというすばらしい「アメリカ人」指導者なくし

では、その後の道筋はできなかつたでしょう。毎回資料を読みながら感動しています。

(執筆担当：中垣正史)

<主な参考文献及び参考資料>

- 「北海道酪農百年史—足跡と現状及び人物誌—」木村勝太郎著 樹村房 1985 □「ほっかい
どう百年物語」STVラジオ編 中西出版 □「札幌百年の人びと」札幌市史編さん委員会編
札幌市発行 □「ひらけゆく大地(下) 開拓につくしたひとびと」第四巻 北海道総務部文書
課編集 理論社刊 □「のびゆく北海道(下) 開拓につくしたひとびと」6 北海道総務部文
書課編集 北海道発行 □「北海道牛づくり百二十五年—町村敬貴と町村牧場—」蝦名賢造著
株西田書店 □「私の履歴書—21—町村敬貴」日本経済新聞社編集・発行 □「町村敬貴
伝」蝦名賢造著 町村敬貴記念事業の会発行 □「宇都宮仙太郎」黒沢西蔵著 酪農学園出版部
発行 □「牛飼いからの伝言—黒沢西蔵の生涯」仙北富志和著(非売品) □各地の現地
リサーチ資料 □インターネット資料など

北海道農業・酪農の基礎を築いた先駆者たちの足跡とその業績

—大友亀太郎、エドウィン・ダン、町村金弥、宇都宮仙太郎、町村敬貴、黒沢西蔵—

<「HOMAS」66号の続きとして、町村敬貴・黒沢西蔵を中心に、記述していきたいと思います。>

■ まえがき（前号と一部重複）

広大な緑の牧場が広がっていて、そこに牛や馬が放牧されている…これが、北海道の原風景のようなイメージの感がありますが、本稿はまず、その前史ともいべき幕末、明治の開拓使時代(1869～1882)の農業、牧畜・酪農の歴史をたどることから始めたいと思います。

北海道が「酪農王国」に至るには、まず、1876年(明治9年)、エドウィン・ダン(1848～1931)が、開拓使の招聘により来道して、札幌の原始林を切り開いて「真駒内牧牛場」建設に着手したことからはじまります。さらに開拓使廃止(1882・明治15年1月)後、町村金弥(1859～1944)がその運営を受け継ぎます。その長男町村敬貴(ひろたか)(1882～1969)を米国留学させます。敬貴は、きびしい酪農実習をして帰国した後、本格的な酪農経営に取り組みます。

時代が少し前後しますが、苦労を重ねて酪農業を立ち上げた宇都宮仙太郎(1866～1940)や黒沢西蔵(1885～1982)らの努力があって、後の雪印乳業設立の重要な役割をはたすこととなります。黒沢は、1933年(昭和8年)、江別に「酪農義塾」(現在の酪農学園大学)を設立しています。

以下、前号の続きとして、今回は、町村敬貴、黒沢西蔵の苦労とその業績にスポットをあてて検証してみたいと思います。(「HOMAS」66号の続きです。)

■ 町村敬貴

町村敬貴(ひろたか)(1882～1969)は、金弥の長男として、1882年(明15)12月20日、エドウィン・ダンが開設した真駒内牧牛場の官舎で生まれ、牛を愛する少年として幼少時代を過ごします。札幌農学校農芸伝習科入学時、アメリカ帰りの宇都宮仙太郎の牧場で、朝夕の乳絞りの実習をし、卒業後、1906年(明39)、両親と仙太郎に見送られて渡米します。米国に渡り苦労の末、仙太郎の世話により、ウイスコンシン州ラスト兄弟牧場で酪農実習、その間、かつて仙太郎も学んだ州立農科大学ショートコース(11月～3月・2年間)に学び、卒業します。このラスト兄弟牧場には、塩野谷平蔵(後、北海道酪農共同会社副会長)や宮脇富(後北大を経て帯広畜産大初代学長)も働いていたといわれます。敬貴は10年間に及ぶアメリカ酪農技術実習を体得して、1916年(大5)10月帰国します。

翌年父の援助を受けて、石狩市樽川に入植し「町村農場」を創設しました。この泥炭地の原野で、「土づくり・草づくり・牛づくり」の苦節10年の苦しい努力が続きます。親のすすめで結婚した妻志津と小作人数人ではじめたのでした。この間2度、種牛購入のため渡米し、ホルスタインの乳牛も20頭ほどになり、バター製造もするようになります。

1927(昭2)に、江別対雁(ついしかり)に移転しますが、ここは排水の悪い酸性土のため苦労を

重ねて、暗渠排水・石灰撒布など総合的科学的な土地改良の実践による酪農経営努力で、酪農王国北海道の基盤を確立したといわれます。1940年(昭15)には、北海道土地改良功労者として、北海道長官表彰を受けています。

種牛購入や農業機械化状況視察・農業機械導入のため、数度渡米しています。その輸入は前後6回に及び、種牝牛8頭、種牝牛30頭に及びホルスタイン種乳牛の改良に努め、その乳量品質の向上に大きく貢献しています。1941年(昭16年)「北海道興農公社」を設立、乳製品の統合、農機具・農業用石灰・排水用土管など一連の土地改良事業などの業界が一本化します。その後いろいろな委員の委嘱を受けますが、1944年(昭19)北海道種牛協会(後のホルスタイン協会)会長に就任。1945年(昭20)貴族院議員勅撰、翌々年参議院議員当選。1961年(昭36)江別市功労者表彰。1964年(昭39)勲三等旭日中綬章を賜る。敬貴は、昭和44年(1969)8月没、86歳の生涯でした。日本近代酪農のパイオニアとして北海道酪農葬・江別市葬が執り行われ、死後第1回北海道開発功労賞を授与され、また正四位勲二等瑞宝章を授賞しています。(なお、元北海道知事町村金五氏は実弟、現衆議院議員町村信孝氏は甥にあたります。)



江別市対雁(現いずみ野) 旧町村農場(現在資料館)



江別市篠津183 現在の「まちむら農場」

■ 黒澤西蔵

黒澤西蔵(1885-1982)は、1885年(明18)3月、茨城県の貧乏農家4人兄弟の長男として生まれ、尋常小学校(4年制)卒業後、隣人に漢学の手ほどきを受け、また漢学塾へも通います。いろいろな仕事をしてお金を貯めて、1899年(明32)14歳の時、東京に出て、神田数学院に住込み、独学で勉学に励みます。1901年(明34)12月10日、足尾銅山鉍毒事件で渡良瀬川に流れ込んだ鉍毒に苦しむ農民救済を訴えて明治天皇に直訴した代議士田中正造の正義感に打たれ、西蔵は新橋の「越中屋」に田中を訪ねます。事件の真相や経緯を理路整然と聞かされ、その正義感と人間愛の尊さ・崇高な人格に打たれ、自分の一生を支配してしまう出会いになったと後年述懐しています。黒澤少年は同士5,000人を集めて学生運動を起こします。過激思想の持ち主として警察に逮捕され前橋刑務所に6ヶ月収監されます。この間、鉍毒地救済婦人会・婦人矯風会潮田千勢子さんの聖書差し入れが、後にキリスト教に帰依するきっかけになったといわれます。田中の尽力や今村力三郎弁護士の努力により半年後にやっと無罪釈放となりますが、心配した田中が、「黒澤君は将来のために、正式に学校に入って勉強なさい」といって月々10円の学費を送ってくれるこ

とになりました。1903年(明36)その援助金で、正式に東京の京北中学(現京北高校)に学びます。田中への深い感謝・早く恩返しをしたい気持ちと酒飲みの父に代わって苦勞して家計をささえた母の死により、心気一転北海道へ渡る決意をします。

1905年(明38)8月1日、黒沢酉蔵20歳は、田中正造の紹介状を手に、北海タイムス社長の阿部宇之八(後の札幌区長(市長))を尋ねます。そこで、白石村で牛を飼っている宇都宮仙太郎を紹介されて、宇都宮牧場を訪ね、牧夫としての第一歩を踏み出します。酉蔵は、仙太郎の説く“酪農三徳”「牛飼いは三徳がある。第一に役人に頭を下げなくてもよい。第二に牛には嘘をつかなくてもよい。第三には牛乳が飲める。牛乳は人を健康にする。」という言葉に心酔したといわれます。牧場の朝は早く、午前4時には牛舎の仕事が始まり、牛舎の掃除・牛の餌・搾乳・牛乳配達・放牧・畑仕事などを午前午後と繰り返し夜の10時まで働き通しという忙しい毎日であったといわれます。1906年(明39)12月応召、月寒25連隊。模範兵となり2年で除隊。1908年(明42)札幌メソジスト教会で洗礼。教会で山鼻のリンゴ園主佐藤善七(佐藤貢の父)と知り合い、その紹介で酪農自営の第一歩を踏み出すこととなります。

1909年(明42)、牧夫として働き始めて4年の春、酉蔵は軍隊で貯めた24円を元手に、中央区山鼻東屯田村に5反歩の土地と牛1頭を借りて、牛乳販売を開始、「黒沢牧場」を興したのです。翌年には、郷里から弟妹等を引き取っています。苦勞の末、5年後には、ようやく自分のサイロを持ち、自分の家と17、8頭の牛舎を建てるまでになります。酉蔵は、酪農後継者には、いつも「家の者よりも必ず1時間早く起きて働け」と教えたといわれます。こうして酉蔵は、札幌を代表する酪農家の1人になっていきました。1915年(大4)に建てた家は1969年(昭44)まで住んでいました。

大正時代に入って、北海道農業は、開墾地の無肥料連作を長年続けたために地力が落ちてきたことが問題となっていました。官民あわせて、地力回復のため北欧有畜農業の検討をはじめ、宇都宮仙太郎・黒沢酉蔵らの進言もあり、「北海道第2期拓殖計画」として、道庁はデンマーク農家2戸・ドイツ農家2戸を5ヵ年契約で招聘します。デンマークのモーテン・ラーセン、エミール・フェンガー(札幌地区)とドイツのフリードリッヒ・コッホ、ウィルヘルム・グラバウ(十勝地区)の4家族が招かれたのでした。<これについては、「HOMAS」54号に詳述>

* 北海道農業は、新しい肥沃な原野の開墾地での、無肥料連作を長年続けたために、大正時代に入って次第に地力が落ちてきます。大正6年(1917)、道庁農政担当者と札幌酪農組合畜牛研究会とが中心になって地力回復のための有畜農業の検討をはじめ、「北海道第2期拓殖計画」として、北欧の有畜農法を北海道農業経営の参考として取り入れることとなります。米国留学の酪農家の宇都宮仙太郎(1866~1940)、黒沢酉蔵(1885~1982)、酪農学園大学・現とわの森三愛高校の創業者らの進言もあり、北海道庁(第16代長官、宮尾舜治)も、主穀農業から主畜農業に転じたデンマークの大成功に注目します。

大正11年(1922)から長期派遣で、道庁担当職員の山田勝伴・相原金治・神田不二夫と音江(現深川市)酪農組合長深沢吉平の4名の産業調査員がデンマークに派遣されていた間に、デンマーク模範農家招聘という道の方針が出て、その人選が進められることになりました。大正12年(1923)、北海道庁は、デンマーク人農家2戸、ドイツ人農家2戸を5ヵ年契約で招聘し、札幌

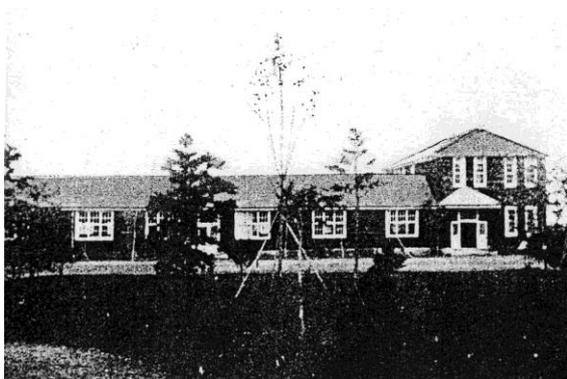
近郊と十勝地区で模範経営を行わせることとしました。デンマークでは165名の応募者、ドイツでは8名の候補者の中から、4戸を決定。十五町歩農家としてデンマークのモーテン・ラーセン(1890~)〈33歳・4人家族〉と助手スヨンナゴー(1900-1963)(札幌真駒内種畜場内耕地)。五町歩農家としてエミール・フェンガー(1902~)〈31歳・4人家族〉(札幌琴似村農事試験場内耕地)を招きます。また十町歩農家としては、ドイツのフリードリッヒ・コッホ〈43歳・6人家族〉(十勝清水)とウイルヘルム・グラバウ〈30歳・4人家族〉(帯広)の4家族が招かれています。

これにより、北方農業のあり方、とりわけ酪農振興への機運が高まりました。西蔵は、「家畜の糞尿は農家の銀行である」というのが持論でした。1925年(大14)5月、「北海道製酪販売組合」を設立します。牛乳販売だけでなく、生産・加工・流通までを一貫して行い、その利益を酪農民に配分するという発想でした。組合長宇都宮仙太郎、国産バター製造技師はアメリカ留学帰りの佐藤貢、販売担当専務は黒沢西蔵でした。東京をはじめ、各地を回っても、ブランドがないため苦労が続きしました。

1926年(大15)秋、JR苗穂駅近くに最新式の装置を導入して新工場を竣工。品質も飛躍的に向上、チーズ製造も開始します。そしてこの年の暮れ、雪の結晶の中に北斗星が輝く「雪印」のマークを制定しています。

1933年(昭8)、次代を担う若者に酪農業を学ばせるために、江別に「酪農義塾」(後の酪農学園)を設立します。西蔵は塾長となり、建学の精神として「健土健民」の重要性を唱えました。これは、「日本の国土を肥沃にすることで、国民の体も心も穏やかになっていく。それが酪農の基本である」という田中正造の農業中心の思想から生れたものといわれます。

1942年(昭17)、江別市文京台の広い土地を得て、「野幌機農学校」設立します。「機を知るは農の始めにして終りなり」(一九六二、一〇 黒澤西蔵書)の銅版が校舎にはめこまれています。



「北海道酪農義塾」(昭和8年開塾当時)



「野幌機農学校」(昭和17年開校当時)

そして、1958年(昭33)、デンマークのグランドビー牧師の「愛神愛人愛土」(神を愛し、人を愛し、土を愛す)という「三愛精神」を建学の精神として「三愛女子高等学校(現とわの森三愛高校)」を設立。

さらに、1960年(昭35)「酪農学園」(現酪農学園大学)を設立したのです。

酉蔵は、酪農振興は「先づ教育から」との卓見に基づき、範をデンマークに求め、酪農義塾を母体として、機農高校・酪農学園を設立したのです。

こうして、わが国におけるユニークな酪農専門の学園として大きく発展させ

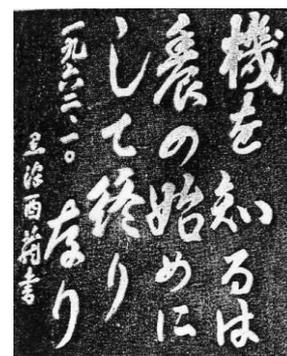
たのです。また、酉蔵は、育英資金にも惜しみなく私財を注ぎ込んでいます。

1930年(昭15)宇都宮仙太郎没後、第2代組合長に就任、事業を全国ブランドにし、規模を拡大して海外にも輸出します。(1950年・昭25、社名を「雪印乳業株式会社」と改めます。)

その後、1940年(昭15)「北海道興農公社」の初代会長、次いで、(株)雪印乳業相談役、北海タイムス社長などを務めています。北海道議会議員・衆議院議員を歴任、北海道開発審議会会長を1954年(昭29)から16年間務めています。1969年(昭39)勲3等旭日中綬章、1970年(昭45)勲2等旭日重光章、1981年(昭56)勲1等瑞宝章を授章しています。酉蔵は、北海道酪農の振興に生涯を捧げて、1982年(昭57)2月7日、96歳で永眠しました。



1962年(昭和37年)



校舎にはめこまれた銅版

★ 日本ホルスタインの父 町村敬貴(1882-1969)を記念するもの

① m旧町村農場(江別市対雁・現在江別市いずみ野25)

町村農場は、1917年(大6)石狩樽川で創業。1928年(昭3)江別対雁へ移転しています。ここに北海道酪農先駆者町村敬貴氏の町村農場の建物を移築。昭和初期のキング式牛舎・サイロなど、当時の酪農に関する資料や農機具などを展示しています。1996年(平成8)から、資料館として無料公開されています。

町村敬貴像は、1973年10月(昭和48年)、町村敬貴記念事業の会(会長佐藤貢)から産業共進会場(豊平区月寒東3-11)に寄付、敷地内に設置され、1996年(平成8年)旧町村農場に移設。(銅像制作者は、「エドウィン・ダン像」と同じ 峯 孝)



② 現在の町村農場(江別市篠津183)

現在の町村牧場は、農場165ヘクタール。乳牛約380頭を飼育して、牛乳・バター・チーズ等の乳製品を生産しています。

★ 北海道酪農の父 黒澤酉蔵(1885-1982)を記念するもの

① 黒澤記念講堂(酪農学園大学構内・江別市文京台緑町582-1)

1984年(昭和59年)12月、酪農学園創立50周年記念事業として建設。講堂入口のロビーに、多くの資料写真などが展示されています。

- ② 黒澤酉蔵77歳の時、1962年(昭和37年)10月、酪農学園創立30周年記念事業として、「黒澤酉蔵寿像」が建立されました。現在は、講堂前にあります。(銅像制作者は、旭川出身の加藤顕清) * 寿像(じゅぞう)とは、その人の存命中に作っておく肖像彫刻(statue of a living person)



③ その他、「酪農学園史」(1980・昭和 55 年 9 月)、「酪農学園創立五十周年記念誌」(1983・昭和 58 年 10 月)の写真ページが、貴重な資料として参考になります。

■ あとがき

現在、札幌のスーパーマーケットには、広大な北海道各地の酪農の現状を示す、多くの種類の牛乳が並んでいます。「雪印メグミルク」「サツラク牛乳」「倉島牧場牛乳」「豊富牛乳」「よつ葉十勝牛乳」「森永牛乳まきばの空」「明治おいしい牛乳」「函館牛乳」「登別牛乳」「町村農場特選牛乳」などなど。(執筆担当：中垣 正史)

<主な参考文献及び参考資料>

- 「北海道酪農百年史—足跡と現状及び人物誌—」木村勝太郎著 樹村房 1985
- 「ほっかいどう百年物語」STVラジオ編 中西出版
- 「札幌百年の人びと」札幌市史編さん委員会編 札幌市発行
- 「ひらけゆく大地(下) 開拓につくしたひとびと」第四巻 北海道総務部文書課編集 理論社刊
- 「のびゆく北海道(下) 開拓につくしたひとびと」6 北海道総務部文書課編集 北海道発行
- 「北海道牛づくり百二十五年—町村敬貴と町村牧場—」蝦名賢造著 (株)西田書店
- 「私の履歴書—21—町村敬貴」日本経済新聞社編集・発行
- 「町村敬貴伝」蝦名賢造著 町村敬貴記念事業の会発行
- 「宇都宮仙太郎」黒沢西蔵著 酪農学園出版部発行
- 「牛飼いからの伝言—黒沢西蔵の生涯」仙北富志和著 (非売品)
- 「酪農学園史」学校法人 酪農学園発行
- 各地の現地リサーチ資料
- インターネット資料など

「北前船」交易の歴史と蝦夷地に繁栄をもたらした豪商たち ー北海道航路の船主たちー 銭屋五兵衛・高田屋嘉兵衛・小納宗吉 他ー

<2回に分けて掲載します。今回は「北前船」の概説とし、北海道各港に繁栄をもたらした船主たちは次回に譲ります。>

■まえがき

今日の歴史ブームの中で、マスコミ報道や各地の地域振興策として、昔の多くの人物や歴史の事実が誇大にとりあげられ、その偉大さを強調している傾向があるように思われます。こうした商業主義に流されることを懸念しています。ここではしっかりと資料を読み込み、確かな歴史を掘り起こしていきたいと考えています。

■時代背景

日本海は、世界的視野では小さな海です。大西洋の属海カリブ海約半分の広さでありました。また、内海である地中海の3分の1の広さしかない。もともとは、アジア大陸の東縁部であった陸地が数万年前に陥没して内海となり、やがて海峡によって外海と通じるようになった海といわれます。間宮海峡、宗谷海峡、津軽海峡、対馬海峡、関門海峡の五つの海峡があります。日本海峡には、対馬暖流が日本列島沿いに北上し、やがて冷やされてリマン寒流となって大陸沿岸を南下するという海の道があり、古くから人々の往来・交易が発達してきたようです。

今回は、この日本海を主な舞台とした交易の歴史、特に近世から近代にかけて、北海道から本州の各港を経て大阪の間を往還した、ニシン(鯨)鰯・粕・昆布や米・木材などを運ぶ大動脈の主役「北前船」(きたまえぶね)に、スポットをあててみたいと思います。この北前船の存在なくしては、蝦夷地開拓も大阪の昆布の食文化も育まれなかったでしょう。そしてまた、昆布は、薩摩藩の財政を潤し明治維新へのパワーを蓄積させたといわれています。

蝦夷地(北海道)の近代化は、明治政府の開拓使設置(1869年<明治2年>7月)によって本格的にすすめられますが、この開拓使時代以前の、北前船交易による日本海沿岸各港町の繁栄の歴史をたどってみたいと思います。

■北前船の歴史

北前船(きたまえぶね)は、江戸中期に発生し、明治30年代まで大阪と蝦夷地を結ぶ日本海航路に就航した廻船です。一枚帆の大きな白帆に風をはらみ、季節風と潮流に乗って日本海を往来したのでした。1639年(寛永16年)加賀藩3代当主前田利常による大阪への藩米輸送が西回り航路の最初であったといわれます。

北前船は、大阪から瀬戸内海を経て、北陸・東北の木材や米穀などを蝦夷地に輸送、そして蝦夷地からは干魚・塩魚・魚肥(鰯粕)・昆布などの海産物を上方に運びました。

上方から北海道へ向かう船には、塩・鉄・砂糖・綿・反物・畳表・蕙などの雑貨も積み込まれ、これを「下り荷」とよびました。大阪から北海道へ向かう船は、大阪を出ると瀬戸内海の各港で特産品などを買い入れ、四国の金毘羅様に参詣してから、下関をまわって日本海にでて、山陰地方や若狭・越前の各港で商売をしながら北上し、能登から佐渡や新潟、酒田などを経て、順調なら半月ばかりで松前三港(箱館、福山、江差)の入港したようです。三港には、沖口番所があって、出入港取締りがありました。航路は次第に北上して、小樽をはじめ遠くは利尻島などにも行く船が多くなったようです。北海道から大阪へ向かう船は、「登り荷」と呼びました。これは、積荷の売りさばきは瀬戸内海に入ってからが主で、松前を出たら一気に佐渡を目指し、能登、隠岐と飛び石に渡って下関から瀬戸内海に入る場合が多かったようです。

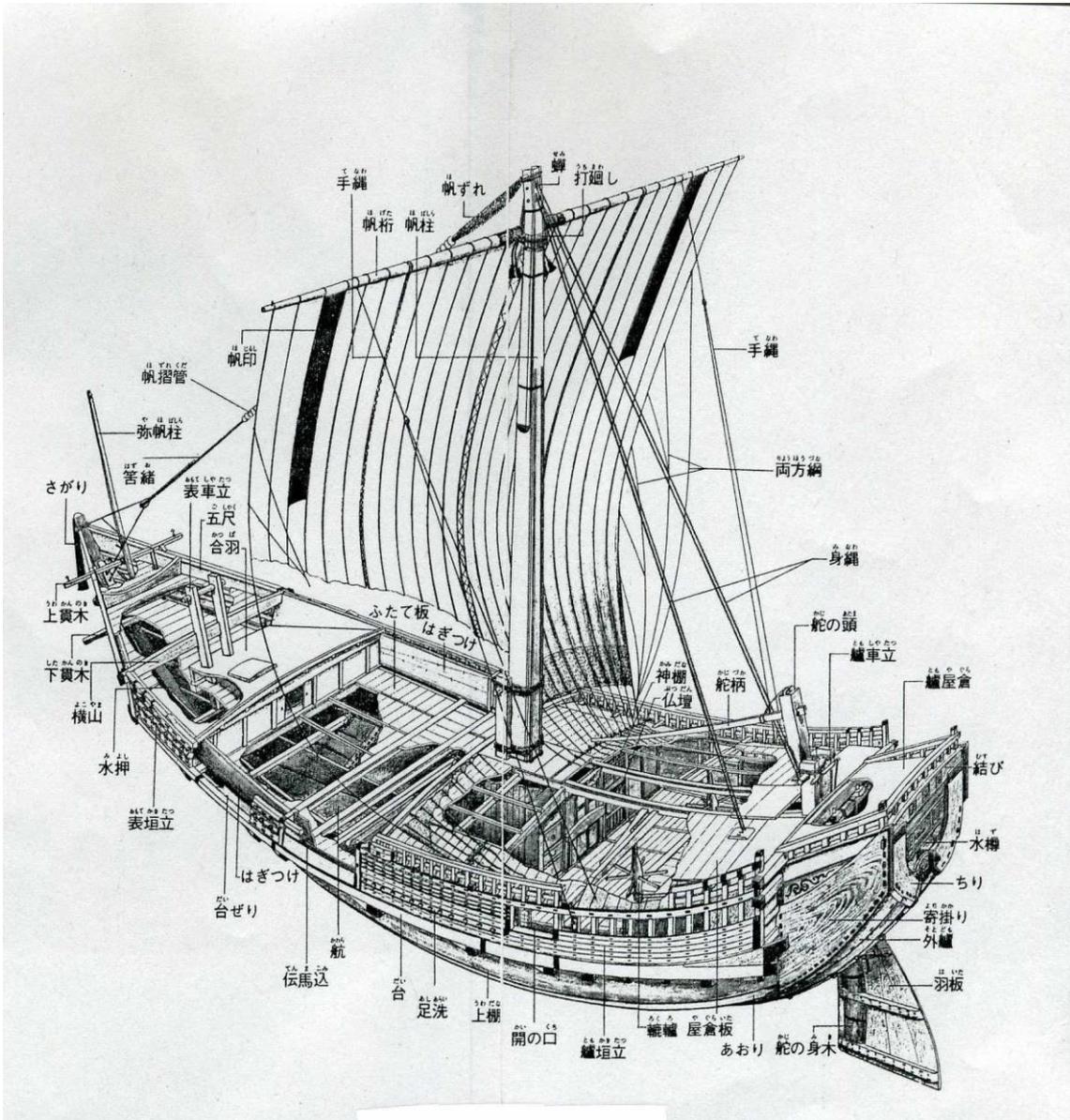
当時、荷主の依頼によって荷物を運送するのを「運賃積み制」と呼びました。そして船主が荷主をかねて、港々で商売しながら運航する形態を「買積み制」と呼びました。北前船は、運賃で利益を稼ぐ太平洋側の「運賃積み」とは異なり、船頭の才覚で、安く仕入れた品を別の場所で高く売り捌く「買い積み」制が主流の廻船でした。

船には、特に定まった船型はなく、「北国船」「大和船」「ドングリ船」などがあり、特に安永～寛政年間から増えはじめた「弁財船」がよく知られています。弁財船は、厚い船底板を基盤とし、幅の広い板を組み合わせて外回りを作り、内側に多数の船梁を入れて船体に強度を持たせた構造です。さらに日本海の荒波を乗り越えるために、船首の反りがより大きくなり船底をより厚い堅牢な造りとした、日本海沿岸特有の北前型「弁財船」となりました。

この北前船に使用された「弁財船」は、千石船といわれていますが、実際は300石～800石船が一般的だったようです。(高田屋嘉兵衛の辰悦丸1500石は、きわめて特殊な大型船といえます。)

北前船経営の利益はとても大きく、利益10割以上といわれ、700石船の往復で2千～4千両の純利益があったとされます。利益10割・つまり倍儲かる「バイ船」とも呼ばれました。弁財船の建造費は、千石船で約千両と概算されていますので、日本海の荒波を乗り越える航海の危険もありますが、その原価償却は1航海で可能であり、大船主は1年で20万両という大きな利益をあげ、「豪商」の地位を築いた例もあったようです。

北前船の船頭は、小規模経営の船主が直接経営にあたるのは「直乗船頭」とよばれますが、一般的には大船主が雇用する「雇船頭」が多かったようです。1ヵ年の給料は賃積船で35～50両であったのに対して、北前船ではなんと3両程度でした。それには「帆待(ホマチ)」という別途収入が約束されていたからでした。ホマチは、北前船では船主から公認されたもので船主荷物の1割にあたる分を、船頭個人の荷として買積みすることが許されたものでした。船頭の裁量により各寄港先で販売した帆待荷収入は、1年間2往復4回の取引で600両～800両にもなるもので、「船頭」にとってこの帆待収入は、将来船持ちにも成長できる魅力あるものであったといわれます。また、「知工」以下以下の船乗りたちにも、船主の積荷の約1割が「切出し」として別途収入が認められていました。



「日本海繁盛記」(高田 宏著 岩波新書)より転載

北前船の乗組員は、千石積みの船で 14 人くらいとされ、船での役割(階層)が下記のように決まっていました。

- | | |
|------------|---------|
| 炊 (かしき) | 炊事・雑用 |
| 若衆(わかいしゅう) | 航海作業一般 |
| 親父(おやじ) | 若衆の現場指揮 |
| 片表(かたおもて) | 表の補佐 |
| 表 (おもて) | 航海士 |
| 知工(ちく) | 事務長 |
| 船頭(せんどう) | 船の最高責任者 |

船中では米・みそ・薪は船持ちで、副食は船乗りの負担でした。食事は、賄いのチーフ「親父」の指図で塩・たくあん・みそを主として作られたようです。時には自分たちで獲った魚を食べることもあったようです。食事は胴の間で一緒にたべますが、「船頭」だけは二畳くらいの小さな特別の部屋を持ち、神棚や仏壇もありました。飲料水は一番大切なもので、トモの最後尾の大きな水桶に入れていました。また船中には特別なトイレはなく、多くは外艫(最後尾で櫂のあるところ)のあたりで海中に落としたようです。

北前船の運航は、旧暦3月～8月の間、2往復を定法とし、秋～冬は荒海をさけて、大阪の木津川・敦賀・出雲崎などで冬囲いと称して、その間は翌年の海あけにそなえて、船の修繕にあてています。

こうして、長い航海を終えて大阪に戻った北前船の船頭や船乗りたちは、船の繫留・冬囲いを終えた後、早春に来た道を逆に歩いて郷里の北陸路へ戻ったのでした。その年の航海の無事と商売の成功を感謝しながら、家族への土産物を詰めた柳行李を背負っての晩秋の帰宅となったようです。

■北前船が運んだもの

海上の道が唯一の交通輸送手段であった時代に、北前船の海上交易によってもたらされたものは、食料・衣料・家具や調度品などの生活物資だけではありませんでした。蝦夷の各港に定住するようになった商人たちによって、上方・北陸などを基調とした日本文化・伝統芸能などがもたらされ、蝦夷地(北海道)発展の基盤が形成されていきました。いわば、「日本海ハイウエー」を上下した北前船は「板子一枚下は地獄」といわれた命がけの航海でしたが、その代償として巨万の富と文化を蝦夷地に運んだ宝船だったといわれます。

■あとがき

この「北海道開拓の基礎を築いた指導者たち」シリーズの原稿執筆にあたり、毎回多くの資料を読みながら、その濃密な歴史に感動しています。

今回のテーマ「北前船」が運んだ「ニシンメ糟」や「昆布」の背後にある、北海道日本海岸の「ニシン漁の隆盛」、「昆布ロード」の歴史などについては、とてもここに簡潔にまとめることができませんので、次回に譲ることとし、稿を改めたいと考えています。

北太平洋を回遊するニシンは春になると南下し、やがて日本近海に姿を現します。特に江戸時代後期から明治にかけては、北海道の日本海沿岸部に大量に押し寄せ、産卵のために海岸を真っ白にして群来(くき)てくる、ニシン大漁の最盛期を迎えたのでした。各沿岸には、本州各地から集まった労働者が寝泊りする「番屋」が建ち並びました。また、このニシン千石場所として賑わった各地の港には、街並みや商家もできて、その発展隆盛の象徴として、「にしん御殿」と呼ばれる豪壮な建物が建てられたのでした。

しかしニシンの不漁が続き、番屋も次々と姿を消して、いつかその賑わいも去り、こんにちでは、各地の「にしん御殿」だけが往時の活気を伝えるものとして保存されています。(執筆担当：

中垣正史)

<主な参考文献及び参考資料>

- 「北前船の研究」 牧野隆信著 法政大学出版局 1989 「北前船 日本海文化と江差」 江差町教育委員会編 北前船編集委員会発行 「日本海繁盛記」 高田 宏著 岩波新書 1991 「新版 北前船考」 越崎宗一著 北海道出版企画センター 1972 「日本海こんぶロード 北前船」 読売新聞北陸支社編 能登印刷出版部 1997 「北前船長者丸の漂流」 高瀬重雄著 「ほっかいどう百年物語」 STV ラジオ編 中西出版 各地の現地リサーチ資料 インターネット資料など

「北前船」交易の歴史と蝦夷地に繁栄をもたらした豪商たち(2) —北海道航路の船主たち— 高田屋嘉兵衛・銭屋五兵衛・小納宗吉 他—

<「HOMAS」68号の続きとして、北前船航路の船主たちを中心に記述していきたいと思います。>

■まえがき

江戸から明治にかけて、北海道・東北・北陸と大阪・京都を結び、さらにその先世界へと続く黄金の「海道」があり、その主役が「北前船」(きたまえぶね)でした。この「北前船」は、さまざまな物と人と文化を運び、近代文明の礎となったといえます。

後には、「昆布ロード」と呼ばれ、蝦夷各地の昆布が日本の食文化の革命を起こしたといわれます。「秋田おぼろ昆布」「富山ニシンこんぶ巻き」……「京都ニシンそば」と各地の食を変え、日本料理最大の革命「ダシ」となり、昆布は、京料理・日本料理の味の基本となります。

北前船の往来で運ばれたのは、北海道からの鰯粕、昆布だけではなく、各地からの食料、生活用品、薬草、祭りなど、そして船を安定させる重石として運ばれた石材・瓦などもあり、これらが、日本全国各地の生活を大きく変えていきます。全国各地から次のようなものが運ばれました。

加賀の建蕨、越後の縄・米、秋田の実子縄、越前富山の干蕨、信越の輪島塗・山中春慶塗・九谷焼、山陰の松江茶・宍道湖燈籠・蹲(つくばい)、北陸の屋根瓦・すり鉢・若狭蕨・敦賀ろうそく・傘、九州の有田焼(茶碗)・薩摩焼(花瓶)、瀬戸内の酢・塩、大阪の木綿・雑貨・白砂糖、灘の酒などがあげられます。

北前船による交易は、物価の情報をいち早く入手して、各寄港で大きな商売をしながら大阪と北海道を往来することにより、「一航海千両」といわれる大きな利益を上げた豪商船主を産み、日本海沿岸各地に繁栄をもたらして、文化の花を咲かせたのでした。

今回は、北海道近代化の歴史と重ねて、この日本海を主な舞台とした「北前船」による交易で、日本海沿岸の各港町の繁栄をもたらした船主にもスポットをあててみたいと思います。

■松前藩の成立

歴史的にはかなり古くから、アイヌ民族が本州東北部から北海道・千島列島・樺太(サハリン)を生活圏としていたようですが、14~15世紀の道南には多くのアイヌ集落があり、和人(シサム・シャモ)集団との交易が盛んに行われていたようです。また道南地域には、津軽の十三湊(とさみなと)を拠点とした安藤(安東)氏配下の豪族による、12の「館」(たて)〈城砦・拠点〉を中心とした和人集落がつくられて、蝦夷(アイヌ)との産物の交易で繁栄し、その活動は日本海一帯から大陸にまで及んでいたと思われます。しかし、和人によるアイヌ人刺殺事件を発端として、コシャマイン酋長を中

心とするアイヌ人側が12の「館」(たて)を激しく攻撃し、その結果、和人10館(たて)が敗れて、やっと下之国茂別館・上之国花沢館の2館(たて)が勝ち残ります。その後、上之国の守護武田(蠣崎)信広がコシャマイン酋長父子を弓で射殺、アイヌ軍が崩壊して戦いが終結したといわれます。

こうして、武田(蠣崎)信広(松前藩の祖)が道南の館主の覇者となり、第5代武田慶広のと

きに豊臣秀吉や徳川家康から、独立した諸侯とみとめられて姓を「松前」と改め、「福山城」（松前城）を築城して、「松前藩」の成立となります。松前藩は、米がとれないことから「無高（むだか）の藩」と呼ばれ、海産物・毛皮などの交易で繁栄を築いていきますが、シャクシャインの戦い、クナシリ・メナシの戦いなどアイヌ民族との抗争も続きました。アイヌ交易の独占的な権利を得た松前藩は、交易を拡大し、松前・江差・箱館の「松前三港」を拠点として繁栄します。やがて、天明期（1781～1788）ころから、北前船の出現により、寄港地も多くなりますが、箱館に入港する船が急激に増加するようになり、天明5年（1785）には、長崎俵物会所が箱館に置かれて、「箱館」が俵物集荷拠点となり発展していきます。松前藩は、幕末に勤王派となったため、箱館戦争（1868-69）で土方歳三の旧幕府軍の攻撃によって落城します。そして明治2年（1869）版籍奉還を願い出て、260年余の歴史の幕を閉じます。そして明治4年（1871）、廃藩置県により「館県」となります。

■箱館港の発達

江戸中期からロシアの南下政策で、ロシア船が各地に寄港を求めてきますが、松前藩は、国法により交易できないと通告していました。しかし、寛政元年（1789）6月、ロシア使節アダム・ラスクマン一行が箱館に入港。これが箱館に入港した最初の外国船でした。寛政8年（1796）9月、イギリス航海士ブロートンのプロビデンス号が内浦湾に来航。（この時、ブロートン船長が有珠山や駒ヶ岳などの火山群に驚き「ボルケイノーベイ（噴火湾）」と命名したといわれます。）度重なる蝦夷地近海の外国船出沒に対して、幕府は北方警備が急務であるとし、寛政10年（1798）蝦夷地直轄の方針を決定します。幕府は寛政11年（1799）東蝦夷地を松前藩から上知させて直轄し、箱館に蝦夷奉行（のち函館奉行に改称）を置きました。対外警備のため、第一に釧路・根室への沿岸道路の開削を急ぎ、官船も準備しました。あわせて西蝦夷地の交通条件も駅遞を設けるなどして幕府直轄後に大きく改善されました。（その後まもなく伊能忠敬・間宮林蔵らの測量により、ほぼ完全な北海道全図ができます。）蝦夷地の生産増強・農耕をすすめるために八王子からの屯田兵を入植させたがあまり成功しなかったといわれます。それから、場所請負人の搾取を排除するべく、蝦夷地交易の改革「幕府直捌（じきさばき）」を実施しています。さらに、キリスト教などの侵入を防ぐために、東蝦夷地全体に五カ寺が計画され、有珠の浄土宗善光寺（文化元年1804）、様似の天台宗等樹院（文化元年1804）、厚岸の臨済宗国泰寺（文化2年1805）の蝦夷三官寺が建立されました。のちに、善光寺末寺として、宗谷に北蝦夷地最大の寺院として浄土宗護国寺（安政3年1856）が建立されます。

蝦夷地が幕府直轄地となって、箱館奉行所（享和2年・1802）が、重要な拠点となります。国後・択捉を含む東蝦夷地全域の産物が直接箱館に集荷されるようになります。高田屋嘉兵衛の択捉漁場開発もこうした状況下で幕府の命令によって行われたのでした

「北前船」の交易ルートは、北海道南部だけでなく、早くから千島列島にまで延びていました。嘉兵衛以前の千島ルートを中心人物は飛騨屋久兵衛でした。松前藩から、根室周辺の漁業権を与えられ、根室と千島さらにロシアとの交易（密貿易）もしていたようです。千島アイヌの仲介で、日本からは米・酒・鉄鍋など、千島・ロシアからはラッコや海獣の毛皮などが扱われていました。

■高田屋嘉兵衛

ここで、北洋漁業の先駆者、高田屋嘉兵衛(1769～1827)の生涯をたどってみたいと思います。高田屋嘉兵衛は、明和6年(1769)、淡路国百姓弥吉の長男として生まれています。＜北海道開拓使設置のちょうど100年前です。＞嘉兵衛は、貧しい8人家族の長男として、12歳の時奉公に出ます。淡路島の奉公先雑貨商「和田屋」で商売のコツを学び、寛政2年(1790)21歳の時、兵庫港に出て舟稼ぎをやり、24歳で沖船頭となり回曹業を営むようになります。寛政8年(1796)3月、「辰悦丸」(1,500石積)を新造して、27歳ではじめて船主となり、箱館港に入港。その後南千島・国後・択捉との交易・開発事業のため運航することになります。

以後、蝦夷地の産物との交易のため毎年箱館に来港するようになります。寛政10年(1798)には弟金兵衛を支配人として箱館大町に支店を設け、5艘の所有船で兵庫・大阪・下関と箱館を往復するようになりました。寛政12年(1800)高田屋嘉兵衛は、弟金兵衛とともに辰悦丸に乗り、6艘を率いて択捉島へ渡り、17ヶ所の漁場を開くことに成功します。その後、嘉兵衛は、官船5曹の建造を命じられ、ただちに大阪に下ってこれを造船し、翌享和元年(1801)4月箱館と兵庫を拠点に「蝦夷地定雇船頭」として官船及び官雇船のすべてを一手に支配して、千島方面の運航に当たったといわれます。帝政ロシアの最初の遣日使節としてラクスマンが寛政4年(1792)根室に来航、翌年6月江戸幕府宣諭使との会見を求めて松前に来航しますが、松前藩は長崎が外国との交渉窓口であるとして、ロシア側の信書を受理していません。そして、文化元年(1804)、ロシア使節レザノフが食糧補給のため、日本との通商を要求して長崎に来航しますが、幕府は鎖国を理由に、通商を拒絶。その結果、文化3～4年(1806～1807)ロシアは樺太・択捉を襲撃します。その後幕府は西蝦夷地も直轄し、南部・津軽藩さらに秋田・庄内藩からも出兵を命じて警備を強化しています。

こうした日露の緊張下で、文化8年(1811)5月4日、千島測量中のロシア船ディアナ号艦長ゴロウニン海軍少佐以下8名が国後島に上陸したところを、幕府役人が捕縛するという事件が起きました。ゴロウニンらは、根室から陸路護送されて7月箱館に着き、8月松前へ移され、2年3ヶ月拘禁されることとなります。ゴロウニンは、帰国後の「日本幽囚記」で、松前と箱館での2年3ヶ月余りの幽閉生活で出会った日本人の印象について「天下で最も教育のある国民である。日本には読み書きのできない者や、自分の国の法律を知らない者は一人もいない」と述べています。同じ文化8年(1811)8月14日、高田屋嘉兵衛は、観世丸で択捉から箱館への帰路、国後ケラムイ岬沖で、ディアナ号のリコルド副艦長に発見され、ロシア側に拿捕されます。

こうして、嘉兵衛が、随員の5人と一緒にカムチャツカに翌年春まで拘束される事件がおこります。しかし、その拘束期間、嘉兵衛は、その率直さと正直な態度でリコルドの信頼を得るようになったといわれます。文化10年(1813)5月、リコルドは、嘉兵衛らを連れて、国後で幕府とロシア側の交渉を開始します。嘉兵衛は、人質としてではなく、調停役として、カムチャツカで学んだロシア語を駆使して、日露の交渉・調停に尽力し、ゴロウニンの釈放と高田屋嘉兵衛自身の帰還が実現します。このゴロウニン事件を機に、ロシアとの関係は改善され、緊張状態は緩和されたといわれます。その結果幕府は、直轄していた蝦夷地を文政4年(1821)、松前藩に返

しています。この嘉兵衛の努力によって、その後の日露の交易も好転して盛んになりました。嘉兵衛は、こうして箱館の町を発展させ、北洋漁業のみならず日露の民間外交の基礎を築いた人物として高く評価されています。しかし、嘉兵衛は、このロシアの抑留生活で、体調をくずし、5年後の文政元年（1818）50歳の時、箱館の店と高田屋の事業すべてを弟に譲り、22年間滞在した箱館を去りました。その後、郷里淡路島で余生を送り、文政10年（1827）、59歳で、この世を去りました。その後高田屋は、天保2年（1831）、ロシアとの交易について、幕府の厳重な取り調べを受け、結果的に所有船12隻すべてを没収され、船家業差し止め、所払いの処分を受けて没落の悲運をたどっています。



北前船

〈北前船の主要航路〉
 年貢米を運ぶため、
 瑞賢が1672年に
 上方、江戸へ行く「
 海道と北陸を往来
 船」の航路と結びつ

千石船の乗組員は11~13
 人程度。船員には固定給のほ
 かに「帆待ち」や「切出し」と
 いう歩合給のような収入が
 あり、これが北の荒海へ挑む
 原動力となった。

「弁財船」と呼ばれる一枚帆の和船を発達さ
 せていった。船の長さ(20~30m前後)な
 どで決まる出入港税を安くするため、船首
 と船尾が反り上がっているのが特徴。荷物
 をたくさん積めるように、幅が広い「すんぐ
 り」とした形になっている。

春に大阪を出港し、秋に戻る1年1往

1857年の北海道産物(ニシン粕や
コンブなど)の積み出し地



北前船と北海道

北海道から移出される産物の大半が日本海を経て京阪に運ばれていた。稲作が定着していなかった北海道からの移出品は、関西を中心に各地の郷土料理に欠かせないコンブやニシンなどの海産物が占めていた。特に、肥料として使われる安価なニシン粕は需要が高く、急速に発達していた西日本の農業を大きく支えた。北海道の人々は大切な収入源のニシン「鱈」を、「ニシンは魚に非ず、米である」という思いを込めて、「鱈」とも表記したという。ニシン粕を肥料に育てた綿の衣料は、北前船で日本海沿岸に運ばれた。着古した綿製品を裂いて織った「裂き織り」と呼ばれる再生衣料が今も各地に残されている。

の主な寄港地と産物

上り荷 → 下り荷



(左 28 頁—右 29 頁は、見開きでご覧下さい)

■銭屋五兵衛

海の豪商といわれた銭屋五兵衛は、1773年（安永2年）11月25日宮越（金沢市金石）の商家の長男として生まれ、幼名を茂助といい、家督を継いでから五兵衛と名乗ります。祖父の五兵衛は材木商を営んでいましたが、その実子弥吉郎が家名を相続して、長男茂助に譲り伝えたのでした。父弥吉郎（第6代五兵衛）の時に両替商を営み、屋号を「銭屋」としたのでした。（詳細の経緯は省きます。）

17歳で家督を継いだ第7代五兵衛（茂助）は、次第に呉服、古着商、質商、木材商、米穀の間屋などにも経営を広げます。そして39歳の時、質流れの120石の古船を入手し海運業を始めます。その後、松前交易の北前船主となり、「海の豪商」といわれる大きな資産を築いたのでした。最盛期には、2500石積4艘を始めとして200数十艘の持ち船があったといわれます。江戸・大阪・兵庫・長崎・新潟・酒田・弘前・青森・箱館・松前など34港に支店を置き、168人の店員が活動していたといわれます。

また、鎖国時代にあつて、朝鮮、樺太、ロシアとの交易をはじめ、沖の江良部島での対英貿易、オーストラリア・タスマニア島やアメリカ渡航説などもあり広く海外密貿易をしていたともいわれています。しかし1836年（天保7年）62歳の時、長男喜太郎商売を任せて隠居しています。

晩年の五兵衛は、船は「浮き宝」で不安定なので、安全な陸上に資産の基礎を築きたいと考えていました。五兵衛は、多額の御用金を納めて加賀藩の財政を潤したといわれます。そして晩年、河北潟の干拓を加賀藩に願い出て、銭屋五兵衛の負担で潟を干拓し新田開発を進めます。しかし、沿岸漁民の反対で干拓作業が難行しているうちに、潟に死魚が浮き・中毒死者も出るという事態が起こり、工事2年目にして事態は一転、潟への毒物投入の疑いで銭屋一家は検挙され、加賀藩により家名断絶・財産没収となります。現在の貨幣価値で約6千億円といわれます。工事責任者の三男要蔵は磔刑となり、処刑者の総数は50人を超えたといわれます。そして第7代五兵衛は1852年（嘉永5年）11月21日、80歳で牢死という悲劇の幕を閉じたのでした。

銭屋家の歴史は、その後「銭五顕彰会」が1968年（昭和43年）に開いた「銭五遺品館」に伝えられ、第11代五兵衛の清水五兵衛氏が館長を務めていました。

「銭屋五兵衛記念館」が金沢市金石本町に建設され、遺品館の展示品を受け継いでいます。建造当時日本一といわれた千五百石船〔常宝丸〕の全長7メートルの縮尺復元船、旧本宅から移築された茶室「拾翠園」なども展示されています。

第11代銭屋五兵衛は、書や俳諧連歌・茶道などをたしなむ文化人でもあったようです。38歳の時の「柴の戸に羽織かけおく小春哉」をはじめ、65句の俳句が残っているそうです。獄死する前年に「降る雨をふもとに見るや夕紅葉」を残しています。

1982年（昭和57年）のある日、加賀前田家代16代当主前田利為の末娘、前田弥々子さんが銭五遺品館に海商銭五の末裔清水五兵衛館長をたずねて、130年の恩讐を超えて和解を求め、以後交流が続いているといわれます。

■北前船「長者丸」の次郎吉の漂流

加賀藩富山・岩瀬の能登屋（密田家）所有の北前船は、大阪に米を運び、帰りには綿・砂糖を積ん

で日本海を北上、新潟からさらに、ニシン漁で栄えた松前・江差に寄港して大量の昆布やニシンのメ粕などを積んで南下、昆布は薩摩藩を経由して風土病に悩む中国に密貿易されていたといわれます。

1838年(天保9年)4月24日に西岩瀬を出航した能登屋の北前船が、大阪に米を運び、その帰りの航路で、岩手・釜石を回って三陸沖を航行中、同年11月23日暴風雨に巻き込まれて遭難しました。乗組員は10名・漂流中に病死・自殺などで3人死亡しますが、7名は翌年4月24日、アメリカの捕鯨船に救助されます。捕鯨を手伝いながらハワイ・カムチャッカ・オホーツク・アラスカなど約5年間の旅を続けます。1843年(天保14年)5月23日ようやく北海道択捉島に送り届けられたのでした。しかし、無事に故郷に帰り着いたのは次郎吉ら4人だけでした。<「時規(とけい)物語」という正確な体験記が残されています。また、生還者の1人鍛冶屋太郎をモデルにした小説が、井伏鱒二の「漂民宇三郎」です。>

■松前

松前は、「松前藩」<無高(むだか)の一万石>として 蝦夷を支配した最北の城下町で政治の中心。蝦夷の産物を積み出す北前船の湊として賑わいます。松前城資料館には、「松前屏風」1,57m×3,648m(道指定有形文化財)が残されています。北前船は、「弁財船」(べざいせん)が中心で、全長約30m、幅8m、帆柱の高さ28m、総重量約150tという大きな船でした。交易の主役が近江商人であったこともあり、どこか上方の面影が残る町並みといわれます。

蝦夷地からの海産物、熊・ラッコの毛皮などを摘んだ北前船は、帰りには、主食の米・塩、生活物資を運んできました。船を安定させる重石として、越前の瓦・笏谷石(しゃくだにいし)なども運ばれ、建材、家の基礎、屋根瓦、墓石などとして使われたのでした。「福山波止場跡」が残っています。

蝦夷地随一の賑わいを見せた松前も、明治維新による藩の崩壊とともに衰退していきます。産業をもたない松前へ入港する船は次第に減り、主役は「ニシン」漁で賑わう江差へ移っていきます。

■江差—岸田三右衛門

松前が政治の中心であったのに対して、江差は蝦夷経済の中心として、ニシン漁とその積み出しによる「北前船」の交易によって開けた町です。町民の4割が能登出身者といわれます。江差に定住した商人の最初といわれる能登・正院(現珠洲市)出身の岸田三右衛門はニシン漁によって財を成した代表とされます。岸田家は、多いときには、12隻の船をもち、江差商人の中で最大の1300石船「栄寿丸」も所有して瀬戸内まで航海したといわれます。また、江戸時代に近江商人大橋宇兵衛が建てその後中村米吉の所有となった旧中村家(国指定重要文化財)、廻船問屋旧横山家(現在8代目当主横山敬三)など、ニシン漁最盛期には、豪商の家屋30数軒が建ち並んでいたといわれます。

北前船が北海道の海産物を荷積みする江差は、「江差の五月は江戸にもない」とその繁栄を謳われています。「ソーラン節」はこのニシン漁の唄です。港の入り口に「鷗島」(昔弁天島)があって防波堤の役割をしている天然の良港で、かつてニシン漁で、「出船三千入船三千」といわれた

ほど多数の船が出入りしたといわれます。この島にある、巖島神社(昔弁天神社)は、1615年(元和元年)に廻船問屋仲間が海上の安全祈願のために建てたものといわれます。境内には、「加州橋立船頭中」の文字が刻まれた鳥居があり、1838年(天保9年)3月吉日、加賀橋立村の北前船の船頭たちが、瀬戸内海沿岸あたりから石材をはこんで奉獻した石の鳥居と思われまゝ。江差には、この交易によって伝えられた関西文化や日本海沿岸各地の風習が色濃く根付いています。信州の馬子唄を源流とする舟唄がこの地に根付き、全国に知られる名調子の民謡「江差追分」となったのでした。江差町郷土資料館の「江差屏風」「奉納船絵馬」(明18、田口伊兵衛奉納)などがその賑わいを伝えています。

また、鹿子舞などの民俗芸能や京都祇園祭の山鉾巡行の流れを伝える「姥神大神宮祭」は、室町時代の建立で、8月中旬のお祭りは、蝦夷地最古のものとして370年以上の歴史を誇っています。各町内からの豪華な13台の山車巡行・祭囃子などが今日まで伝承されています。これらは、弘化年間(1840年代)、宝暦年間(1850年代)に京都・大阪方面で作製されたものといわれます。趣味・嗜好などについても、茶道・書画・俳諧・詩歌・浄瑠璃など洗練された文化も継承しています。

北前船は本当に文字通り「宝船」だったといわれます。北海道への下り荷では、大阪の木綿・衣類・諸雑貨、堺の清酒、沖縄・鹿児島黒玉砂糖、四国の和三盆白砂糖・煙草、播州の素麺、尾道の酢、松浜の備後畳表、三田尻の塩、下関のサツマ芋、敦賀の縄・むしろ、新潟・酒田の米・白玉粉・酒などのすべての生活物資を運んできたのでした。

江差の廻船問屋・豪商の多くは、越後・佐渡・能登・加賀・越前・近江の出身者で、それぞれのお国ぶりを持込み、中村家、横山家、金丸家などの豪華な建築様式・家具調度品を伝えています。それは北陸・上方の商家建築を基調としたもので、京欄間・漆塗りの障子・よしず張りの夏障子・簾・蔀戸など京都の町家を彷彿とさせるものでした。

■天売島・焼尻島—小納宗吉(こなそうきち)

また北海道の羽幌の沖に、天売島と焼尻島があります。ここもかつては、ニシン漁で栄えた島です。焼尻島には、加賀の塩屋村出身で、この島の有力なニシン建網元親方であった「小納宗吉」の大きな家が建っていました。2代目小納宗吉が1900年(明治33年)に建てたもので、間口34メートル、1階だけで500平方メートルもある大きな和洋折衷の建築でした。広い玄関を真ん中にして、右が郵便局、左が店。店では食料品・呉服・雑貨・医薬品・漁具などあらゆるものを売っていました。いわばデパートのようでした。冬の日本海は荒天続きで、文字通り陸の孤島なることがあって、物資の輸送も人の往来も出来なくなっても、人々は安心して生活が出来たといわれます。

初代小納宗吉が北海道へ渡ったのは明治維新前後でした。郷里加賀の塩屋村は北前船の村であり、北前船の航海に船員として単身小樽に渡った宗吉は、松前に出てアワビとナマコの乾物を横浜の貿易商を通じて中国へ輸出する仕事をはじめ、この事業が順調にのびて成功したようです。その資産を基にして40歳頃、海産物の宝庫「天売・焼尻」で安定した事業を展開して、焼尻島への移住を決意したようです。宗吉は、永住すべくがっしりとした本建築の豪華な建物を建てたのでした。

宗吉はこの家で海産物の買い付けのほかに、島民の生活を安定させるために食料品や日用品

の販売もはじめたのでした。2代目宗吉が、故郷加賀塩屋最大の北前船主の家に負けないように、さらに大きく立て替えた家が、現在焼尻郷土館として使用されています。かつて、焼尻島の海浜のニシン番屋で多くの秋田衆や津軽衆が寝泊りして、浜先の海で建て網でニシンを獲り、ニシンをしぼって魚油とメ粕をつくり、メ粕を浜いっぱい乾したといわれます。漁獲の多い時には30～40人の若衆が働き、二晩三晩と徹夜が続いたといえます。

浜の奥の方に釜場がいくつも築かれ。まず一度にニシン千尾も入る大釜で煮上げる。それをタモ網ですくって圧搾機にかける。大きなロクロの搾木を押して圧搾する機械で作業をして、搾汁からは魚油を精製・メ粕は細かく砕いてから天日乾燥して俵詰めにしたのです。

北海道の4月～5月は、礼文島利尻島をはじめ、増毛・石狩・小樽・江差・松前など日本海沿岸のすべての浜が、産卵のために寄ってくるニシンであふれ、膨大な量の魚肥が生産されたのでした。

このニシンメ粕は、西日本各地の稲作、藍、綿花栽培や工芸作物の肥料として大きな需要があり、北前船の主要商品となりました。日本海はその大動脈だったのです。日本の農業を一変させた肥料といわれる「鯨粕」は、チッソ、リンが豊富で、肥料効果が非常に高いものでした。

当時の陸上の遠距離輸送は、日本列島の地形が複雑で平坦な土地が少なく、大人車や馬車は不便であり、人の肩で背負うか牛馬の背に積んで運ぶしかなく、大量輸送には船で運ぶのが最良の方法でした。千石船1艘・乗組員十数人で運ぶ海路のルートは、陸上輸送とは比べものにならないものでした。近代の鉄道輸送やトラック輸送が発達するまでは、大量輸送には海上ルートが主力でした。北海道から南へ向けて出帆した船は、津軽半島から南の日本海沿岸の港々に立ちより、瀬戸内海を経て大阪までの航路でした。しかし、その後ニシンが不漁になると、小納家は、焼尻島から、札幌へ移っています。

■利尻島・礼文島—梶栄次郎

長者丸の「岡使」買い付け・会計担当者として乗り組んでいた鍛冶屋太三郎の三代目子孫の梶栄次郎は、明治後期に富山・岩瀬から北前船で小樽へ航行中に礼文島沖で遭難して、島に漂着。礼文島がニシンと昆布の宝庫であることを知り、島に居を構え商売を始めて成功。ついには「礼文の殿様」といわれたといえます。

利尻島も、明治期には、春になると帆前船が港を埋め尽くしたといわれます。ニシン漁が減りはじめて昆布漁の時代になって、ニシン漁でひと旗あげて富山に戻る出稼ぎの中には、帰るに帰られず定住するものが増えはじめたといわれます。

また、明治時代の藤井能三は、先祖代々築いてきた北前船の経済力を背景に、郷里の伏木港築港に尽力したほか、伏木小学校、伏木測候所の生みの親となっています。

■松前藩から北海道へ

嘉永6年(1853)6月3日ペリー艦隊が浦賀に来航します。そして翌年再来日、3月3日に日米和親条約が締結され、下田・箱館(2港)の開港が決定されました。条約締結後の4月、ペリー一行は箱館にやってきました。

また、同年 8 月、ロシアのプチャーチンの軍艦ディアナ号が来航、下田で条約交渉時の 11 月 4 日大地震でディアナ号が大破したため、幕府が代りの船を建造するという出来事もありました。これに対して後日、ロシア側から幕府へディアナ号の大砲が返礼として寄贈されています。

安政 2 年 (1855) の箱館開港を控え、箱館奉行の役所と住居の建設が急務となります。結局、武田斐三郎が設計担当した「五稜郭」が、ヨーロッパの城塞都市をモデルとして 7 年の歳月をかけて建設されました。またその北側に箱館奉行所に勤務する役人約 400 人の住宅 (長屋) が半分ほど建てられたといわれます。「五稜郭」が奉行所として使用されたのは、約 4 年間でした。幕府崩壊、箱館戦争を経て、その後、明治 4 年 (1871) には、開拓使によって取り壊されることとなります。安政 6 年 (1859) に貿易港として開港した箱館は、欧米にも広く知られ、ロシア人やアメリカ人、イギリス人、フランス人などとの異文化交流、諸外国のさまざまな舶来品が流通する国際都市であったといわれます。明治元年 (1868) 1 月、京都の鳥羽伏見の戦いにはじまる戊辰戦争は、2 月上野の彰義隊の戦い→8 月会津戦争・飯森山 (白虎隊自刃) →そして翌年 5 月の箱館戦争で終結します。明治 2 年 (1869) 7 月、明治政府により開拓使が設置され、「北海道」と改称して新時代を迎えることとなります。

■小樽

小樽のニシン漁繁栄を伝えるものとしてニシン御殿・「旧青山別邸」(国登録有形文化財)があります。山形県飽海郡遊佐町出身の青山留吉 (1836-1916) は、24 歳の時、ニシン漁の雇漁夫として渡道、約 1 年後に網元となり、明治期の積丹半島を中心に漁場を拡大して、巨万の富を得て大地主となります。漁業一筋 48 年、明治 41 年 73 歳の時に、留吉は北海道を去り、晩年は郷里山形で過ごします。「青山別邸」は、漁場を受け継いだ養子政吉の代になって、大正期に 6 年の歳月をかけて建てたものです。

北海道開拓が本格化した明治初期、小樽はその陸揚げ港の中心で、多くの「北前船」が入港しました。日本海沿岸の港町は、早くから開けていましたが、定期航路の開設は、小樽一函館間 1880 年 (明治 13 年)、小樽一焼尻間 1884 年 (明治 17 年) です。

小樽には、加賀 (石川県) の豪商北前船主らが競ってレンガ倉庫を建てた時期には、加賀市大聖寺瀬越町の広海二三郎の広海倉庫 (1889 年・明 22 建造)・大家七平の大家倉庫 (1891 年・明 24 建造)、加賀市橋立町の西出孫左衛門の小樽倉庫 (1893 年・明 26 建造) などが、海岸線に建ち並んでいました。この北前船の船主たちがいなかったら北海道の近代化は進まなかったとまでいわれています。小樽の平安と北前船航海安全を祈願して創建された小樽総鎮守住吉神社 (1868 年・明治元年創建) の大鳥居も加賀の船主広海二三郎・大家七平らによって 1898 年 (明治 31 年) に寄贈されています。

大正期に入って運河が造成 (1914 年・大 3 着工-1923 年・大 12 竣工) され、大手商船会社の倉庫も加わって小樽運河の景観が作られていきました。

現代の北前船ともいふべき、「新日本海フェリー・すずらん」が、北海道苫小牧東港―福井県敦賀間を約 15 時間で往復しています。往路は、北海道の農産物 (野菜、ジャガイモ、米)、牛乳、海産物などを運び、帰路は宅配便、コンテナ、新車などを積載して運航しています。

■昆布ロード

「昆布」は、各種ビタミン・ミネラルなどを豊富に含み、古くは薬として用いられていました。蝦夷地で積み出された昆布は、北前船航路を通じ日本海沿岸の秋田・横手、北陸金沢・富山、さらに京大阪まで運ばれ、これが「昆布ロード」といわれました。これにより昆布を食用とする地域が広がり、日本各地の料理に大きな変化を与えたのでした。富山市は、昆布の消費量日本一といわれ独自の昆布文化が根付いているといわれます。

そして昆布ロードは、長崎から、さらに薩摩藩により琉球を経由して貿易ルートにのり、中国にまで延びていきました。中国では、風土病に利くとして日本の昆布が珍重されたといわれます。

昆布の最大の積出港は箱館でした。幕末、淡路島出身の廻船問屋高田屋嘉兵衛が道東の航路を開いたことにより、道内各地の昆布の集積地となって隆盛を迎えます。江戸時代から松前藩が幕府に献上してきた「南茅部真昆布」をはじめ、「利尻昆布」、「日高昆布」、「羅臼昆布」、「歯舞昆布」などが今日も有名です。

函館市の宝来町には、高田屋嘉兵衛の銅像と、高田屋嘉兵衛資料館があります。また根室市の金毘羅神社にも銅像が建てられています。平成11年(1999)、高田屋嘉兵衛とゴロウニン、リコルドの子孫が松前・函館を訪れて、それぞれに先祖の事績に思いをめぐらせたといわれます。

■あとがき

今回、明治から昭和初期にかけて北海道西海岸に押し寄せ北上した「ニシン漁の隆盛」について、簡潔にまとめることの難しさを感じています。松前・江差・小樽・留萌・増毛・羽幌などの大きな港だけではなく、ほとんど北海道西部の沿岸全域に及んでいるからです。

例えば、積丹半島西側地方の海岸だけでも、ニシン漁最盛期の遺構「袋潤」(大量に捕れたニシンを一時保管した「いけす」の跡)が多数残っています。神恵内村郷土資料館の資料によると、ニシン漁で栄えた半島西側の「岩宇場所」のニシン水揚げ高は、1912年(大正元年)に全道一を記録。ニシン場で働くヤン衆は、春の漁だけで1年間生活できたほど稼げたといわれます。ニシン漁の最盛期には、花街も羽振りのいい親方衆で賑わいを見せたということです。

本稿では、とても北海道西海岸全域の各漁港地すべてをリサーチできませんでしたので、いつか、稿を改めて書きたいと考えています。(執筆担当：中垣正史)

<主な参考文献及び参考資料>

- 「北前船の研究」 牧野隆信著 法政大学出版局 1989
- 「北前船 日本海文化と江差」 江差町教育委員会編 北前船編集委員会発行
- 「日本海繁盛記」 高田 宏著 岩波新書 1991
- 「新版 北前船考」 越崎宗一著 北海道出版企画センター 1972
- 「日本海こ んぶロード 北前船」 読売新聞北陸支社編 能登印刷出版部 1997
- 「北前船長者丸の漂流」 高瀬重雄著
- 「ほっかいどう百年物語」 STV ラジオ編 中西出版
- 「北海道の歴史散歩」 北海道高等学校日本史教育研究会編 山川出版社
- 北海道新聞記事
- 各地の現地リサーチ資料
- インターネット資料など

新渡戸稲造の生涯と業績・・・長く受け継がれた「遠友夜学校」

-I wish to be a bridge across the Pacific (私は太平洋の架け橋になりたい) -

■ まえがき

札幌農学校二期生の新渡戸(太田)稲造は、「太平洋の架け橋たらん」という念願をはたし、国際連盟事務次長という第一級の国際人として活躍した人ですが、また、信仰深い慈父として、恵まれない子弟のために無料の「遠友夜学校」を札幌の地に創設し、アメリカ人の妻メリーとともにその経営維持に努めた功績にも特別にスポットをあてて検証してみたいと思います。

1869年(明治2年)5月、徳川幕府の最後の抵抗となった函館五稜郭戦争で戊辰戦争が終結しました。明治維新政府は、帝政ロシアの南下に対する北辺の警備を急務と考え、直ちに北海道開拓使を設置し、蝦夷地を北海道と改称してその開拓を積極的に推進します。

1870年(明治3年)8月、開拓次官の職についた黒田清隆は、①西洋の新知識の導入(お雇い外国人の招聘)、②前途有為な青年の海外留学生派遣、③北海道開拓の任に当たり得る人材の養成(札幌農学校の創設)を北海道開発政策の基本として実行していきます。黒田は、1871年(明治4年)、アメリカに渡り、駐米公使森有礼の紹介でグラント大統領に面会して、日本の情勢を説き、開拓使顧問として、ホーレス・ケプロン(1804-1885)の招聘に成功。以後ケプロン山脈とも言うべきアメリカ人指導者・技術者を中心とした「お雇い外国人」を78名も招いています。開拓使は、また33名の留学生を外国に送っています。1876年(明治9年)、ウィリアム・S・クラーク博士(1826-1886)、ウィリアム・ホイラー(1851-1932)、ディヴィッド・ペンハロー(1854-1910)の3人のアメリカ人教師を迎えて同年8月14日「札幌農学校」を開校したのでした。……<紙数の関係で、ここまでを、新渡戸稲造の生い立ちに大きな影響を与えたバックグラウンドとしての「まえがき」とします。>

■ 新渡戸稲造の家系と生い立ち

新渡戸稲造(にとべいなぞう)の祖父新渡戸傳(つとう)は、幕末期に荒地だった南部盛岡藩の三本木原(現十和田市)で灌漑用水路、稲生川の掘削事業などを成功させています。父十次郎はそれを補佐して都市計画や産業開発も行っています。三本木原の総合開発事業は新渡戸三代(祖父傳、父十次郎、長兄七郎)に亘って行われ、今日の十和田市発展の礎となったといわれます。しかし、曾祖父維民(これたみ)は、藩の方針に反対して流罪となり、祖父も藩重役への諫言癖から昇進が遅く、また父も藩財政建て直しに奔走したことが裏目に出て塾居閉門となり、失意の中に病没するなど、不運の家系といえます。

新渡戸稲造(1862-1933)は、1862年(文久2年)9月1日、岩手県盛岡市鷹匠小路(現在下橋町)に盛岡藩士(藩主南部利剛の用人)の父新渡戸十次郎(1820-1867)・母勢喜(せき)の三男として生まれます。当時、祖父・父の三本木原開拓地で初めてとれた稲に因んで、幼名を稲之助と名づけられます。

1867年(慶応3年)12月14日、父十次郎死去(享年48歳)します。1871年(明治4年)8月、9歳、東京で洋服屋をしていた叔父太田時敏(1838-1915)を頼り、次兄道郎とともに上京して、築地英学校に入学します。祖父傳(1793-1871)が9月27日に死去(享年79)のため、太田時敏の養子となり太田稲造と改名します。

1873年(明治6)14歳の時、東京外国語学校英語科(大学予備門)に入学、語学(英語)の才能を現します。そして、2年後東京英語学校に入学し、この頃から内村鑑三、宮部金吾と親交を深めています。

1876年(明治9)、明治天皇が東北ご巡幸の折、父祖の三本木原開拓をご嘉賞され「金一封」を賜ったことで、母の勧めもあり、父祖の志を継ぎ農学を修める決意をしたといわれます。いつも、母から「父祖に恥じない立派な人間になってほしい」という手紙をもらい、また「金一封」の一部を送られ、稲造は英語の聖書を買ったといわれます。1877年(明治10年)7月退学して札幌農学校を目指します。

■ 札幌農学校第二期生へ

新渡戸稲造は、1877年(明治10年)9月、15歳、内村鑑三、宮部金吾とともに札幌農学校に第二期生(18名)として官費入学します。当時の稲造は、祖父たち同様かなり硬骨漢であったといわれます。ある時学校の食堂の張り紙に「右の者、学費滞納に付き可及速やかに学費を払うべし」として、稲造の名前があったのを見て、稲造は「俺の生き方をこんな紙切れで決められてたまるか」と叫んで、その紙を破り捨ててしまい、退学の一步手前まで追い詰められ、友人たちの嘆願によりなんとか退学を免れるという事件があったそうです。また、教授と口論になり殴りあうこともあり、「アクチーブ」(アクティブ=活動家・テロリストのような意味合い)というあだ名を付けられました。しかし、稲造はきわめて成績優秀で、特に英語はいつも一番であったようです。

クラーク博士は、一期生(16名)に対して「倫理学」で聖書の講義をし、その影響で全員がキリスト教に入信しました。二期生も入学早々一期生の伝道攻撃にあい、クラークが残っていた「イエスを信ずる者の誓約」に署名したといわれます。入学以前からキリスト教に興味をもち、自分の英語版聖書まで持ち込んでいた稲造も早速署名しました。翌年6月2日、内村鑑三・宮部金吾・広井勇らとともに、函館駐在のメソジスト系の宣教師M.C.ハリスからキリスト教の洗礼を受け(洗礼名パウロ)、キリスト教に深い感銘を受けた稲造は、それ以後は信仰と勉学の日々を送ります。議論よりも一人聖書を読みふける沈思黙考型となり、「モンク」(修道士)のニックネームで呼ばれるようになります。これは友人の内村鑑三等が「これでは、もうアクチーブとは言えない」として名づけたといわれます。稲造は、札幌農学校在学中は特にブルックス教授に親しく指導を受けたといわれます。

1880年(明治13年)7月、18歳の時、10年ぶりに盛岡に里帰りしましたが、その2日前に母が亡くなっていたことを知り、その亡骸と対面して深く驚き悲しみました(7月17日、母勢喜死去享年56歳)。

後年、母からの手紙を一巻の巻き物にして大切に持ち歩き、いつも読み返していました。母の命日には、一人静かに部屋に引きこもって、それを見て思いに耽っていたといわれます。

1881年(明治14年)7月札幌農学校卒業、開拓使御用掛を拝命します。11月には、札幌農学校予科教授となりますが、英文学への限らない渴望をおさえきれず、新たな決心をします。

■ 「太平洋の架け橋」の夢を抱いてアメリカへ

1883年(明治16年)5月上旬、9月、英文学も学ぶべく東京大学に入学し専科生になります。当時の文学部長外山正一教授の入学詮衡にたいして、稲造は次のように答えたといわれます。

「第一には、もし天が許せば、私は、“太平洋の橋”になりたいと思います。第二には、英語を学んでヨーロッパの長所を取り、日本にはまだ形が備わっていない農学という学問をおこしたいと思います。日本には日本の長所があり、西洋には西洋の長所があります。東西の文明が融合しなければ、文化の華は咲かないと思います。私は日本の長所を西洋に教え、西洋の長所を日本に輸入する橋渡しの役をするために、さらに英語に精通したいのであります。」

しかし、この大学の研究レベルの低さに失望して翌年8月退学。「太平洋の架け橋になりたい」と私費で、同期生の広井勇を追って渡米します。9月、まずハリス夫人を頼って、ペンシルバニア州のアラゲニー大学入学。当時留学生として米国にきていた佐藤昌介の強い勧めにより、10月メリーランド州のジョンズ・ホプキンス大学(JHU)に転じ、経済学・農政学・歴史学・英文学などを3年間学んでいます。ここで、稲造は佐藤昌介と同じ部屋で学生生活を続けています。稲造は伝統的なキリスト教信仰に懐疑的になって、クエーカー派の集会に通いはじめ正式に会員となり、後に妻となるメリー・エルキントンと出会っています。

こうしている間に、前年8月帰国した佐藤昌介(札幌農学校教授兼幹事、校長事務代理)から、稲造を札幌農学校助教に任じ、満三年間農政学研究のためにドイツ留学を命ずるという辞令が送られて来たのでした。こうして稲造の将来の方針が確定し、前途に光明が輝くことになりました。

1887年(明治20年)、28歳。稲造は、ジョンズ・ホプキンス大学を中退して、5月アメリカを立ち、アイルランド、スコットランド、イギリス、オランダの先進諸国をまわり、官費でドイツ、ボン大学で農政学・農業経済学を専攻。翌年ベルリン大学に転校、さらに1889年(明治22年)、マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク(ハレ大学)に学んでいます。(4月長兄七郎46歳で死去により、新渡戸姓に復帰します。)ジョンズ・ホプキンス大学(JHU)より、バチェラー・オブ・アーツ(名誉文学士号)を受けます。

■ 札幌農学校教授として再び札幌へ

1891年(明治24年)1月、30歳、米国フィラデルフィア市で、両家の反対を押し切って、メリー・パターソン・エルキントン(1857-1938)と結婚。2月日本に帰国して、3月教授として札幌農学校に赴任します。翌年、長男遠益(トーマス)誕生するも8日後に死亡。その後夫婦ともに体調を崩し、静養のため渡米、カリフォルニア州で転地療養します。この間に、名著「武士道」(*BUSHIDO: The Soul of JAPAN*)を英文で書き上げています。日清戦争の勝利などで日本及び日本人に対する関心が高まっていた時期でもあり、後に「武士道」の初版が刊行(1900年・明治33年)されると、やがて各国語に訳されてベストセラーになり、セオドア・ルーズベルト大統領にも大きな感銘を与えたといわれます。

■ 札幌に「遠友夜学校」を設立

1894年(明治27年)1月、札幌に「遠友夜学校」を設立します。妻の実家エルキントン家はピューリタンの家系で、代々孤児の養育を続けていて、成長した孤児の遺産一千ドルがメリーに贈られて、「遠友夜学校」設立資金となったのでした。これには、夫妻の亡き子どもへの思いも重なっています。

当時、豊平川畔にあった札幌独立教会の施設を買い取り、稲造自ら校長となり、無償の夜間学校を開設したのです。経済的に貧しい故に向学の芽を摘まれた青少年に勉学の場を私費を投じて設置したのでした。それを支えたのは、多くの農学校の教師や学生、クリスチャンの奉仕の精神でした。「遠友夜学校」は、その名の通り昼間は働き、夜6時から授業がはじまります。十代から三十代まで種々の生徒たちで、尋常科と高等科が置かれ、多いときは250人もの生徒がいて活気に満ちていたといわれます。1897年(明治30年)稲造は体調を崩して札幌を去りますが、夜学校は、宮部金吾、大島金太郎、有島武郎らの校長代行によって引き継がれていきます。1923年(大正12年)には、財団法人に改め、施設・学校組織も充実します。1933年(昭和8年)～1938年(昭和13年)はメリー夫人が校長を務めています。その後太平洋戦争の激化により、1944年(昭和19年)数人の教師と十数人の生徒だけで最後の卒業式を行い、この年3月18日ささやかな創立五十周年祝賀式典を行ったのが、「遠友夜学校」の終幕となりました。この、札幌の不幸な青少年たちに無料で開放された私立の夜学校は、明治・大正・昭和の50年に亘り、初等部・中等部あわせて約1,200名の卒業生を送り出しています。

■ 国際的な活躍の舞台へはばたく

稲造は、1898年(明治31年)3月、病気により札幌農学校を退官し、群馬県伊香保温泉で静養中「農業本論」を出版。翌年、米国カリフォルニア州モントレイに渡り、療養生活を送ります。1899年(明治32年)、日本最初の農学博士の称号を先輩佐藤昌介らとともに受けています。

1900年(明治33年)、ヨーロッパ視察。パリ万国博覧会の審査員を務め、翌年1月帰国。台湾総督府民生部殖産局長心得に就任。翌年、臨時糖務局長となります。

1903年(明治36年)10月、京都帝国大学法科大学教授を兼ね、翌年専任となります。1906年(明治39年)9月に、法学博士の学位を得、第一高等学校長に就任します。(東京帝国大学農学部教授兼任)(明治42年からは法科教授も兼任、農学部教授退任)。1909年(明治42年)実業之日本社編集顧問。1911年(明治44年)8月、第一回日米交換教授として渡米、翌年5月まで166回講演。翌年9月帰国。1917年(大正6年)拓殖大学第二代学監に就任。1918年(大正7年)57歳、東京女子大学学長に就任。

1919年(大正8年)58歳、教育者で「武士道」の著者として国際的に高名な新渡戸稲造が、国際連盟事務次長に。ロンドンに留まり、翌年1920年1月国際連盟設立正式就任し、7月スイスのジュネーヴへ転じます。1921年(大正10年)60歳、バルト海のオーランド島帰属問題を解決。

1925年(大正14年)61歳、帝国学士院会員に任命されます。1926年(大正15年)65歳、7年間務めた国際連盟事務次長を退任。貴族院議員に勅選されます。1927年(昭和2年)、3月帰国。10月菩提寺盛岡久昌寺に墓参、旧制盛岡中学校他で講演しています。

1928年(昭和3年)、東京女子経済専門学校(現東京文化短期大学)初代校長に就任。翌年、大阪毎日新聞・東京日日新聞顧問に就任。太平洋問題調査会理事長に就任、京都にて第3回太平洋会議開催・議長を務める。1931年(昭和6年)70歳、1月産業組合中央会岩手支会長に選出される。5月岩手支会創立25周年記念大会出席のため盛岡を訪れる。6月、北海道大学で講演。10月、上海開催の第4回太平洋会議へ出席。晩年は、日本の軍国主義思想が高まり、国際連盟脱退へ進む風潮に対して、「わが国を滅ぼすものは共産党と軍部である」との発言が新聞紙上に取り上げられ、軍部や左翼の激しい反発を買い多くの友人や弟子を失ったのでした。また、1932年(昭和7年)4月渡米、反日感情を緩和するためにアメリカで100回以上講演し、日米両国平和維持のために努力するも理解されず、「新渡戸は軍部の代弁に来たのか」といわれ、翌年3月失意の中に帰国しています。1933年(昭和8年)東京医療利用組合(新渡戸稲造組合長)の設立を許可されます。

■ 旅行先で、突然の死

1933年(昭和8年)岩手県産業組合青年連盟通常総会・同総裁推戴式出席のため盛岡を訪問。そして、8月2日、日本を出発し、カナダのバンフで開催の第5回太平洋調査会議に日本代表団団長として出席しています。会議終了後9月13日ヴィクトリア市で病に倒れ、ジュビリー病院に入院します。サンフランシスコから駆けつけたメリー(萬里子)夫人、姪のメリー・デュグイッド、メイド森二枝の3人に見守られて10月15日午後8時35分永眠しました。71歳の生涯でした。17日バンクーバーに移されて茶毘に付され、18日セント・アンドリュー・ウエスレー協会の追悼告別式には700余名が参列したといわれます。その後、遺骨は、メリー(萬里子)夫人に抱かれて23日出航、サンフランシスコを経由して11月16日に横浜港に入港しています。

そして18日東京青山斎場において数千人の参列者のもとに盛大な葬儀が挙行され、12月2日東京多摩墓地に埋葬されて、永遠の眠りにつきました。この墓地にはメリー(萬里子)夫人(1938, 12, 27 納骨)、長男遠益(1950, 5, 5 納骨)、孫厭敏(1985, 10, 3 納骨)、養女こと子(1985, 11, 3 納骨)がともに眠っています。1937年(昭和12年)5月、多摩墓地に、新渡戸稲造博士坐像建立(朝倉文夫制作)。翌1938年(昭和13年)9月23日、メリー(萬里子)夫人が死去しています。

★ 札幌市—「遠友夜学校記念室」 1964年(昭和39年)、札幌市中央区の豊平橋付近の遠友夜学校(中央区南4東4)跡地に札幌市の中央勤労青少年ホーム(後中央若者活動センター)が開設された時に、新渡戸稲造博士の偉業を後世に伝える「遠友夜学校記念室」が設置されました。その後、同センターの閉館にともない、2011年(平成23年)10月、札幌市資料館に移転し、リニューアルオープンしています。非常に充実した展示内容になっています。

★ 札幌市—「遠友学舎」 北海道大学創基125周年記念事業の一環として、2001年(平成13年)9月、キャンパスの北側(中央区北18条西5丁目)に建設されました。1894年(明治27年)、新渡戸稲造博士夫妻が、貧しくて教育を受けられない若者のために開いた男女共学の夜学校「遠友夜学校」に由来します。「遠友学舎」は、地域社会と北海道大学との交流を促進するため、学生・教職員が小集会・セミナー・読書会・談話・コンサートなどを通して、同窓生・旧教職員・市民など遠来の友と語り、地域に開かれた場となることを目指しています。

★ 札幌市—新渡戸稲造の銅像

「新渡戸博士胸像」(北大構内)と「新渡戸博士顕彰碑」(遠友夜学校跡地・中央区南4東4)。

★ 札幌市—新渡戸稲造の偉業を顕彰する運動……

①「新渡戸稲造・萬里子(メアリー)夫妻メモリアルデー」の集い」実行委員会(佐々木晴美委員長)が、新渡戸稲造博士が最後に来札した1931年(昭和6年)5月18日を記念日として、2002年～2008年に開催し、講演会やフォーラム、ディスカバリーウォークなどを実施しています。

②「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」(秋山孝二会長)が、2013年6月22日、「遠友夜学校」の歴史を知るフォーラムを開催しました。今後、中央区南4東4の校舎跡地に記念館を建設し、地域住民の学びと交流の場とすることを目指しています。

■ あとがき

新渡戸稲造博士の顕彰(運動)には、「10円記念切手」(1952年10月16日)、「五千円札」(1984年11月1日)の発行や、ジョン・F・ケネディ空港や高知龍馬空港などのように、新千歳空港を「新渡戸稲造国際空港」に改称したいという運動などいろいろな形がありました。現在も、生誕・没後の周年を期して、その偉大な功績を讃える顕彰運動が続いています。(執筆担当：中垣 正史)

<主な参考文献及び参考資料>

- 「北大百年の百人」 北海タイムス社(昭和51年8月)
- 「ほっかいどう百年物語」STVラジオ編 中西出版
- 「新渡戸稲造」 さっぽろ文庫 34
- 「遠友夜学校」 さっぽろ文庫 18
- 「農学校物語」 さっぽろ文庫 61
- 「悲哀に根ざした愛の教育観—新渡戸稲造とハリエット・B・ストウの比較研究」 三上節子著 麗澤大学出版会
- 札幌農学校—日本近代精神の源流」 蝦名賢造著 新評論
- 「新渡戸稲造 1862-1933 我、太平洋の橋とならん」 草原克豪著 藤原書店
- 「太平洋の架け橋 新渡戸稲造」 神渡良平著 頭脳集団 ぱるす出版株式会社
- 「現代に生きる新渡戸稲造」 佐藤全弘編著 教文館
- 各地の現地リサーチ資料
- インターネット資料など

近代日本の女性医師第1号・・・荻野吟子の生涯と業績 －北海道開拓期の瀬棚町で医院を開業、日曜学校も創設して伝道活動－

■ まえがき

北海道の近代化は、明治政府の開拓使設置(1869年・明治2年)により本格的な歴史を刻みはじめます。初代判官島義勇、第2代判官岩村通俊の先見の明と、続く開拓次官(のち長官)黒田清隆のすぐれた指導力により、総顧問のホーレス・ケプロンをはじめ、多くの米国の先進技術・教育の専門家が招かれて、各分野の開拓事業が進められたのでした。

また北海道各地に開拓団の入植が進められ、開拓事業にも力を入れました。各地には、キリスト教の赤心社(明14・浦河)、北光社(明31・北見)などのような開拓団体の入植も多くありました。その中には、それぞれに教育や医療の面で、献身的な仕事をされた方があります。今回は、才色兼備の“荻野吟子”の数奇な人生にスポットを当ててみたいと思います。

■ 荻野 吟子の生い立ち

荻野吟子(1851－1913)は、1851年(嘉永4年)3月3日、埼玉県大里郡秦村大字俵瀬(現在熊谷市俵瀬)の豪農荻野綾三郎・嘉与の五女「ぎん」として生まれています。荻野家は、代々俵瀬村名主をつとめてきた家柄で、苗字帯刀も許されていたそうです。俵瀬利根川べりに、大きな長屋門を持つ豪壮な屋敷を構えていて、この長屋門は荻野家のシンボルであったようです。村人は、「長屋んち」と呼んで尊敬していたといえます。この俵瀬村は、北に流れる利根川には堤がなく南に中条堤があるため、洪水のたびに水が滞留し「水場」の村であったといわれます。

1850年(万延元年) 隣村葛和田村大龍寺の寺子屋「行餘書院」で基礎学問を勉強。父は教育熱心でしたが、四男五女のなかでも、吟子は、幼い頃から聡明で勉強好きで、父が「女に要らぬ利発ぶり」と驚嘆するほどであったといわれます。やや長じて、幕末の著名な儒学者寺門静軒の「両宜塾」に学びます。吟子は、医師で、静軒の後継者松本萬年が埼玉県妻沼村に学舎を開くと、松本の娘荻江とともに萬年の教えを受けて、ほぼ経史百家の官学書に通じ、才媛と詠われたといえます。

1868年(明治元年)、吟子18歳の年に、望まれるままに上川村の名主・稲村家の長男貫一郎(18歳)に嫁ぎます。貫一郎は若くして名主役を務め、1884年(明治17年)埼玉県議会副議長、後に銀行の創設・経営や牧畜牛乳販売の開業など、実業家としても大成した人でした。しかし、吟子との結婚生活は長くは続きませんでした。吟子は、結婚後間もなく不幸にも夫からうつされた性病により健康を失い、2年後実家に帰され、1870年(明治3年)には協議離婚となります。

その後、上京して順天堂病院に入院します。全治は困難なものの、病状は鎮静に向かい翌年にはようやく退院できるまでになったのでした。吟子は、この病軀に加えて、男性医師による局部の診察と治療を受ける屈辱的な体験の中で、このような女性のためにも、自分が女医となる決意

を固めたといわれます。再び郷里に戻り、幼時からの師松本萬年に就いて漢学の修養に努め、上京勉強の機会を待っていました。師松本萬年の長女荻江は、後に東京女子師範学校の教授ともなる才女で、学問好きの吟子と意気投合して義姉妹の契りを結んだということもあり、吟子はいよいよ学問の決意を固めて、1873年(明治6年)吟子22歳 周囲の反対を押し切って、閨秀画家奥原晴湖に伴われて上京します。吟子は、すぐに皇漢医で国学者としても著名であった井上頼圀の門に入り、学んで一年、抜群の才能と知的端麗な容貌により、才色兼備の評判を高くしたといわれます。

■ 上京、東京女子師範学校を卒業、さらに医学校へ

1874年(明治7年)夏、甲府に私塾を開いていた内藤満寿子の招きに応じて、教師として赴任します。

翌年秋、東京女子師範学校が開校します。松本荻江は、教師となります。荻江の勧めを受けて、吟子は第1期生として入学します。すでに、和漢の学に通じている吟子は、ここでも異彩を放ち、明治12年、優秀な成績で卒業します。吟子の医学への強い決意を受けて、永井久一郎教授が、当時の医学界の有力者陸軍軍医監石黒忠直を紹介します。石黒の努力により、いくつかの私立医学校に照会するも、当時は、いずれも女性禁制でした。しかし、さらに石黒の紹介で、1879年(明治12年)9月、侍医高階経徳経営の医学校「好寿院」に入学することができました。本来女性禁制の医学校に3年間も通学するためには、大変な困難があったようです。その通学姿は男子用の袴に高下駄を履くという男装で、3年間、每日一里の道を歩いて、学校通いと学資を得るために、良家の家庭2,3軒廻って教える家庭教師を続けるという苦闘の日々であったといわれます。

■ 日本最初の女性医師の誕生

1882年(明治15年)好寿院卒業。医術開業試験を受けようとするも、女性を理由に拒否される。以後2年ほど受験許可のため奔走しています。親戚もみな反対で、ただ一人姉の野口友子だけが援助し続けてくれたといえます。当時、吟子と同じように苦勞して勉強して、開業試験の願書を提出して却下されていた女性が他にも数人いたのです。吟子が、有名な実業家高島嘉右衛門(「高島易断」の著者)の家で家庭教師をしていた関係もあり、高島嘉右衛門—皇漢医井上頼圀に頼んで時の衛生局長長与専斎の紹介を得て、吟子は、何度も必死で懇願したのでした。

1884年(明治17年)9月、まず前期試験(物理学・化学・解剖学・生理学)を受験します。この時の女性受験者4名(荻野吟子、木村秀子、松浦さと子、岡田すみ子)中、合格者は吟子一人でした。翌年1885年(明治18年)3月の後期試験(外科学・内科学・薬物学・眼科学・産科学・臨床実験)を受験して、吟子はみごとに合格したのでした。(35歳。)そして5月、本郷三組町に小さな家を借りて「荻野医院」を開業します。わが国女性医師第1号ということで、新聞や雑誌の報道もあり、大繁盛となります。

その後、下谷黒門町に移転して婦人科、小児科、外科を開業、患者は増える一方で開業医としての経営は順調に伸びていったといえます。吟子は心優しい温かい人柄であったといわれます。また女性医師の先覚者として、女医制度創設に果たした功績も大きなものでした。

1887年(明治20年)には、生沢クノ、高橋瑞子、本田詮子、1889年(明治22年)には、采沢房栄、

深萱ひね、設楽りう、岡見京子(米国医大卒)、1890年(明治23年)には、間宮八重、村上いわお、1891年(明治24年)には、前田園子ら10名、1892年(明治25年)には吉岡弥生ら6名……続々と女医が誕生しています。女医志望の女子学生の多くが荻野医院に寄宿して世話になったといわれます。

吟子は、医院開業の前年にキリスト教の演説会の講話を聞いて強い感銘を受けて社会奉仕や婦人運動に心を注ぐようになります。そして、1889年(明治22年)には、本郷教会で、有名な海老名弾正牧師から洗礼を受けて、キリスト教徒になっています。

当時、婦人運動の先覚者矢島楯子らによってキリスト教婦人矯風会が結成されて、女性の地位向上を目指して、婦人覚醒運動、婦人参政権運動、禁酒運動、廃娼運動などが活発になります。

吟子は、男性支配社会での女性の不当な扱いや、男から性病をうつされて病気の再発を繰り返していく多くの女性患者に接して、なんとかして社会を改善し、女性の自覚を高めなければならないと痛切に感じていたのです。それで吟子も、この矯風会創立に参加して、風俗部長になり、また大日本婦人衛生会幹事にも就任、さらに明治女学校の生理衛生担当教師・校医として活躍しています。

■ 無名青年との結婚、そして北海道へ

吟子が、輝かしい名声の中で仕事をしたのは、わが国女性医師第1号となった35歳から数年間でした。40歳の時から運命は大きく屈折していきます。吟子の前に、14歳年下の志方善(しかたゆきよし)という青年が現れたのです。志方を吟子に紹介したのは、徳富蘇峰・蘆花兄弟の実姉大久保慎次郎夫人といわれます。

志方は、熊本県人。同志社大学に学び、新島襄より洗礼を受け、大久保慎次郎の助手として伝道活動をしていました。1890年(明治23年)夏季伝道のため秩父に赴き、その帰途下谷の荻野医院に1泊したのです。この時の吟子と志方は、周囲も驚くほどに情熱的で、運命的な惹かれ方であったといわれます。40歳の吟子は、日本的な教養も高く、名実ともに完成された知的な女性でした、26歳の志方青年のひたむきな熱烈な思いを受けて、吟子は、長い年月の間男性不信に閉ざしていた心に、あきらめていた女の喜び、生まれてはじめての恋情を燃え立たせたのです。しかし、二人の結婚には、吟子側のすべての人が反対したのです。年齢だけでなく、あまりにもいろいろ差があり過ぎるということで、紹介者の大久保夫妻も媒酌人を断り、海老名弾正牧師も反対したそうです。

それでも二人は、1890年(明治23年)11月25日、熊本県山鹿町の志方の生家で、キューギ牧師のもとでキリスト教徒として結婚式を挙げています。

キリスト教は、1873年(明治6年)に禁制が解かれ、明治政府の欧化政策のもとに広まっていますが、信徒たちの間に北海道に理想郷を建設しようという動きが起こります。志方善も同郷の先輩の助力によって、北海道(後志国瀬棚郡)の利別原野に二百町歩の貸付を受けます。そして結婚半年後、1891年(明治24年)には、協力者の丸山要次郎他10名とともに、この利別原野を理想郷(インマヌエル)にしようと北海道に渡り、開拓生活に入ります。その2年後に今村藤次郎、金森石郎ら15戸が入植して、市街地の設置を計画するなど、今日の今金の基礎を作ったの

でした。(明治 30 年瀬棚町から分村して「利別村」となり、昭和 22 年 10 月町制施行を機に開拓先駆者今村藤次郎・金森石郎の名前をとり「今金町」と改称しています。)

吟子は東京に残り、夫の理想実現のために資金援助をしていましたが、吟子も、之善の北海道に理想郷を建設しようというキリスト教精神に強く打たれて、いよいよ 1894 年(明治 27 年)6 月明治女学校の諸職を辞して、6 月インマヌエル村に入ります。

1896 年(明治 29 年)、吟子渡道、インマヌエル(今金町神丘)に居住し、之善の姉シメの長女トミを養女として迎えます。しかし現実の原野開拓は、高い理想をもってしても厳しいものでした。冬の厳しさ、病気、ヒグマなど猛獣の被害、さらに利別川の洪水などもあって、入植者は次第に減りだします。

■ 瀬棚で医院を開業、一時札幌へ、

結局は、之善も吟子も、1897 年(明治 30 年)に、この今金の地を離れて瀬棚に移住します(吟子 47 歳)。瀬棚村で荻野医院を開業し、厳しい冬も苦労しながら、遠く瀬棚全域の往診に出かけたといわれます。また「瀬棚淑徳婦人会」を結成して、みづから会長となって活動の先頭に立ち、女性たちに包帯の巻き方を教えたり、東北地方の不作に義捐金を募集するなどの福祉活動を行い、並行して「瀬棚日曜学校」も開設し、子どもたちの復員伝道をするなど、明治 41 年瀬棚を離れるまで継続しています。

1903 年(明治 36 年)夫之善は同志社大学へ再入学。6 月吟子は、瀬棚の医院は借りたまま「一時休業」として養女トミを連れて一時札幌へ移住します。札幌には、かつて吟子が好寿院で学んだ時の内科学の助教師撫養太郎が、札幌区立病院長として赴任していたのでした。吟子は、「婦人科・小児科専門荻野吟子」と新聞広告を出すも開業はできなかったようです。8 月になって、撫養に相談しますが、吟子の学んだ医術は二十年前のもので、新しい医術の知識がなくては札幌での開業は難しいといわれたようです。二十年前、優秀な医学生であった吟子には、撫養の言葉は残酷なものでした。失意の吟子は、翌年病気となり熊谷の姉や友人の家で静養します。

■ 夫の死

1904 年(明治 37 年)、之善は、同志社大学を卒業して、北海道に戻り浦河のキリスト教会の牧師として赴任します。翌年 4 月辞任して瀬棚へ戻りますが、9 月 23 日、残念ながら開拓伝道の志半ばで病死しています。42 歳でした。

■ 吟子東京へ、そして病死

1908 年(明治 41 年)12 月。吟子 58 歳。瀬棚を引き揚げて、東京本所区新小梅町で開業しましたが、以前のように振るわなかったようです。1912 年、志方籍を離れ、荻野姓に復籍分家となります。

1913 年(大正 2 年)6 月 23 日肋膜炎により永眠。62 歳でした。それは奇しくも、吟子の女医志願の談話掲載の「日本女医会雑誌創刊号発行の時でした。

夫・之善は吟子の手によってインマヌエルの丘に埋葬されました、吟子は、親族によって東京雑司ヶ谷墓地に葬られ、永遠の眠りについていきます。

■ 荻野吟子を記念するもの

★埼玉県-さいたま輝き荻野吟子賞 ★熊谷市-熊谷市立荻野吟子記念館 ★北海道今金町-瀬棚郷土館 ★荻野吟子女子顕彰碑(1967年・昭和42年7月)北海道瀬棚町 ★荻野吟子女子顕彰碑(1968年・昭和43年4月27日)埼玉県妻沼町 ★史蹟 荻野吟子生誕之地碑(昭和47年2月25日)埼玉県妻沼町 ★1984年(昭和59年)公認女医誕生100年を記念して、「荻野吟子賞」(日本女医会)

■ あとがき

北海道各地方に入植した開拓者たちを大きく支えた教育・医療関係者のことを取り上げたいと考えていましたが、荻野吟子(1851～1913)と同じ時代には、十勝陸別町の開墾と医療に尽くした関寛斎(1830～1912)がいます。司馬遼太郎が「胡蝶の夢」「街道を行く 15 北海道の諸道」に書いています。(執筆担当：中垣正史)

<主な参考文献及び参考資料>

- 「北の命を抱きしめて—北海道女性医師のあゆみ」北海道女性医師史編集発行委員会 編集発行 ドメス出版 2006年 □ 「ほっかいどう百年物語」STVラジオ編 中西出版 □ 人物近代女性史⑦「明治女性の知的情熱」講談社文庫
- 荻野吟子—日本の女医第1号—奈良原春著作 国書刊行会 □ 「札幌医療物語」さっぽろ文庫 79
- 「荻野 吟子」荻野吟子女史顕彰碑建設期成会編 瀬棚町発行 □ 「わたしのクワはこの聴診器—女医荻野吟子の物語—」(時計台ものがたり所収) 大西泰久作 新風舎発行 昭和42年12月 □ 「日本最初の女医にしてキリスト者—荻野吟子 栄光と苦悩の生涯」別冊太陽 日本のこころ—127 平凡社発行 □ 「荻野吟子の札幌での医院開業について」新札幌市史編集長 海保洋子 新札幌市史機関誌第「札幌の歴史」48号所収 □ 「日本最初の女医—荻野 吟子—不屈の精神と大いなる愛」荻野吟子没後100年記念事業 熊谷市・熊谷市教育委員会編集 □ 「明治の女性たち」島本久恵著 みすず書房 昭和45年8月 □ 「花埋み」渡辺淳一著 新潮文庫 □ 各地の現地リサーチ資料 □ インターネット資料など

『ニッカウイスキー』をつくった 竹鶴 政孝の生涯と業績

— 日本のウイスキーの父 政孝と献身的に支えた スコットランド生まれのリタ夫人 —

■ まえがき

酒(さけ)は、アルコール飲料の総称で、その歴史は古く、有史以前からつくられており、種類も製造方法も多様です。広義には、日本酒・ビール・ウイスキー・ワインなどがあり、狭義には、日本酒(清酒)を指し、今日では、「SAKE」が世界の共通語となっています。全体的に、大まかな歴史を少しばかりたどって、今回「HOMAS」72号では、「日本のウイスキーの父」ともよばれたニッカウイスキー創業者・竹鶴政孝(1894-1979)のウイスキーづくりへの情熱にスポットを当ててみたいと思います。

■ 酒(さけ)の歴史

BC7,000年ころ、中国の賈湖遺跡(河南省)から出土した陶器片から検出された醸造酒の成分が、いまのところ考古学的には最古の「酒」とされています。中国では、殷・周のころ、酒は国家の祝祭において重要な意味をもっており、もともと神事に供されたものであり、精巧な青銅の酒器が多く残されています。ギリシア・ローマは、葡萄の産地ということもあり、ワインが多く生産されて、酒神ディオニソス(ギリシアではバックス)の祭事に供されたものであったようです。

まず、酒(アルコール飲料)は、大きく分けて、次の①醸造酒、②蒸留酒、③混成酒に分けられています。①醸造酒は原料をそのまま、もしくは原料を糖化させたものを発酵させた酒です。糖化とアルコール発酵が同時に行われる「清酒」などと、糖化の過程が終わってからアルコール発酵が行われる「ビール」などに区別されます。②蒸留酒は、醸造酒を蒸留し、アルコール分を高めた酒で、樽熟成を行わないホワイトスピリッツと何年かの樽熟成で着色されたブラウンスピリッツに分類されます。ウイスキー、テキーラ、ラム酒などがあります。③混成酒は、主に蒸留酒を原料として、香り・味付け糖分や色素を加えて造られたもので、多くの種類があります。

また、その原料によって、酒の種類がある程度決まるといわれますので、次に主な分類をあげてみますと、①穀物原料のもの：米(清酒、焼酎、どぶろく、紹興酒、泡盛、マッコリなど)、大麦(ビール、モルトウイスキー、麦焼酎)、トウモロコシ(バーボンウイスキー)、蕎麦(蕎麦焼酎)など。②果実原料のもの：葡萄(ワイン、ブランデー)、リンゴ(シードル)など。③根菜類原料のもの：サツマイモ(芋焼酎)などがあります。

今日では、お酒は広く嗜好品として楽しまれ、また料理などにも用いられていますが、健康面での効用、弊害などなどいろいろありますので、ここでは詳細については取り上げません。

■ 酒の歴史—日本の酒

日本の酒については、3世紀に書かれた「魏志倭人伝」の中にその記述が見られますが、米の酒なのか、また液体なのか・かゆ状のものなのかなど不明のようです。酒が米を原料として造られるようになったのは、弥生時代に稲作が渡来定着した後で、西日本の九州、近畿での酒造りが起源と考えられています。この頃は、加熱した穀物(米)を口でよく噛み、唾液の酵素で糖化、野生酵母

によって発酵させる「口嚙み」という原始的な方法によるものでした。酒を造ることを「醸す」(かもす)というのは、この「嚙む」ことを語源としているといわれます。この「口嚙み」の作業を行うのは巫女に限られており、酒造りの仕事は神聖なものとされていました。こうした酒造りが、次第に国内に広まっていったことは、古事記・日本書紀・風土記・万葉集などの文献に見ることができます。まだ、「神々の酒」「天皇の酒」の時代でした。

平安時代になると、国の祭事・ハレの日の食事として、酒が供されるようになりますが、宗教的儀礼の中にあつて、神に供えることで豊かな収穫や無病息災を祈り、そのお酒を飲むことで災厄をはらう、お酒は神と人を結びつける役割を担う神聖なものでした。しかし、お酒は祭礼やお正月、慶事の際に集団で飲むもので、多くは朝廷や武家、神人、僧といった一部特権階級のものでした。

鎌倉時代になると、かなり普及するようになり、少人数あるいは個人でお酒を飲むことも一般的になってきたようです。室町時代になるとかなり一般化し、徳利などの酒器が定着し、また酒が樽に詰めて売られ、親類縁者の寄り合い酒も通常のことになったようです。酒屋の屋号も登場しています。江戸時代に入ると、お酒は一般の嗜好物として日本人の生活の一部となって今日に至ります。

■ 酒の歴史—日本のビール

日本でのビール生産は、1869年(明治2年)、横浜の「ジャパン・ブルワリー」「スプリング・バリール・ブルワリー」が最初とされますが、日本人による最初のビール醸造は1872年(明治3年)に大阪の渋谷(すぶたに)庄三郎が造った「渋谷麦酒」といわれます。その後、日本人によるビール醸造は急激に増加して、甲府の野口正章の「三ツ鱗ビール」(1874年・明治7年)、北海道開拓使による「札幌冷製麦酒」<1876年(明治9年)村橋久成・中川清兵衛>、横浜近郊の保坂森之輔の「北方ビール」、東京の清水谷商会の「桜田ビール」、東京の宮内福三FM商会の「手形ビール」、大阪麦酒株式会社の「アサヒビール」「エビスビール」(1889年・明治22年)などがありました。その後の、好況不況の中、札幌麦酒・大阪麦酒・日本麦酒の3社の大合併による「大日本麦酒」などとなり、戦後の混乱を乗り越えて1955年(昭和30年)代以後は、ビール消費も安定的に増大して今日に至っています。現在の日本の主要ビール醸造は、キリンビール、アサヒビール、サッポロビール、サントリービールの4社です。

■ 酒の歴史—日本のウイスキー

日本に初めてウイスキーがもたらされたのは、1853年(嘉永3年)6月23日のこと、ペリー提督のアメリカ合衆国東インド艦隊によって沖縄に伝えられたとされています。そして約2週間後、艦隊が浦賀沖に停泊して、浦賀奉行などがウイスキーの歓待を受け、その後徳川将軍への贈り物として樽単位で献上されています。しかし、こうして伝来したウイスキーも、洋酒自体がまだまだ高価なこともあり、なかなか人々の間に浸透しませんでした。

関東大震災の1923年(大正12年)、京都山崎で日本初のモルトウイスキー蒸留所(寿屋山崎工場)の建設が始まり、わが国独自の本格的なウイスキーづくりが開始します。そして6年後1929年(昭和4年)国産ウイスキー第1号「サントリーウイスキー白札」が誕生して、少しずつ人々が

興味を持つようになってきたようです。……第2次大戦後、数度の酒税法改正により、それまで高級酒であったウイスキーも、ハイボールや氷割りなどで一般に広く飲まれるようになります。1971年(昭和46年)には、アメリカのバーボンウイスキー、フランスのコニャックに続いて、イギリスのスコッチウイスキーも、の輸入自由化・関税引下げとなり、高級酒にも手が届きやすくなり、輸入洋酒ブームが起こったといわれます。この流れを受けて、国内酒造会社も本格的に高級ウイスキー造りに参入、今日では、日本のウイスキー業界も着実に成長を遂げて、産地による分類では、スコッチウイスキー、アイリッシュウイスキー、カナディアンウイスキー、アメリカンウイスキー、そしてジャパニーズウイスキーとして、世界5大ウイスキーのひとつとして認められるようになったといわれます。

■ 日本のウイスキーの父：竹鶴政孝の生い立ち

さて、日本のウイスキーの歴史を語るなかで、その名を欠かすことはできないといわれるのが、「竹鶴政孝」(1894, 6, 20~1979, 8, 29)です。日本で最初に本格ウイスキーを造った人物、『日本のウイスキーの父』と呼ばれています。

竹鶴正孝は、広島県竹原町(現竹原市)で、酒造業・製塩業を営む竹鶴敬次郎の四男五女の三男として、1894年(明治27年)6月20日に生まれました。兄二人は別の道へ進んだため、政孝が家業を継ぐこととなり、大阪高等工業(後の大阪工大、現大阪大学)醸造科へ進学します。

しかし、父の思惑とは違って、政孝は新しい酒である洋酒に興味を持ち、先輩の岩井喜一郎(摂津酒造常務)を頼り、1916年(大正5年)3月、卒業を待たずに、大手洋酒メーカー「摂津酒造」に入社します。そして、この年12月徴兵検査甲種合格のところ、「アルコール製造は火薬製造に必要な技術であり、軍需産業活性化に役立つ」という判断で乙種合格となり、軍隊に入隊せず摂津酒造勤務を継続することとなったといわれます。1918年(大正7年)、政孝は社長阿部喜兵衛から、「スコットランドに行ってウイスキーを勉強してくる気はないか」といわれます。政孝は、単身スコットランドに赴き、グラスゴー大学の応用化学と有機化学の聴講生として入学することとなりました。ここでは、さまざまなウイスキー関連のこと、さらに政孝の人生を決定づける大きな出会いがあったのでした。ウィリアム教授の紹介によりウイスキーの本場、ハイランド地方のローゼスという町に下宿することになります。このスコットランドウイスキーの本場で、政孝は、多くの蒸留所を訪ねて製造法を学び、ロングモーンの工場では蒸留器を叩いてその反響で蒸留の進行度合いを知るまでに至ったといわれます。その間、政孝は1日も欠かさず、その日見たこと習ったことのすべてを克明にノートに書き記したといわれます。後に、この「ノート」が日本の本格ウイスキーづくりに役立つことになったのでした。

このスコットランド滞在中、グラスゴー大学で知り合った医学部唯一の女子学生イザベラ・リアン・カウン(通称エラ)に頼まれて、「日本の柔術を習いたい」という末弟ラムゼイ少年に柔道を教えることとなり、グラスゴー校外にあるカーカンテロフの開業医カウン家を何度も訪ねた折に、後に生涯の伴侶となる女性に出会うことになります。



来日前の政孝とリタ

その女性は、エラとルーシーの姉、ジェシー・ロベルタ・カウン(通称リタ)(1896-1961)です。ピアノを弾き、文学好きの女性でした。彼女は政孝の夢を真摯に追い求める生き方に惹かれ、急速に親交を深めていきました。その年のクリスマスにプディング占いをしました。それは男の子のケーキに6ペンス銀貨が入っているとお金持ちになり、女の子のケーキに銀の指抜きが入っていればいいお嫁さんになるという占いでした。それがまさに二人ともピタリと当たったのでした。やがて政孝はプロポーズを決意しましたが、家族は反対でした。しかし二人の意思は変わらず、妹エラ、ルーシー、弟ラムゼイを含むリタの家族ほとんどの反対を押し切って、1920年(大正9年)1月8日結婚します。政孝26歳・リタ24歳でした。教会ではなく登記所で、2名の証人と登記官の前で宣誓と署名をするだけの寂しい結婚式であったといわれます。そしてその年11月、正孝は、リタとともに日本へ帰国します。

帰国後、摂津酒造は、いよいよ純国産ウイスキーの製造を企画しますが、不運にも第一次世界大戦後の恐慌によって資金調達が困難となり計画は頓挫してしまいました。その後、1922年(大正11年)には、政孝は摂津酒造を退社。大阪の桃山中学(現桃山学院高校)で教鞭を執り化学を教えました。

■ ニッカブランドの誕生

1923年(大正12年)大阪の洋酒製造販売業者寿屋(現在のサントリー)が本格ウイスキーの国内生産を企画し、鳥井信治郎社長がスコットランドに適任者がいないかと問い合わせたところ、「わざわざスコットランドから呼び寄せなくても、日本には竹鶴という最適者がいるはずだ」という回答が来たといわれます。同年6月、こうして、政孝は、鳥井社長に招かれて、年俸4,000円という破格の給料で寿屋に正式入社しました。この年俸はスコットランドから呼び寄せる技術者に払うつもりだった金額とおなじといわれます。早速、スコットランドウイスキーの著名な産地ローゼスの風土に近く、霧が多い山崎の候補地選びから工場建設に携わり、翌1924年(大正13年)11月11日山崎蒸留所初代所長として、日本最初の本格スコッチ・ウイスキー製造に取り組みます。醸造を行う冬季に故郷の広島から酒造りの「杜氏」(とうじ)を集めて製造を行ったのでした。1925年(大正14年)6月~12月には、ウイスキーおよび葡萄酒研究のため、イギリス・フランスを視察しています。そして1929年(昭和4年)4月1日政孝が製造した初の国産の「サントリーウイスキー白札」を発売しました。発売直後は不評でしたが、その後次第に売れ、日本中から注文が来るまでになりました。1931年(昭和6年)8月~翌年2月には、ウイスキーおよび林檎酒研究のため、イギリス・フランスを視察しています。この時は、妻リタ(34歳)、養女リマ、そして鳥井吉太郎を同行しています。

政孝は、鳥井社長の長男吉太郎をリタの元で英会話を学ばせ、後継の技師として育てて、1934年(昭和9年)3月契約の10年が経過したことから寿屋を退社します。いよいよ北海道余市町で、本格的なスコッチウイスキーづくりをする決意をします。…その厳しい寒さ、足元に湧く清冽な水、大地に埋蔵するビート…彼が技術を学んだスコットランドに似た気候風土を持つ理想の地と考えたのでした。当時病弱気味であったリタのためにもよいと考えたのでした。資本を集め、1934年(昭和9年)7月に「大日本果汁株式会社」(現在のニッカウイスキー)を設立し、代表

取締役専務に就任します。筆頭株主は加賀証券社長(加賀正太郎)。加賀の妻は、1924年以來10年間、政孝の妻リタから英会話を学んでいたことから出資を決めていたということでした。

当初は、モルトウイスキーの熟成を待つための数年間、リンゴジュースを製造していたために、社名を「大日本果汁株式会社」としたのです。1935年(昭和10年)5月「日果林檎ジュース」の出荷開始。他社の果汁入り清涼飲料6銭にたいして、果汁100%ジュースを30銭で販売開始しましたが、当初は、あまり売れなかったといわれます。同年9月、妻リタを余市に呼び寄せます。

そして、1940年(昭和15年) ついに念願の第1号ウイスキーを、社名の「日」と「果」を略して「ニッカウヰスキー」として出荷したのです。政孝とリタが帰国して、実に苦節20年の歳月が流れていました。<1952年(昭和27年)に、社名を「大日本果汁株式会社」から「ニッカウヰスキー」へ変更しています。>1941年(昭和16年)には、地元の旧制余市中学校(現余市高校)の校長先生の依頼で、ジャンプ台を寄贈しています。当初は桜ヶ丘ジャンツェと命名されましたが、その後「竹鶴ジャンツェ」と呼ばれ今日に至っています。後にニッカウヰスキーに入社した笠谷幸雄は、このジャンプ台で練習して、札幌オリンピック(1972年・昭和47年)で金メダルを獲得しています。

1943年(昭和18年) 政孝・リタ夫妻には、子供ががでできなかったので、甥にあたる 宮野 威を養子に迎えています。威は広島県生まれ、広島高専 発酵工学科を経て北大工学部応用化学を卒業。後に技師として政孝の後継者になります。

戦後の安い3級ウイスキー全盛の時代に、政孝はそれをウイスキーとは認めず、彼の本格ウイスキーを販売しなかったのです。やむを得ず販売する際にも、「日本人に本物のおいしいウイスキーを飲んで欲しい」というこだわりから、原酒を規定の5%まで配合し、価格も高く販売したため売れ行きはいまひとつだったといわれます。当時の営業担当者を集めた販売促進の席でも、政孝は、「われわれのウイスキーは他社のものとは違う。吟味に吟味を重ねた良い品質のものであり、高く売れないとおっしゃるなら止めていただいで結構です。われわれが誇りを持って造っていることを認識してもらいたい。」と言いつつ放ったそうです。この政孝の自信に満ちた態度が功を奏し、やがて「ニッカ」は企業として成長していったのです。1961年(昭和36年)1月17日、政孝に看取られてリタは永眠しました。65歳でした。政孝は余市工場を見下ろす丘に葬り、墓石にはいつでもリタと一緒にいられるようにと自分の名前も入れました。「竹鶴政孝 竹鶴リタの墓」の日本字と並び、英語で「IN LOVING MEMORY OF RITA TAKETURU BORN 14Th DEC 1896 DIED 17Th JAN 1961」 と刻まれています。

■ 世界のニッカウヰスキーへ

1931年(昭和6年)8月 1962年(昭和37年)英国のヒューム副首相が来日した際、「一人の日本人青年が万年筆とノートでウイスキー製造技術の秘密を全部盗んでいった」という意味の発言をしたといわれています。これはもちろん、政孝のウイスキーに対する情熱と努力に対する賞賛と驚嘆の言葉でした。<このノートはしばらく所在不明でしたが、のちに政孝が当時所属していた攝津酒造(1964年10月、宝酒造に合併) 関係者の子孫が保存して



余市ニッカウヰスキー工場内竹鶴政孝胸像

いることがわかり、ニッカウイスキーに寄贈されています。>

政孝念願の理想のウイスキーは、中性ウイスキーとのブレンドではなく、グレーンウイスキーを使った本物志向でした。そのためグレーンウイスキーの蒸留機にも、ウイスキーに個性を与えるカフェスチル(蒸留釜)の導入が必要でした。1962年(昭和37年)、朝日麦酒(株)(現アサヒビール)山本社長の力添えにより西宮工場にカフェスチルを導入。このカフェグレーンから「ブラックニッカ」「ハイニッカ」が誕生しました。(※現在はこのカフェスチルは仙台工場に移設されています。)

1956年(昭和31年)黄綬褒章を授与されています。1965年(昭和40年)政孝は、余市町の名誉町民に選ばれます。もうひとつの念願は、複数の蒸留所を持ち、異なった風土で育まれた原酒を合わせてより芳醇なブレンドウイスキーをつくることでしたが、この夢は、1967年(昭和47年)仙台新工場の建設により実現させたのでした。1969年(昭和49年)勲三等瑞宝章を受章。1970年(昭和45年)5月ニッカウイスキー代表取締役会長に就任。同年9月には、北海道開発功労賞を贈られています。

そして、1979年(昭和54年)8月29日 政孝は85歳の生涯を閉じました。リタの没後18年でした。墓石には「29 Th AUG 1979」と政孝の没年月日が刻まれました。今は二人一緒にニッカウイスキー余市工場を見下ろす丘に眠っています。

2001年(平成13年)には、世界唯一のウイスキー専門誌「ウイスキーマガジン」主催のテイastingコンテスト「ベスト・オブ・ザ・ベスト2001」に、「シングルカスク余市10年」などを出品。ニッカウイスキーは、「香水のような香り」「驚くほどスムーズ」「非常に力強いフィニッシュ」という世界一流のウイスキーの評価を得て最高得点を獲得したのでした。こうして日本のウイスキーの美味しさを世界に知らしめることとなり、ニッカウイスキーは、世界のニッカとなったのでした。

■ 日本人になりきった妻リタの生涯

スコットランド人の女性ジェシー・ロベルタ・カウン(通称リタ)(1896-1961)は、まったく言語も生活習慣も違う大正時代の日本にやってきて、献身的に夫政孝を支え続けて、日本料理から漬物づくりまで得意とするまでになっていたといわれます。 <本稿では、リタの生涯について紙面の許す範囲で、ご紹介したいと思います。>

リタは、1896年(明治29年)11月24日、スコットランドグラスゴー郊外のカーカンテロフで、



カウン家の長女として生まれています。

(左) スコットランドの自宅前で
ルーシー・弟・エラ・リタ

(右) 日本での最初の住まい帝塚山の
借家二階ベランダで

父キャンベル開業医で、妻のアイダとの間には、リタに続いて妹のエラ、ルーシー、そして末っ子の男の子ラムゼイの4人の子供がありました。長女のリタは、幼少時から、喘息気味で病弱。あまり外に出ることもなく、いつもピアノを弾いたり、読書をする日々が多かったといえます。

リタは、グラスゴー学院を卒業、15歳の時に親の勧めで婚約した許婚者(ジョン)がいましたが、彼は陸軍士官学校を卒業。1914年(大正3年)第1次大戦に出征し、中近東戦線で戦死したのです。リタ18歳の時でした。彼女は悲報に接して、何日も部屋に閉じこもったままだったといえます。その頃、カウン家では、父キャンベルは、ロシアのバルチック艦隊を撃破した日本に関心を持つ親日家、弟ラムゼイは日本人から柔術を学びたいと思っていました。その後、グラスゴー大学医学部に進んだ次女エラと日本人留学生竹鶴政孝が大学の図書館で出会い、カウン家に招待されます。1919年(大正8年)6月末のことです。

それから、ラムゼイに柔道を教えるためにカウン家に出かけますが、両親も姉たちも柔道に感心して、政孝を歓迎しています。政孝とリタは、お互いに好意を抱き、それが愛に進んでいきました。そして、翌年6月末頃結婚の意志を固め、年末のクリスマスに招待され時のブディング占いの結果は、二人の結婚を運命付けるものとなりました。二人の結婚の意志は固く、家族みんなの反対を押し切って、1920年(大正9年)1月8日結婚したのです。政孝26歳・リタ24歳でした。その年11月、正孝は、リタとともに日本へ帰国します。当初は大阪帝塚山の二階建ての洋館風の借家に落ち着きます。

リタは、家主の旧家(芝川又四郎)芝川家の三姉妹に英語とピアノを教え、後に帝塚山学院の英語講師もしています。この頃から、リタは余市で生涯を閉じるまで、政孝のことを、「マッさん」「マーさん」と呼んでいました。帝塚山には、イギリス人宣教師やグラスゴー大学卒業の牧師が住んでいて、リタの相談相手になっていました。

1923年(大正12年)政孝は、大阪の洋酒製造販売業者寿屋(現サントリー)の鳥井社長に招かれて、年俸4,000円という破格の給料で寿屋に正式入社しました。リタは、2年4ヶ月の教師生活の後、京都山崎へ移転します。この頃流産しているようです。その後、政孝の遠縁にあたる女性が産後に亡くなり、その赤ん坊がエンゼル乳児院に引き取られていることを知り、養女として迎えます。リマと名付けて高校卒業するまで育てています。スコットランドの末妹ルーシーからは何通も手紙がきて、母の健康がすぐれないこと、弟ラムゼイがカナダへ行ったこと、エラはロンドンで会社勤めをしていることや、ルーシーは結婚して二児の母親になり、母親アイダと暮らしていることなどが書かれていたのです。1931年(昭和6年)8月、政孝の視察に同行して、11年ぶりにカーカンテロフの実家に帰り、母親アイダに再会しています。

1932年(昭和7年)3月政孝の横浜ビール工場転勤に伴い横浜に引越していますが、リタの希望によりすぐに鎌倉に転居します。そしていよいよ1934年(昭和9年)12月リタは娘のリマを連れて余市に引越しました。この地で、リタは献身的に政孝を支えて、不況の時も、軍需景気に沸いた忙しい時も、政孝と苦労をともにして生涯を送ることになったのです。リタは毎日、朝8時、12時、午後5時にカラン、コロン、カラン、コロン、と工場の鐘を鳴らしたといわれます。しかし、戦争中は、特高刑事に厳しく監視される毎日となり、体調を崩すこともありました。

1954年(昭和29年)の暮れから高血圧と風邪に悩まされ、肺炎になります。一時期鎌倉の逗子海岸の家で暮らして体調を取り戻しますが、結核を患うこととなり、1960年(昭和35年)夏、余市へ帰ることを希望します。その年は、養子威(たけし)の家族とともに賑やかなクリスマスを自宅で過ごしますが、年が明けてから体調が悪化して、1月17日、夫政孝と養子威・歌子夫妻その孫たちに見守られて、64歳の生涯を閉じたのでした。

リタは、自分の母の遺産は、自分は長く日本にいて面倒をみていないからと相続を固辞しましたが、叔母から相続した遺産で余市に幼稚園をつくり、その「リタ幼稚園」は、現在も続いています。

■ あとがき

今回の原稿執筆のため、いろいろな資料は読み込んでいましたが、去る4月26日(土)、思い切って余市の「ニッカウイスキー」現地リサーチに出かけました。札幌から電車に乗り小樽乗り換え約1時間半で、余市駅に到着しました。駅前の広場には「リタロード」の説明版があり、広い道路が伸びていて、その先にすぐ、ニッカウイスキー工場の建物が建ち並んでいるのが視野に入ってきました。現在の余市は、まさに「ニッカ」の町という印象でした。今秋9月29日(月)に始まる、竹鶴政孝をモデルにしたNHK朝のテレビドラマ「マッサン」のブームを予感させる賑わいがありました。

しかし余市は、古くはニシン漁の千石場所として知られ、ニシン漁として栄えました。余市川を渡っていくと、余市湾に面して松前藩のお役所「旧下ヨイチ運上家」(国指定史跡重要文化財)や「旧余市福原漁場」(国指定史跡)などが修理復元されて残っており、往時を偲ばせています。道内でも貴重な歴史遺産のひとつとされています。また、「余市水産博物館」も多くの貴重な資料を収集しており大変勉強になりました。幸い天気にも恵まれて、さらに足を伸ばして「フゴッペ洞窟」や「余市宇宙記念館」までも見学できまして、すばらしい1日となりました。

(執筆担当：中垣正史)

<主な参考文献及び参考資料>

- 「北国に光を掲げた人々—わが道をつらぬく：ウイスキーを作った竹鶴政孝」合田一道著 北海道青少年叢書(31) (公財)北海道科学文化協会編集 平成25年10月1日発行
- 「北海道開発功労賞 受賞に輝く人々—洋酒開発の先駆 竹鶴 政孝」北海道総務部知事室道民課編集 昭和46年3月20日発行
- 「ヒゲのウイスキー誕生す」川又一英著 新潮社 昭和57年11月10日発行
- 「リタの鐘が鳴る—竹鶴リタの生涯」早瀬利之著 (株)朝日ソノラマ発行 1995年5月30日
- 「私の履歴書—34— 竹鶴 政孝」日本経済新聞社編集・発行 昭和43年
- 「歴史をつくる人々 ヒゲと勲章—ウイスキー革命は俺がやる」ニッカウイスキー社長 竹鶴 政孝著 ダイヤモンド社発行
- ニッカの雑誌「ひげ」 ニッカウイスキー株式会社
- 「ほっかいどう百年物語」STVラジオ編 中西出版
- 「北海道の歴史散歩」北海道高等学校日本史教育研究会編 山川出版社
- 北海道新聞記事
- 余市の現地リサーチ資料
- インターネット資料など

優れた蘭医・西洋医学を極めた関寛齋の生涯と業績

— 72歳にして北海道開拓を志す……斗満(現在の陸別)開拓10年の軌跡 —

■ まえがき

関寛齋(せきかんさい) <1830年・文政13—1912年・大正元>は、上総国(千葉県)の生まれ。佐倉順天堂で漢方医学を修めた後、長崎養生所で西洋医学を学び、徳島藩医となります。戊辰戦争では官軍の奥羽出張病院頭取を勤めますが、明治になって、徳島病院長、山梨病院長などを歴任、1873年(明6)徳島で町医者となり、長年貧民施療に尽力します。

そして、1902年(明35)72歳の時、北海道開拓を志し、四男又一とともに斗満(とまむ)原野(現在の陸別)に入植し10年間の労働と医療にあたりました。牛首別(現在の豊頃)の報徳思想を実践する開拓結社「興復社」農場を視察し、二宮尊親(二宮尊徳の孫)の強い影響を受けて、自作農育成のための理想的な農牧村落の建設を目指す「積善社」を設立します。寛齋は1912年(大正元)陸別で没しますが、死後、4,000ヘクタールを超える広大な農場のほとんどが小作人に解放されたといわれます。今日、陸別町では、陸別開拓の祖としてその功績を称えて、銅像・記念碑・資料館や記念公園など建設しています。また、その偉業に敬意を表して、陸別国民健康保険病院は、「関寛齋診療所」と名付けられています。今回は、この「関寛齋」にスポットを当ててみたいと思います。

■ 関寛齋の家系と生い立ち

関寛齋(せきかんさい)は、1830年(文政13)2月18日、上総国、九十九里浜に近い山辺郡中村(現東金市東中)の裕福な農家吉井左兵衛・幸子の長男として出生。幼名豊太郎。3歳で母に死別、しばらくは祖父母に養育されますが、関家(関年子は母幸子の姉)に養われ13歳の時、関俊輔(素壽)・年子の養子となります。養父俊輔は、もと君塚家の長子でしたが、百姓ながらも幼い頃から周囲が瞠目するほど聡明で、他家の養子となり「関俊輔」と名乗っていました。「製錦堂」という私塾を開き多くの子弟に読み書きを始めとする学問を教えていました。豊太郎(寛齋)は、早くからこの「製錦堂」で儒学・処世訓などを学んだといわれます。

1848年(嘉永元年)18歳の時に、医学習得をめざして佐倉順天堂に入門します。この医学校に最初に納める年六両という大金は、寛齋の生家である吉井家と関家で折半して用意しましたが、あとは自力で苦学しながら、佐藤泰然について蘭医学を学んでいます。

佐藤泰然(1804—1872)は高野長英などから蘭学を学んだ蘭方医で、1843年(天保14年)に日本最初の医学校兼私立病院「順天堂」を開いています。佐藤泰然の佐倉「順天堂」は、大阪の緒方洪庵の「適塾」と並ぶ当時の二大蘭学塾といわれています。優れた医者であるとともに人格者であった泰然は、このとき以来寛齋の生涯の師となります。

佐倉順天堂には、西洋医学を学ぶために、全国から裕福な武家や医師の子弟が集まっていたといわれます。寛齋は、泰然のもとで玄関脇の一室で寝起きして、屋敷内の清掃から家族の世話までを引き受けて、その合間に医学の手ほどきを受けたといわれます。周囲からは「乞食寛齋」など

ようです。また診察室にこもって、「順天堂外科実験」の記録を整理したりしたようでした。

寛齋は、妻あいとの間に8男4女を儲けていますが、夭折・病死が多く、5男2女が育っていますが、まず、1854年(安政元)2月6日 長男生三(幼名初太郎)誕生します。

1856年(安政3) 寛齋 26歳あい 21歳。2月15日 泰然の推挙により銚子荒野村(現在の銚子市興野)に移転開業します。銚子では、「関医院」の看板をかけたその日から患者が押し寄せて多忙を極めたといわれます。そして1858年(安政5)2月16日長女スミが誕生しています。

■ 恩人濱口儀兵衛(梧陵)との出会い

寛齋は、この地で濱口儀兵衛(梧陵)(1820-1885)と出会い、梧陵の勧めで、江戸に出て大流行のコレラの治療と予防対策を研究して、銚子に帰り防疫に努めました。幸い佐倉・銚子では大惨事にはならず流行は終わったといわれます。濱口梧陵は、ヤマサ醤油 7代目社長、人材育成や社会事業に関心を持ち大きな貢献をした人物で、この出会いは寛齋の後の運命に大きく関わることとなります。

濱口儀兵衛(梧陵)(1820-1885)は、1820年(文政3)6月、紀州有田郡広村(現広川町)生まれ。本名文則、通称儀兵衛、号梧陵。幼くして父を亡くし、12歳にして本家の浜口儀兵衛商店(現ヤマサ醤油醸造)(銚子)に迎えられて醤油醸造の見習いを始めます。浜口家は、銚子(千葉県銚子市)に醤油醸造業を、さらに江戸に金融業を営む豪商ですが、家訓として、主人であっても少年時代に安逸な生活が許されず、困苦に耐える精神や人を率いる方法を会得するため、丁稚や小僧と寝食を共にすることを慣例としていたといわれます。

梧陵は、同時に文武の修業に励み、特に三宅良斎(みやけごんさい)に師事して西洋事情を学ぶや国家意識に目覚め、海防問題に強い関心を持つようになります。1853年(嘉永6)家督を継いで七代目浜口儀兵衛となります。代々の儀兵衛は紀州広村と銚子を往復して家業の経営を本業としています。

1854年(安政元)11月南海道大地震の際、梧陵は広村に滞在中で、「稲むら」(稲束を積み上げた稲塚)に火をつけて大津波から村民を救ったことは広く知られています。(これは、小泉八雲(57ガ'イ・ハツ)が短編集の中で「Living god 生ける神」として紹介、後に「稲むらの火」として昭和16年小学校国語読本に採用されます。「稲むらの火の館」(和歌山県有田郡広川町)が平成19年(2007)4月22日、記念館として建設されています。)

1855年(安政2)から4年がかりで、郷里広村に高さ5m、幅20m、長さ600mの大防波堤を完成させています。(広川町では毎年11月3日に堤防を築いた梧陵らの偉業とその徳をしのび、「津浪祭」が行われています。) また借家を建設して困窮者に無償で貸与するなどしています。

梧陵は、人材育成を重視・教育事業にも尽力。開明的豪商として知られます。1866年(慶応2)、私塾「耐久社」(現耐久高校の前身)を設立しています。また焼失した江戸の種痘所も再建しています。

梧陵は、幕末から明治初頭にかけて、さまざまな公職を歴任し、1879年(明治12)第1回県議員に当選、初代県議長に就任しています。若いころからの念願であった欧米視察で、1884年(明治17)アメリカに旅立ち、翌年(明治18)4月21日視察の途中、ニューヨークで死去。66歳。(お墓は和歌山県有田郡広川町山本にあります。) アメリカでは、ウスターソースの製法を調べていますが、随

行者がそれを日本へ持ち帰り、後に 8 代目儀兵衛がヤマサソースとして売り出しています。

【梧陵格言】 財は末なり、信は本なり、よろしく本末を明らかにすべし。

■ 梧陵の勤めにより長崎へ

1860 年(万延元)3 月 29 日二男大助誕生。寛齋は 30 歳。幕府は、黒船来航により、鎖国体制に終止符が打たれ、海防の整備を急務として、長崎に「海軍伝習所」を設けて軍艦の購入と操縦の指導者派遣をオランダに依頼します。1857 年(安政 4)入港した軍艦ヤバン号(後の咸臨丸)によりオランダ海軍の青年軍医ポンペが来日したのです。

この、ポンペ・ファン・メーデルフォルト(1829-1908)は、幕府の要請により 1857 年(安政 4)海軍伝習所の教官として長崎に招かれたのです。ポンペによりわが国西洋医学の系統的教育の新時代が開かれたといわれます。ポンペは幕府に要請して「長崎養生所」(1861 年・文久元年-)を開設します。これは我が国最初の近代的様式病院で、医学所も併設しており、学生たちはここで医学の基礎課程を学び、養生所で臨床医学を実施に学びました。養生所初代頭取は幕臣で最初の医学生であった松本良順でした。また臨床教育用の洋式付属病院も開いています。

■ 帰郷後、徳島藩医へ

1862 年(文久 2)32 歳の春、一年余りで銚子に帰郷して開業しますが、この年 12 月 1 日、徳島藩医に招かれ、翌年 33 歳 徳島藩主の蜂須賀斉裕(なりひろ)の国詰侍医の道を選び、1 月江戸を出発し、5 月徳島城に出勤しています。6 月 7 日三男周助誕生。年末郷里の戻り、銚子旧宅を整理して、翌年 4 月、寛齋一家の行李五十三個に及ぶ家財道具を船便で送りますが暴風のために船が難破してすべてを失います。この時も梧陵の援助を受けています。1864 年(元治元年)10 月 23 日四男文助誕生(翌年 1 月 16 日夭死)。1867 年(慶応 3)4 月二女コト誕生(1889 明 2、7、20 二歳で夭死)。

1868 年(慶応 4)38 歳。1 月、寛齋を引き立ててくれた藩主蜂須賀斉裕侯が急逝。そして鳥羽・伏見の戦いが始まります。4 月には三条実家に随行して江戸に出て、戊辰戦争に軍医として参加。上野彰義隊の変の負傷者治療に当たり、後に奥羽出張病院頭取を命じられて、漢方医達の指導を行いながら負傷者の治療に当たり、その記録「奥羽出張病院日記」を著しています。この軍陣医学(外科治療)の功績が高く評価されて太政官より 100 両を贈られますが、栄達の道を捨てて再び徳島へ帰ります。

1869 年(明治 2)2 月 28 日五男末八誕生。3 月徳島医学校創設して校長に就任。また藩病院の開設など医師の育成事業にも尽力しています。翌年には、徳島藩巽浜医学校教授治療所長となりますが、不幸な出来事や宮仕えの苦しさなどから、退職して一度徳島を去ります。

1871 年(明治 4)4 月 15 日、三女トメ誕生。(11 月長女スミ、浜文平と結婚) 12 月海軍省に出仕海軍病院勤務。翌年山梨県甲府病院長となり、地域医療の充実に努めます。しかし 1873 年(明治 6)43 歳の時、再び徳島に帰り、徳島住吉島村で一開業医となり、翌年徳島裏の丁に移住。土籍俸禄ともに奉還して一平民となります。以後約 30 年間この地に住んでいます。この間、四国・九州などの各地を旅して旅行記を出版しています。(1874 年(明治 7)2 月 25 日二男大助 14 歳で夭折。) 6 月 12 日六男餘作誕生。(8 月 25 日五男末八 5 歳で夭死。)

徳島では、寛齋広大な医院と屋敷を構えていました。各地からの多くの門弟を抱え、多くの患

者が詰めかけたため、屋敷前の道が「関の小路」と呼ばれたといわれます。寛齋は、急患があれば、距離や時間を厭わずに出かけ、貧しい人からは一文も取らなかったそうです。そのため、無料患者の数が多く、「関大明神」と崇められたといわれます。1876年(明治9)4月25日 七男又一誕生。1877年(明治10)11月13日 八男五郎誕生。1881年(明治14)2月8日 四女テル誕生(1895明28,9,10 13歳で夭死)。

寛齋は毎日、朝は4時に起きて散歩。朝食の味噌汁に牛肉を入れるなど栄養十分の食事をとり、門弟や女中使用人にも同じ食事をさせたのでした。夜は8時に就寝するという規則的な生活を続けました。趣味は謡。それに69歳になって小鼓の稽古もはじめています。また旅行も好きで、所用で大阪・東京へ出た時には大和や日光へ足を延ばし、四国・九州の各地も旅して旅行記を出版しています。

1884年(明17)11月 三男(後次男)周助渡米(200円送金)一後、米国の大学へ。1885年(明18)恩人の浜口梧陵が旅先ニューヨークで客死。遺骸が出身地の紀州に戻ってからは、年に二度、墓参のために紀州を訪ねています。<1896年(明29)寛齋66歳の時、1月30日 長女スミが心臓発作で急死(38歳)しています。>

■ 又一の北海道開拓事業

1892年(明治25)62歳。四男又一札幌農学校に入学。1894年(明治27) 又一は、北海道庁移民奨励により石狩郡樽川植民地原野20ヘクタール(町歩)(6万坪)の貸付を受けて開拓に着手、関農場として、小作人を使用して108ヘクタールにまで拡大しています。

また、又一の札幌農学校入学に際し徳島から北海道へ同行した片山八重蔵・ウタ夫妻が、又一を助けて開拓の鋤を振るっていました。1896年(明治29)、寛齋北海道視察。明治30年には、「北海道国有未開地処分法」施行、百五十万坪を上限として、10年以内に開拓すれば無償払下げとなりました。寛齋は、1898年(明治31)68歳7月、再び北海道視察に出かけています。

1899年(明治32)1月4日 古稀(数え年70歳)の祝いで、家族を始め、離れて暮らす息子たちや医学校時代の教え子、地元の名士などが大勢集まり大盛会となりました。そして1901年(明治34) 寛齋71歳・あい67歳、金婚祝賀を受けます。寛齋は金婚の祝いで、あいとともに郷里の上総を訪ねています。1901年(明34) 又一は、北海道の奥地十勝～釧路にまたがる斗満原野と上利別1,011ヘクタール(約306万坪)の貸付許可を得て開拓の準備に入ります。またこの年「十勝国牧場設計」という卒業論文を書き上げて、斗満原野の地形や自然がいかに牧場に適しているかという詳細な12年開拓計画を立てています。この年、又一が札幌農学校を卒業すると、さらに奥地の斗満原野1,377ヘクタールの貸付を受けています。

■ 寛齋の渡道～斗満への入植

寛齋は、いよいよ北海道原野開拓を決断し、家財を整理して開拓資金としました。渡道に先立ち、寛齋とあいは母屋を出て、米蔵に菘(むしろ)を敷いて、鍋一つ茶碗二つだけで食事を作って食べ、風呂にも入らないで菘に包まって眠るという開拓生活の練習を何日も繰り返したといわれます。そんな夫妻の様子に、名医関家の評判は落ち、破産したという噂まで広まったといわれま

1902年(明治35)4月14日、寛齋(72歳)とあい(67歳)は、徳島を出発して船を乗り継いで、5月14日ようやく小樽に上陸します。そこから汽車で札幌に到着。まず、寛齋が斗満入植に際して用意した札幌郡山鼻村の仮住まいの家に落ち着きます。翌日から寛齋と又一は、山鼻の自宅から樽川農場へ朝早く出かけて夜遅くに帰るとい生活がはじまりました。あい、長旅の疲れもあり農仕事は無理ということで、家事万端を取り仕切ることになりました。斗満原野の開拓が軌道に乗るまでは、この樽川農場の収入が大事でした。6月末に又一が斗満へ向かいます。7月には、岡山医学校の三男餘作と東京の大学の五男五郎も札幌へ寛齋を訪ねてやってきます。8月5日には、寛齋と三男餘作が、片山夫妻(49歳と41歳)を案内人として斗満視察に出かけます。

すでにこの片山夫妻が先陣となって、樽川から斗満原野まで馬を引き、原始林で熊や蝮、蚊や蛇などと戦いながら、アイヌの協力も得て巨木を掘り起こして開拓の基礎を築いてくれていたのでした。連れて行った4頭の馬も21頭にまで増えていました。

ところで、寛齋は、医者としての社会的地位もあり、経済的にも満ち足りた生活の中で、どうしてすべてを投げ捨てて、北海道開拓の覚悟をしたのでしょうか。寛齋自身が「創業記事端書」(1910明43)の中で次のように書いています。

明治三十四年には、我等夫婦に結婚後五十年たるを以て、兎輩の勧めにより金婚式の祝いを心ばかりを挙げたり。然るにかかる幸福を得たるのみならず、身体健康、且つ僅少なる養老費の貯えあり。此れを保有して空しく楽隠居たる生活し、以て安逸を得て死を待つは、此れ人たるの本文たらざるを悟る事あり。曾て豫想したる事あり。

夫れ我国たるや、現今戦勝後の隆盛を誇るも、然れども生産力の乏しきと国庫の空なるとは、世評の最も唱ふる處たり。依って我等老夫婦は、北海道に於ける最も僻遠なる未開地に向ふて我等の老軀と、僅少なる養老費とおいて、我国の生産力を増加することに當らば、国恩の萬々分の一をも報じ、且つ亡父母の素願あるを貫き、靈位を慰するの慈善的なる學事の基礎を創立せん事を豫め希望する事あるを以て、明治三十五年徳島を退く事とせり。

然るに我等夫婦は此迄医業を取るのみにて、農牧業に経験無きを以て、兎輩及び親族より其不可能を以て思い止むべきを懇切に諭されたるも、然れども我等夫婦は確乎と決心する所あり、老軀と僅少なる資金と本より全成功を得べからざるも、責めては資金を希望地に費消し、一身たるや骨肉を以て草木を養ひ、牛馬を肥やすを方針とするのみ。

成ると成らざるとは、只天命に在ると信ずるのみ。故に徳島を発する時は、其困苦と労働と粗喰と不自由と不潔とを以て、最下等の生活に當るの手初めとして、永く住み慣れたる旧宅を退き、隣地に在る穀物倉に蓆を敷きたるままにて、鍋一つにて、飯も汁も炊き、碗二つにて最も不便極まる生活し一週間を経て、粗末なるを最も快しとして、旅行中にも此れを主張して、粗食不潔の習慣を養成せり。

札幌に戻って数日後、三男餘作と五男五郎はそれぞれ大学へ帰ります。寛齋とあい、毎日、山鼻の家から片道3時間半をかけて樽川農場まで通ったのでした。しかしこの年は、収穫前の早霜で農場の作物はほとんどダメになり、売り物にならない僅かのを穫り入れたのでした。斗

満の関牧場も厳しい状況でしたが、それでも牛は7頭、馬は52頭にまで増えていました。

翌1903年(明治36)3月。大学を卒業した五郎が東京を引き上げて札幌へやってきます。(この年は、又一が志願して一年の騎兵隊兵役についています。) 寛齋は5月20日斗満へ発ち、9月末に札幌に戻っています。この秋、樽川農場は豊作。斗満の関牧場も初めての収穫があり、馬95頭、牛10頭、畑地4町歩・牧草地20町歩の開墾の成果を得ました。この年寛齋とあいは、渡道して初めて晴れやかな気持ちで年を越すことができたのでした。1904年(明治37)正月26日、氷点下36,8度という厳寒の朝、あいが心臓発作で倒れますが、寛齋の必死の治療で翌朝には危機を脱します。2月になって除隊した又一が、この大寒波で斗満の馬を40頭も死なせてしまったとの知らせを聞いて、急いで陸別(陸別)へ向かいます。この4月、寛齋は、山鼻と樽川で種痘の接種を無料で行人々から感謝されたといわれます。

その後、あいの体調回復が悪く、床を離れることができないまま経過します。あいは、せめて一目、この目で陸別を見たいと祈っていました。夫とともに開拓の志を抱いて渡道して2年、あいは斗満の地に一度も鋤を入れることなくこの世を去るのかと胸を痛めていました。

[あいの遺言] あいは、寛齋に次のような遺言を託しています。

1. 葬式は決して此地にて執行すべからず。牧場に於て、卿が死するの時に、一同に牧場に於て埋

めるの際に、同時に執行すべし。

1、死体は焼きて能く骨を拾い、牧場に送り貯えて、卿が死するの時に同穴に埋め、草木を養い、牛馬の腹を肥やせ。

1、諸家より香料を送らるるあらば、海陸両軍費に寄付すべし。

あいの病状は落ち着いて、少し穏やかな暮らしが続きますが、同1904年(明37)6月20日の朝、あいは最後の発作に襲われ、帰らぬ人となりました。あい70歳の献身的な生涯でした。

1906年(明治39)には、息子の次男周助・三男餘作・四男又一の名義で1011ヘクタールの成功貸付などにより、徳島県関係者の貸付地まで含めると、開拓許可面積は7203,69ヘクタールに及んでいます。

■ 徳富蘆花の来訪

寛齋は、冬季にはマイナス30度以下になることも珍しくない厳寒の斗満(現陸別)の地に入植しました。以後10年間、想像を絶する困難にもめげず開拓の鋤をふるい、また地域住民の診療や種痘などの医療にも従事したのでした。1904年(明治37)74歳 牛首別(現在の豊頃)の報徳思想を实践する開拓結社「興復社」農場を視察して、二宮尊親(二宮尊徳の孫)の強い影響を受けます。この農場が入植者に土地を与えていることを知り、そのやり方に変えて斗満の開拓が大きく進みます。そして翌1905年(明治38)自作農育成のための理想的な農牧村落の建設を目指す「積善社」を設立します。

1907年(明治40)徳富蘆花との交流はじまる。1908年(明治41)78歳、東京武蔵野粕谷に徳富蘆花を訪問します。1910年(明治43)80歳の時、「関牧場創業記事」を発表して、克明な記録を残しています。この年1910年(明43)9月24日～30日、徳富蘆花が妻愛子・鶴子を伴って斗満の関

農場を訪ねています。(蘆花の「みみずのたはこと」に詳しく書かれています。)

■ 寛齋の突然の死

1912年(大正元)82歳 蘆花の協力を得て、一寛齋自身実践の心身鍛錬法をまとめた「命の洗濯」を東京警醒社より発刊。同年10月8日に、三男餘作が網走監獄の医官として着任しています。

寛齋は、トルストイと二宮尊親に深く心酔しており、小作人に農地を解放することを希望しましたが、家族に強く反対されて苦悩の末に、1912年(大正元年)10月15日、農場事務所で服毒自殺します。82歳。自殺の原因としては他に、明治天皇崩御と乃木希典の殉死、長男生三の息子からの財産分与をめぐる訴訟、寛齋自身の心身の衰えなどが考えられています。

寛齋は1912年(大正元)陸別で没しますが、死後、4,000ヘクタールを超える広大な農場のほとんどが小作人に解放されたといわれます。今日、陸別町では、陸別開拓の祖としてその功績を称えて、銅像・記念碑・資料館や記念公園など建設しています。また、その偉業に敬意を表して、陸別国民健康保険病院は、「関寛齋診療所」と名付けられています。

現在、関寛齋あい夫妻は、あいの遺言どおり、陸別町を見渡せる小高い丘と一緒に眠っています。

[寛齋辞世] 諸ともに契りし事も半ばにて斗満の里に消ゆるこの身は

わが身をば焼くな埋むなそのままに斗満の原の草木肥やせよ (八十三老白里)



関寛齋・関あい壠 埋葬の地



関寛齋銅像(緑と太陽の広場)

[寛齋格言]空しく楽隠居たる生活し以て安逸を得て死を待つは此れ人たるの本分たらざるを悟る事あり
<四男又一は、1948年(昭和23年)2月2日死去しています。71歳。>

■ 関 寛齋を記念(顕彰)するもの

★ 陸別町—「関寛齋碑」 没後 25 年祭顕彰碑(題字徳富猪一郎、碑文佐藤恒二佐倉順天堂病院長) 1936年(昭和11年)10月15日現在の関公園に建立

- 「関 寛齋銅像」 建立 緑と太陽の広場 1978 年(昭和 53 年)
- 「席 寛齋資料館」 1993 年(平成 5 年) その他、関神社創建、関公園の造成など。

★ テレビ放送番組

- NHK TV (ほっかいどう 7:30) 1978, 3, 9 放送、
「関 寛齋」帯広放送局制作 (宮川泰夫アナウンサー解説)
- 千葉 TV (房総プロムナード) 1995, 1, 23 放送「関 寛齋～江戸の蘭方医～」
- NHK ETV 1995, 3, 15 放送 シリーズ・日本をつくった日本人
「老いて我が理想は捨てず～城山三郎が語る 関寛齋～」

■ あとがき

関寛齋のことを知って感動しました。いろいろ調べてもっと感動しました。原稿執筆を決意してから、いろんな資料を読みましたが、やはりこれは「現地リサーチ」にいかなければならないと考えました。そこで去る 8 月 1 日(金)～3 日(日)、遠い陸別まで出かけました。

札幌から池田まで JR 特急「スーパーおおぞら」で約 3 時間、そして池田駅前で 1 時間ほど待つ～陸別行バスに乗り継いでさらに 2 時間……片道なんと約 6 時間強の旅となりましたが、幸い晴天に恵まれて、利別川沿いに北上するバスの旅は興味深いものでした。関寛齋・又一が拓いた土地は広大なものでした。徳富蘆花の「みみずのたはごと」や司馬遼太郎の「胡蝶の夢」などの文章に気持ちを重ねながら歩いてきました。

陸別町教育委員会の大鳥居仁主事の親切なご案内で、「関寛齋資料館」をはじめ、寛齋ゆかりの場所をあちこち案内していただきました。わざわざ、少し離れた高台になっているところまで連れて行っていただき、関寛齋が開拓したという広大な土地を一望することもできまして、感慨一入でした。そして、「関寛翁 関あい姫 埋葬の地」(お墓)にも手を合わせてお参りしてきました。

陸別の有名店、「正己秦食堂」の道内産そば粉 100%の手打ちそばは、ほんとうにとっても美味しかったです。おすすめします。(執筆担当：中垣 正史)

<主な参考文献及び参考資料>

- 「関 寛齋」鈴木要吾編 関 又一発行 昭和 11 年非売品
- 「原野を拓く—関 寛開拓の理想とその背景—」陸別町郷土叢書 I 陸別町役場広報広聴町史編さん室編集
- 「野の人 関寛齋」米村晃太郎著 春秋社
- 「関 寛齋—蘭方医から開拓の父へ」川崎巳三郎著 新日本新書
- 「関 寛齋—最後の蘭医」戸石四郎著 三省堂選書
- 「街道をゆく 15 北海道の諸道」司馬遼太郎著 朝日文庫
- 「胡蝶の夢」(1)～(4) 司馬遼太郎著 新潮文庫
- 「あい 永遠に在り」高田郁著 角川春樹事務所
- 「みみずのたはこと —関寛翁」徳富健次郎著 岩波文庫(上下)
- 「人生余熱あり」城山 三郎著 光文社文庫
- 「時をこえて十勝の川を旅しよう」(財)北海道開発協会編集 北海道開発局帯広開発建設部発行
- 「ほっかいどう百年物語」STV ラジオ編 中西出版
- 関寛齋資料館 など北海道陸別町現地リサーチ
- インターネット資料など

北海道開拓期の官営工場設置から民営工場の建設へ —札幌市東苗穂地区の産業遺産群(その1)「福山醸造」の創業と発展の歴史—

■ まえがき

北海道の近代化は、明治政府の開拓使設置(1869・明2)により本格的な歴史を刻みはじめます。初代判官島義勇、第2代判官岩村通俊の先見の明と、続く開拓次官(のち長官)黒田清隆(1840-1900)のすぐれた指導力により、総顧問のホーレス・ケプロン(1804-1885)をはじめ、多くの米国の先進技術・教育の専門家が招かれて、各分野の開拓事業が進められました。…(ここまでは、本シリーズの枕詞のような毎回の「まえがき」です。)

今回は、開拓使が、総顧問ホーレス・ケプロンの献策により、北海道工業発展のために、さまざまな官営工場を建設した、札幌の所謂「工業ゾーン」から歴史をひも解いてみたいと思います。

当初、東京の官園内に建設予定であった「麦酒醸造所」が、官園の事業責任者村橋久成(1842-1892)の提言が認められて、村橋久成と麦酒醸造技師中川清兵により「開拓使麦酒醸造所」(1876・明9-今日のサッポロビールの原点)として誕生しています。「開拓使葡萄酒醸造所」「開拓使製糸所」などの開拓使諸工場の設置には、黒田清隆が若き日に薩摩藩で経験した近代科学重視の考え方も反映しているといわれています。

今日、札幌市東区苗穂に、北海道の産業遺産とされる「サッポロビール博物館」「福山醸造」「北海道鉄道技術館」(JR苗穂工場)「雪印乳業資料館」などの工場・記念館群があります。こうした施設が苗穂地区にあるのは、この地域が、創成川・伏古川と豊平川にかこまれた土地で、豊富な伏流水も利用できる立地条件により開拓使時代から官営工場がつくられ、その北海道産業発展の基盤が受け継がれて、今日の「創成川イースト～苗穂」の工業ゾーンを形成してきたと考えられます。

今回は、日本人の食生活になくてはならない味噌・醤油醸造にスポットを当てて、民営企業として誕生し、今日、全道一の発展を続けている「福山醸造」の歴史を掘り起こしてみたいと思います。

■ 官営工場の設置と払い下げ

ケプロンは、ワーフィールドらに北海道の現地調査をさせて、1872年(明治5年)1月の「開拓使顧問ホラシ・ケプロン報文」で、札幌は無尽の水力に恵まれているので、官営の生産工場を設置して機械化を進めるべきことを進言します。開拓使はケプロンの意向を踏まえて、市内大通～北1条、東1丁目～4丁目の約3町四方を工業課管理地として、アメリカ人指導のもとに米国輸入の水力・蒸気機械を設置した機械工場を建設します。こうして、機械・器具製造をはじめ、農作物や麻・繭などの札幌紡織所・加工工場などの官営工場が、ほとんど札幌に集中して設けられます。その他に、製紙所、製油所、馬具製造所、製革所、製網所。さらにアンチセルの北海道野生ホップの発見もあり「開拓使麦酒醸造所」(明9,9)、「葡萄酒醸造所」(明10,9)なども設置されます。

1872年(明治5年)6月建設に着手、「蒸気木挽器械所」の建設・増改築を重ねて、円鋸・廻挽鋸・鉋鑿柄付鋸などの洋式鋸数基を設置しています。さらに創成川の水を引いて「水車器械所」、「煉鉄所(鍛工所)」、「鑄造所」、「木工所」、「製鉄所」などを建設していきます。1879年(明治12年)には、厚別水車器械所も建設されています。開拓使の工場は札幌のほか、函館、室蘭、石狩、根室、択捉島など各地に40以上も建設されたといわれます。

これらの官営工場の建設・経営の指導者には、N・W・ホルト(器械運転)とサンドフォード・クラーク(同助手)、マッティアス・ワープ(革鞣師)、ユリセス・S・トリート(魚肉缶詰製造・鮭鱒孵化)とトレスコット・スェット(同助手)などのアメリカ人技術者が迎えられています。

<「水車器械所」は、冬期3か月間、創成川の水が凍って水車運転が不能になったそうですが、黒田長官がこの現状を見て、幾人かの人夫を使って厚氷を伐り流したところ、流水は平常のようになり水車の運転も出来たという話も残っています。>

これらの官営工場は、北海道の工業発展の基礎づくりに一定の役割を果たしましたが、営業成績は一般的に不振で、後に北海道庁により廃止あるいは民間に払い下げられていきます。

北海道では、屯田兵村に耕作させていた大麻の利用した製麻工業については、開拓使時代から企画されていましたが、1887年(明治20年)5月、札幌に「北海道製麻株式会社」が設立されます。道内産の亜麻原料は、雁来・琴似・当別・新十津川・栗山の工場で「製線」(亜麻の皮を取り除く工程)を行い、札幌の製品工場で麻糸紡績・麻織物製造の製造工程をおこなったといわれます。日清戦争期には軍需品として亜麻製品の需要が急増し、全国の製麻工場はフル操業で生産を増大させたのでした。当時、北海道製麻のほか全国には近江麻糸紡織(明17,6設立)、下野麻紡織(明20,11)、日本織糸(明29,1)がありました。1903年(明治36年)7月に、北海道製麻を除く3社が合併して日本製麻株式会社となります。その後、日露戦争後の需要減退期には再び合併機運が高まり、1907年(明治40年)7月、北海道製麻と日本製麻が合併して、「帝国製麻株式会社」となります。

そして、「北海道製糖工場」(明治23年)も建設されますが、原料ビートの耕作が思うように進まず、1896年(明治29年)事業を中止、1901年(明治34年)に解散しています。この工場は、明治36年、サッポロビールに買収されて新たな歴史をたどります。そして、1966年(昭和41年)、「開拓使麦酒記念館(博物館)」となり、札幌の残り少ない赤煉瓦の建物として、今日も人々に親しまれています。

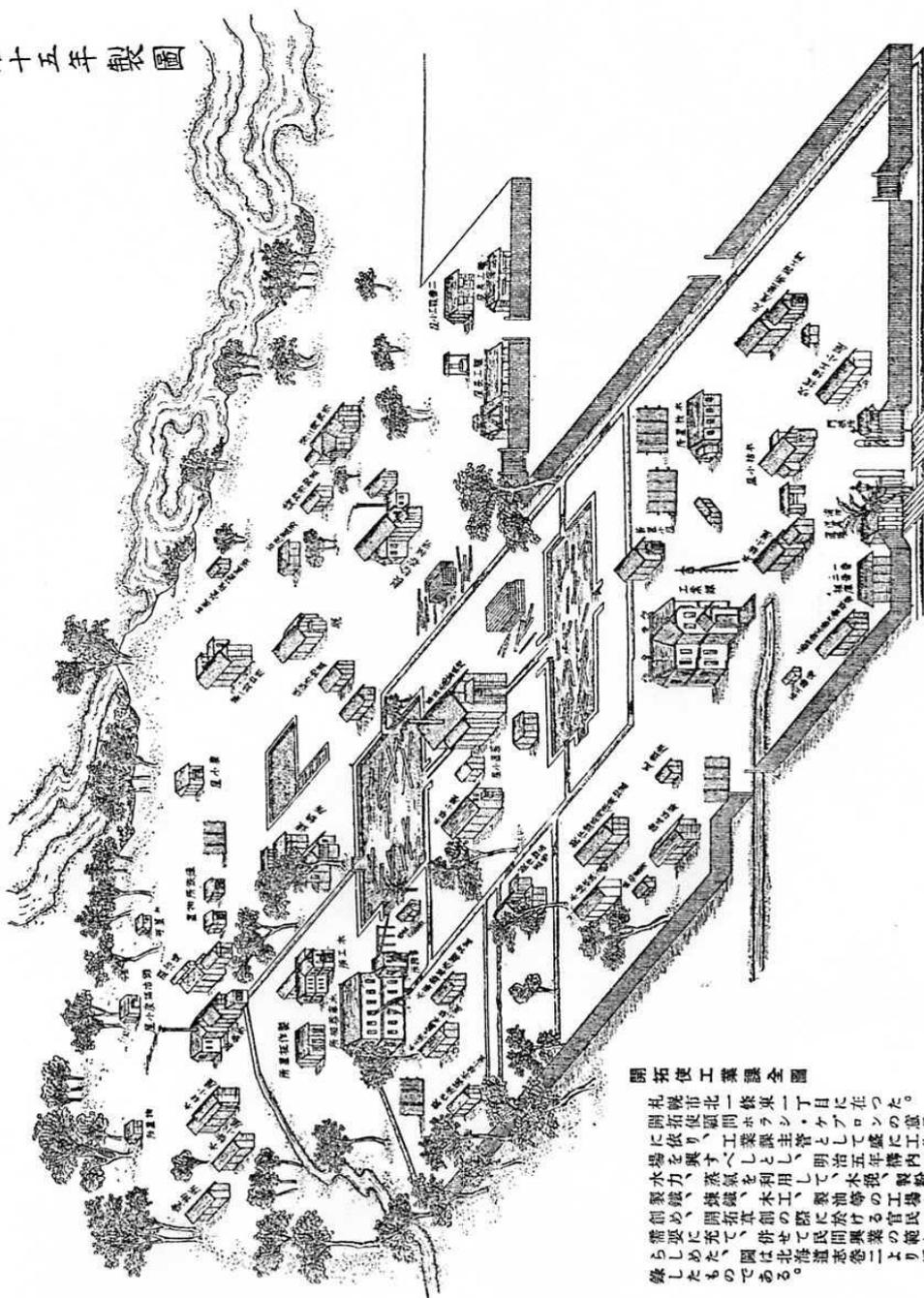
また、エドウィン・ダンなどの指導により、有畜農業・酪農が次第に重視され広まって、牛乳や乳製品への認識も高まり、1914年(大正3年)、「北海道練乳株式会社」が設立され、1925年(大正14年)には、酪農家が集まって「北海道製酪販売組合」(→雪印乳業)が結成されていきます。

さて、官営の味噌醤油醸造所としては、1871年(明治4年)、開拓使御用達で、従来豆麦の生産地である篠路村に「篠路村醤油醸造場」ができます。そして1877年(明治10年)には、「札幌第一味噌醤油製造所」(醤油製造所-空知通北6西1、味噌製造所-厚田通北2東3)が設置されていますが、経営が長く続かず、翌明治11年に、篠路の醸造所は澤口永将に払下げになりますが、

経営不振により、1889年(明治22年)に改めて笠原文平「角一合名会社笠原商会」に払い下げられています。一方、札幌の醸造所は対馬嘉三郎「興成社」に払い下げとなります。

1879年(明治12年)6月、開拓使は、幌内炭鉱開削開始による需要増に備えて、再び官営の「札幌第二味噌醤油製造所」(東創成町北5東1)を設置していますが、これも、1885年(明治18年)、森弥市に払下げとなります。こうした当時の官営工場の建設は、民営事業を起こす誘い水となったようです。

明治十五年製圖



開拓使工業園全圖

札幌市北五条一丁目に在つた。開拓使、顧問ホラン・ケアロンの意見に依り、工業園主として、工場を興すべしとし、明治五年内に水力、蒸氣を利用して、製鉄、製油等の工場を創設せしめ、開拓の間に於ける官民の需に供せしめ、併せて民間興業の範たせしめたる。園は北、海邊二より採

■ 民営工場の建設～福山醸造の創業

一方、民営の味噌醤油醸造業として官営払下げを受けた対馬嘉三郎は、「第一第二味噌醤油製造所」の経営を軌道にのせます。対馬嘉三郎は開拓使役人退官者ですが、すぐれた事業家でもあり、後に札幌区長・衆議院議員なども務めています。対馬嘉三郎の「興成社」は順調に業績を挙げて、札幌の味噌醤油醸造業界の重鎮となっていたといわれます。この開拓当時は、日本人の食生活にとって大切な米味噌醤油など主要食糧のほとんどすべてが、内地から船で運ばれていました。醤油の需要も札幌の開発が進むとともに急増していましたので、開拓使も「米味噌」などを重要視していました。

その他の民営工場としては、「マル竹齋藤甚之助味噌醸造場」（明治20年1月）、「ヤマト巴醤油醸造場」（福山甚三郎）（明治24年11月）があります。

福山醸造は、1891年（明治24）11月、北前船の回船業を営む福井の福山甚三郎が、現在の札幌駅前に醤油工場（北4条西1丁目・第1工場）を建設し、「福山商店」として創業したのが始まりといわれます。その後、福山商店は、生産量を拡大し、1918年（大正7）10月、現在地に苗穂に第2工場を建設して、「福山醸造」（東区苗穂町2）として今日まで稼働しています。豊富な北海道の大豆と地下水を利用して味噌・醤油を醸造、加工食品の販売を継続してきました。当時のレンガ造りの建物は醤油を発酵・熟成させる温醸蔵として現在も使われています。「トモエ醤油」の生産量は道内トップで、160種類の醤油が全国で販売されているといわれます。

巴のマークは、創業当初からのもので、現在も商標として使用されています。巴（トモエ）は神社の紋章、アイヌの紋章、そして函館港のしるしでもあるという普遍性に関連付けて選ばれたといわれます。巴は「左巻き」「右巻きがありますが、商売としては左巻きは縁起がよくないということで右巻きにして、「一つ巴」「二つ巴」「三つ巴」を合わせた形が使用されています。

■ 創業者～福山甚三郎の生い立ち

福山甚三郎（1849－1914）は、代々航海業を営む福山甚五郎の長男として、1849年（嘉永2年）1月22日、福井県坂井郡新保村に生まれます。甚五郎は、1881年（明治14年）航海業をやめて小樽で回船問屋を開き、京都・大阪から下関を経由して日本海沿岸を回りながら各地の産物を商っています。さらに、佐渡の味噌や秋田の米などを買い付けて蝦夷地で売りさばき、蝦夷地では岩内、小樽、利尻までも足をのばしてこの地の産物を買付けて内地へ運んでいました。こうして、福山家と蝦夷地とのつながりが生まれたようです。しかし、甚五郎は1886年（明治19年）、59歳で亡くなります。

甚三郎の実弟の米吉は、1883年（明治16年）に渡道しており、1886年（明治19年）になって札幌で荒物店（南2条西2丁目）を創業します。甚三郎は、父甚五郎のあとを継いで、回船問屋として「昌壽丸」「神力丸」など数隻の帆船を持って蝦夷地への回船業を営んでいましたが、1890年（明治23年）5月、利尻沖で大時化に会い所有の商船と先代が片腕として信頼を置いていた弥助老人を失って衝撃をうけたのでした。その後甚三郎は、陸に上がる決意をして、1891年（明治24年）11月札幌で、米吉の勧めをうけて、醤油醸造業の「福山商店」（北4条西1丁目）を創め、確固たる基礎を固めます。そして後継ぎとなるべき長男甚作（後の2代目甚三郎）を大阪高等工業

学校の醸造科に進学させています。この2代目が、やがて福山商店における新しい技術の導入と製品開発を進めることとなります。甚三郎は、1914年(大正3年)8月4日、66歳で死去しますが、温譲質実の人、巴印醤油ひとすじの生涯でした。「才子才をたのみ、愚は愚を守る。見よ多年成業の後、才子才ならず、愚は愚ならず」を座右の銘とし、終生自らを「守愚」と称したといわれます。

1887年(明治20年～)代当時の札幌の人口は、約26,000人であったといわれます。当時は、生活用品の大部分は本州地方からの移入に頼っていて、味噌醤油も主に津軽佐渡などから輸入されていたといわれます。福山商店の醤油醸造は、その諸味の発酵に約2年以上を要するため、実際に市場に売り出したのは、1894年(明治27年)過ぎからのようです。

その後、札幌の醤油醸造所も次第に増えて、1899年(明治32年)3月「札幌醤油製造組合」が設立され、組合員数16名であったといわれます。1912年(明治45年)には29名に増えています。また味噌の方は少し遅れて、1908年(明治41年)に、会員数15名で「札幌味噌製造組合」が設立されています。

■ 2代目甚三郎～最新設備の第2工場を建設

長男甚作(1883-1974)は、1883年(明治16年7月24日、福井県新保浦の生まれで、13歳の時に従弟の福山米太郎とともに進学のため、札幌に移住しています。その後札幌中学校(現南高校)から大阪高等工業学校(現大阪大)醸造科へ進み、日本最先端の醸造技術を学んでいます。1905年(明治38年)7月卒業、1年志願兵(一定の教育を受けた者の中から志願により、費用自弁で短期服役させ予備幹部に任用した、陸軍の兵役制度)の軍隊生活を送ります。1907年(明治40年)除隊後、父甚三郎を助けて「ヤマト福山商店」の醸造技術改良に取り組みます。

甚作は、1914年(大正3年)8月父の死去により、「2代目甚三郎」を襲名します。2代目甚三郎は、折につけて野田・龍野・小豆島・半田・北陸地方などの名醸地を視察して、内地品を凌駕するような品質優良な醸造に努めています。

当時は、内地味噌・醤油の移入は依然として多く、味噌は青森・新潟・長野から、醤油は野田のキッコーマンや銚子のヒゲタ、ヤマサなど道内向けが多かったようです。しかし、福山商店も次第に道内全域、特に室蘭線沿線・夕張・幌内の炭鉱地帯や上川・留萌地方に販路を拡大し、さらに樺太まで移出するようになっていきます。1917年(昭和43年)、旭川の千代田醸造とともに「北海道味噌株式会社」工場を設立して味噌製造の拡大をはかっています。

さらに、1918年(大正7年)には、苗穂に第2工場を建設して経営規模の拡大をはかっています。この第2工場は、ボイラー・大豆蒸煮缶・小麦炒機・諸味攪拌装置・水圧機等の最新設備を備え、技術研究の試験室も設置した近代的な工場でした。

1918年(大正7年)は、開道50周年の年で、北海道の人口217万人、札幌市の人口は95,000人でした。このころの醤油醸造所数は、札幌で約50、全道では、約260を数えるほどになっています。1926年(大正15年)11月、全国醤油醸造組合連合会が』結成され、その加盟組織として北海道味噌醤油醸造組合連合会が発足しています。

やがて、第2工場の生産が本格化するにつれて、味噌醤油とも生産の主力はこちらに移り、第1

工場は製品倉庫として転用されます。1935年(昭和10年)9月、第1工場の生産を停止して、生産設備のすべてを苗穂の新鋭工場に統合し、本店機構も移転します。そして、10月からは、駅前の第1工場の建物は、「株式会社福山倉庫」となります。

第2工場のある苗穂地域は、水質もよく土地も広々とした環境で、敷地内に小公園を作り近隣住民にも開放して喜ばれたそうです。2代目甚三郎は消費者との結びつきをつよめるために、名入の醤油注ぎなどの記念品を配ったり、絵はがきや醤油の知識パンフレットを配布したりしたといわれます。また、昭和初年のころ、今日のPR誌、「家庭」と題した刊行物を5年余にわたって発行しています。当時としてはきわめて異色のものでした。また、第2工場で生産開始した「小判味噌」がヒット商品となります。こうした積極的な経営・販売により、順調に全道各地への売り上げを伸ばして、常に業界の北海道トップを占めてのいたようです。

しかし、1935年(昭和10年)代後半は、日中戦争の拡大による物資の不足、物価統制の厳しい戦時体制に組み込まれていきます。新しく全国醤油工業組合連合会・全国味噌工業組合連合会の発足により、北海道味噌醤油工業組合連合会が組織され、福山甚三郎が理事長に就任。さらに北海道味噌醤油統制株式会社が設立されて、同じく社長に就任しています。こうして戦況が次第に厳しさを増していく戦時体制の中での努力を強いられたのでした。こうした統制時代は戦後もしばらく続き、1950年(昭和25年)ころになって、長い統制時代にピリオドが打たれ、次第に自由競争時代に移行したといわれます。

この頃には、福山醸造も、生産体制を完全に回復して、新しい自由競争時代に向けて体力を整えていました。創業60周年を迎えた1951年(昭和26年)11月に、社名を「トモエ醤油株式会社」に変更して企業イメージを一新しています。

■ 2代目甚三郎の死去～3代目福山卓爾へ

北大農学部卒業後、旭川の合同酒精で修行していた甚三郎の長男卓爾(養子：米吉孫)は、1950年(昭和25年)に入社しており、新風を吹き込んでいました。そして、1955年(昭和30年)には、社名を「福山醸造株式会社」として、醤油メーカーだけでなく、味噌醤油兼業の総合メーカーとしてイメージを一新しました。

1967年(昭和42年)には、福山卓爾専務が、すでに84歳の高齢に達していた社長の2代目甚三郎に代わって、一連の近代化事業をすすめて、1972年(昭和47年)には甚三郎が会長に退き、卓爾が社長に就任して、3代目社長の時代がスタートします。

2代目福山甚三郎は、1974年(昭和49年)7月、91歳の長寿を全うして死去。大正初年から、戦時統制時代、戦後の混乱期を乗り切って道内業界のリーダーとして活躍した生涯でした。紺綬褒章・藍綬褒章・勲6等瑞宝章をはじめ、札幌市開拓功労者・札幌市産業経済功労者などの表彰を受け、没後には勲4等瑞宝章を贈られています。

ゲーテの「継続は力なり」を座右の銘とし、「多事をなすの秘訣は即座に一事をなすにあり」を身上として万事に情熱を注いだ人生であったといわれます。この自分に対する厳しさとは対照的に、他人に対しては包容力のある春風駘蕩とした雰囲気を持っていたようです。NHKのラジオ体操の推進者として全国に知られ、放送が始まった1932年(昭和7年)以来、1日も欠かす

ことなく自ら先頭に立ってラジオ体操をつづけたそうです。その功により、1969年(昭和44年)にはNHK放送文化賞を受賞しています。

新しい時代に向けて、積極的な販売市場の拡大をめざして、いろいろな新商品の開発に力を入れていきます。1975年(昭和50年)代に発売した「仕込みそ」「田舎みそカップ」が評判を博し、大きく需要を伸ばして、全農・ホクレンを通じて全道の農協へ販売し、さらに灘神戸生協へも販路を拡大して、高い人気を得たといわれます。近年の食品添加物に対する認識の高まり、本物・手作り志向など、消費者の意識の大きな変化に呼応した、北海道産大豆・赤穂の天塩を使用した高級品の「生仕込みそ」や加工味噌の「だし入りみそ」、本州向けの「好きですさっぱりみそ」など、又加工食品の新製品開発で、これからの市場競争に挑戦し続けています。醤油も、最高級のこいくち「一番しぼり」や、食塩を半減した「減塩しょうゆ」などを開発しています。

福山卓爾社長は、1974年(昭和49年)2月「北海道味噌醤油工業協同組合」の理事長として厳しい業界をリードし、さらに1988年(昭和63年)5月には「全国味噌醤油工業協同組合連合会」の会長に就任し、全国の同業者の舵取り役を勤めました。

福山醸造は、1991年(平成3年)、創業100周年を迎え、醤油工場は、2004年(平成16年)11月、「札幌苗穂地区の工場・記念館群」として北海道遺産に認定されています。さらに2007年(平成19年)11月には、経済通産省より「札幌市の醤油醸造関連遺産」として近代化産業遺産群に認定されています。

■ 4代目福山滋社長～5代目福山耕司社長へ

次いで、1995年(平成7年)2月、初代甚三郎の次男甚之助の孫福山滋(1944-2001)が4代目社長、2001年(平成13年)1月、3代目卓爾の長男福山耕司(1953-)が5代目社長となって、今日に至っています。この間、1991年(平成3年)より発売の「トモエ日高昆布しょうゆ」シリーズと「田舎みそカップ」が北海道内を中心に販売を拡大し、トモエブランドの地盤をかためたといわれます。

また、食品安全・安心の品質マネジメントシステムの国際規格「ISO-9000」取得による優れた品質管理による顧客満足度向上に努め、北海道産の原料のこだわった新商品の開発が進められています。現社長のモットーは、「過去に縛られず、今の自分達に何ができるのかを考える。」としています。

平取産の完熟トマトのフルーティーな味わいを生かした「平取トマト醤油」、由仁商業高校の生徒が考案した、栗山特産の健康玉ねぎにバジルなど3種類のハーブを加えた「愛郷ドレッシング」の商品化など、時代のニーズにあった新感覚の商品開発も進めています。

■ 福山醸造を記念するもの (福山醸造株式会社本社の資料室)⇒

★旧福山商店第2工場(札幌市東区苗穂町2丁目4-1)

★Café ロッソ(旧福山醸造店)

明治40年代に福山甚三郎の息子米太郎によって建築されたといわれる。レンガ造り寄棟屋根の建物は、北3条通りを挟んで旧開拓使麦酒醸造所(サッポロファクトリー)北側にあります。



★福山醸造の工場見学

本社屋の歴史博物館ともいふべき「資料室」、トモエ醤油工場の製造工程やレンガ造りの醤油蔵などを見学できます。福山醸造の直売所もあります。(要予約、通年の月～金、苗穂駅徒歩 10 分)

■ あとがき

これまで、札幌の産業遺産関連では、「HOMAS」の原稿として、村橋久成の「開拓使麦酒醸造所→サッポロビール博物館」や 黒沢西蔵の「北海道製酪販売組合→雪印乳業株式会社」を取り上げて書いてきました。

「福山醸造」については、今回の執筆にあたりまして、資料を読み進めて、創業以来の醤油・味噌ひとすじの歴史に心を打たれました。北海道の大事な食文化を担ってきたその歴史に感動しました。

先日の本社訪問では、企画開発課の森 清史さんのご案内で、福山醸造の創業以来の歴史が凝縮された本社「資料室」や醤油工場の製造過程を見学させていただきました。札幌駅から約 5 キロという至近距離に明治からの貴重な歴史が生きていることを実感しました。(執筆担当：中垣 正史)

<主な参考文献及び参考資料>

- 「概説 - 札幌のあゆみ」札幌市文化資料室 編集発行 2011 年 □ 札幌時計台創建一三五周年記念誌「札幌ものがたり」 NPO 法人さっぽろ時計台の会編集 時計台まつり実行委員会発行 2013 年
- 「草創時代に於ける札幌の工業」吉田 寧編集 札幌商工会議所発行 昭和 11 年 □ 「東区今昔」札幌市東区役所総務部総務課発行 昭和 54 年 □ 創業百年記念誌「百年の歩み」福山醸造株式会社企画部創業百年記念誌編集委員会編集 株式会社福山倉庫・福山醸造株式会社発行 平成 3 年 □ 「善念録」-福山甚之助を偲ぶ 福山醸造株式会社社長福山甚三郎編集発行 昭和 33 年 □ 「新札幌市史」第二巻通史二・第三巻通史三 札幌市教育委員会編集 札幌市発行
- 「新聞と人名録にみる明治の札幌」札幌市教育委員会文化資料室編集 北海道新聞社発行
- 「開拓使時代」さっぽろ文庫 50 札幌市教育委員会編 北海道新聞社発行 □ 「北海道の歴史」下 近代・現代編 北海道新聞社発行 □ インターネット資料など

北海道の鉄道—開拓使時代からの変遷史をたどって— —札幌市苗穂地区の産業遺産群(その2)「北海道鉄道技術館」(JR北海道苗穂工場)— 記録

■ まえがき

北海道の近代化は、1869年(明治2)7月、明治政府の開拓使設置、8月、蝦夷地を「北海道」と改称して、本格的な歴史を刻みはじめます。

松浦武四郎の原案は、アイヌの人々が自分たちの国を「カイ」と呼んだという説に基づいて「北加伊道」としましたが、最終的には、「西海道」(九州)、「南海道」(四国)、「東海道」(本州)などに合わせて、「北海道」とされたといわれます。

初代判官島義勇、第2代判官岩村通俊の先見の明と、続く開拓次官(のち長官)黒田清隆(1840-1900)のすぐれた指導力、さらに、総顧問のホーレス・ケプロン(1804-1885)をはじめ、多くの米国の先進技術・教育の専門家が招かれて、各分野の開拓事業が進められました。ここまでは、本シリーズの枕詞のような毎回の「まえがき」です。

今回は、開拓使が、総顧問ホーレス・ケプロンの献策により、北海道工業発展のために、さまざまな官営工場を建設した、札幌の所謂「工業ゾーン」の歴史をたどりまし。今日、札幌市東区苗穂に、北海道の産業遺産とされる「サッポロビール博物館」「福山醸造」「北海道鉄道技術館」(JR北海道苗穂工場)「雪印乳業資料館」などの工場・記念館群として残されています。

今回は、この苗穂地区、「創成川イースト～苗穂」の工業ゾーンの一角にある「北海道鉄道技術館」(JR苗穂工場)にいたるまでの、北海道の「鉄道」の歴史を掘り起こしてみたいと思います。

■ 日本の「鉄道」の歴史のはじまり

1872年(明治5)10月、日本最初の鉄道である新橋～横浜間が、イギリス人技師の指導のもとに建設・開業して、人々を驚かせました。後に、「汽笛一声新橋をはやわが汽車は離れたり～♪」と鉄道唱歌(明33、大和田建樹作詞・多梅雅作曲)にも歌われました。

1874年(明治7)5月には、大阪～神戸間が開通し、続いて、大阪～京都間の建設も進められて、1877年(明10)2月、京都～(大阪)～神戸の全線を開通させています。関西では、その後も延伸が図られ

逢坂山の鉄道トンネル(668,4メートル)が掘られて、琵琶湖東岸の長浜と北陸を結ぶ鉄道建設が進み、1883年(明17)4月には、～大津～金ヶ崎(敦賀)まで開通させています。これらの工事は、イギリス人技師の指導を受けた井上勝(1843年—1910)が指導に当たっています。井上勝は、後に鉄道局長になり、わが国の「鉄道の父」と呼ばれた人です。

■ 北海道の「鉄道」の歴史のはじまり - ジョセフ・クロフォードの招聘

明治政府は、1869年(明治2)7月「開拓使」を設置して、北海道開拓・近代化推進のために、いろいろな施策を推進します。1870年(明治3)5月開拓使次官に就任した黒田清隆(1840-1900)は、早速道内各地と樺太を視察して、外国人指導者・技術者の招聘を急務と考えて、翌年1月には留

学生を伴ってアメリカに赴き、グラント大統領に会い、米農商務省長官ホーレス・ケブロン(1804～1885)の開拓使総顧問契約などを取り決めて帰国します。この年(1871)7月、ケブロンが、秘書エルドリッジ、科学技術師アンチセル、土木技師ワーフィールドを伴って来日、遅れて鉱山技師ライマン(1835-1920)、農業・牧畜のペーマー(1843-1896)、ダン(1848-1931)などが来日します。

ケブロンは、北海道開拓の一環として、ライマン、助手マンローとともに地質調査を開始し、幌内川上流に有望な炭田を発見し、其の採掘と合わせて、その石炭輸送のための鉄道敷設を開拓使に進言しています。

これが、北海道の「鉄道」の出発点となります。最初、この石炭輸送の鉄道建設については、ケブロンとライマンとでそのルートをめぐる見解がわかれていたといわれます。ケブロンは石炭の積み出し港として室蘭港を考えて、幌内～室蘭間の鉄道敷設を提唱しました。しかし、ライマンは、幌内～幌内太(現在の江別)に鉄道を敷設して、ここからは船に積み替えて石狩川を下り小樽港に運ぶ方が安上がりだと主張して、結局この案が採用されます。

そして、1879年(明治12)2月、アメリカから鉄道技師ジョセフ・クロフォード(1842-1924)が招かれます。早速、クロフォード(当時36歳)は、アメリカに留学し土木を学んで帰国した松本荘一郎(1848-1903・後に鉄道局長)を副長としてルートの再調査をします。その結果、クロフォードは、舟運をやめて、幌内～札幌～小樽港までの鉄道敷設の方が、所要時間も早く効率もよいと提言します。そしてまず、一番の難所とされた張碓の掘削工事に着手し、わずか半年で完成させました。しかも工費は当初の見積り額を下回り、財政難に苦しむ開拓使を喜ばせたといわれます。こういう経緯を経て、小樽港に隣接する手宮～札幌～岩見沢～幌内(現在の三笠)の鉄道建設の正式ルートが決定したのでした。

工事は、1880年(明治13)1月から始まり、難所を乗り越える掘削や木造の橋梁工事が大変であったようですが、11月18日に手宮～札幌間が開通。その後の工事も引き続き進められて、1882年(明治15)11月13日に、手宮～幌内間を全面開通させています。石炭輸送が目的の鉄道でしたが、もちろん旅客扱いも行われました。機関車や各車、貨車はすべてアメリカ製を輸入して、使用しています。この間、1882年(明治15)2月に「開拓使」は廃止されて、石炭とその輸送の鉄道関係の事業は、新設の「北海道庁」に引き継がれます。

■ 幹線鉄道の国有化

明治政府は、当初から幹線鉄道については、建設から運営までのすべてを政府が行う方針(官設・官営)で進めていました。しかし資金不足のため、明治10年代になると、民間資本による鉄道建設の出願が相次ぎ、そこで開業25年後に政府が買い上げるという条件で、民間資本による幹線鉄道の建設を認めることになったといわれます。こうして、1881年(明治14)8月に、日本最初の民間資本による鉄道会社「日本鉄道」(発起人代表右大臣岩倉具視)が誕生します。「日本鉄道」の創立以降、各地に私設鉄道が誕生し、日本の幹線鉄道の建設は私設鉄道がリードする形で進められて行きます。

まず、「日本鉄道」は、早速東京と青森を結ぶことを計画し、工区を五区に分けて建設を進めま

すが、資金面・建設技術面でも困難に直面します。結局、政府の援助を受けて、資材・機材の購入、用地買収などをする事となり、「鉄道局」が測量から工事全般を担当したといわれます。1882年（明治15）東京～高崎・前橋間の工事が始まり、1884年（明治17年）5月に開通させています。以後、幹線ルート決定の曲折を経て、「鉄道局」は、高崎～横川～関山～直江津を開通させます。また東京と京阪神を結ぶルートも曲折を経て中山道ルートから東海道ルートに決定、東と西から各工区の延伸を重ねて、1889年（明治22）4月 新橋～神戸間を全面開通させ、さらに、1891年（明治24）9月に東京上野～青森間の全線を開通させます。こうして、日本の幹線ルートが完成したのです。開業当初、日本鉄道の経営は極めて順調で、私鉄ブームとなり、多くの鉄道会社が出て、全国的に鉄道の延伸が進められていきます。

しかし、当時の鉄道局長の井上勝は、国家の動脈としての幹線鉄道は、私設鉄道にまかせるべきではなく、あくまで官設・官営で行くべきだと主張していたといわれます。一部では鉄道の国有化に反対する意見も出されていましたが、軍部からの要求もあり、1904年（明37）に勃発した日露戦争時に、本州各地から広島宇部港への兵員・軍需物資輸送の必要が生じた折、官設鉄道と私営鉄道の路線の車両の運用や運賃面などで多くの不都合が生じて、鉄道の国有化論が急速に高まったといわれます。

こうして結局、1906年（明39）3月に鉄道国有法が公布されて、同年10月から全国17の私設鉄道が政府に買収されて官設鉄道に編入されていきます。この私設鉄道の国有化により、私設鉄道と官設鉄道の比率は逆転することとなり、幹線は「官営鉄道」が、地域内の路線は「私設鉄道」が受け持つという役割分担が定着することになっていきます。

■ 鉄道の国有化による道内の路線拡大

北海道の鉄道は、1882年（明治15）11月開通の「幌内鉄道」（手宮～幌内）が、1882年（明治15）2月の「開拓使」廃止により、その事業は、新設の「北海道庁」に引き継がれましたが、経営は低迷していたといわれます。その後、1886年（明21）4月「北有社」が幌内鉄道の運行を行う「官有民営」となります。「北有社」は、ある程度の収益をあげるところまでは回復させたものの、資本力の乏しさから、冬期間運休などの問題も抱えたままで、目立った成果は上がらなかったようです。

北海道庁理事官の堀基（844-1912）が、中央財界の大資本を集めて、1889年（明治22）12月、鉄道会社「北海道炭礦鉄道」（北炭）を設立し、営業不振の幌内鉄道の譲渡をうける形でスタートします。そしてまず、1881年（明24）歌志内、翌年（明25）空知太、岩見沢～室蘭（室蘭本線）を開通させます。こうして空知地方の炭鉱からの石炭を、小樽・室蘭の2港から積み出す体制が出来上がり、石炭産出量は大幅に増えて好調な業績を挙げていきます。後の函館本線・石勝線などに該当する路線の敷設も進めていきますが、これらの路線はおもに、沿線の炭鉱と石炭と積出港を結ぶ役目を担ったのです。

1896年（明29）5月公布の「北海道鉄道敷設法」により、北海道庁が「鉄道部」を立ちあげて、「北海道官設鉄道」の敷設を進めていきます。1898年（明31）7月、空地太（現砂川市）～旭川まで（上川線）の延伸（上川線）をはじめとして、狩勝峠を越える「十勝線」、「手塩線」、「釧路線」、「富良野線」、「根室本線」、「宗谷本線」などを開通させていったようです。とりわけ、1907年（明40）9月、難

工事の狩勝トンネル(全長 953m、約 7 年間の工事)の開通によって旭川～釧路間を全通させたことが、当時としては一大事業であったようです。

さて、函館～小樽の路線は、本州と北海道とを結ぶルートとして早くからその必要性が認められていました。1899 年(明 32)「函樽鉄道会社」が設立(翌年「北海道鉄道」に改名)されますが、事業は資金的にも苦しく、山岳区間の工事、長万部～小樽の長いトンネルを含む難工事のため送れます。それでも 1904 年(明 39)10 月には、函館から小樽への全線が開通します。これにより、東北本線と青森～函館間の連絡船航路を合わせて、東京から北海道中央部までの鉄道による連絡が完成しました。

■ 日本国有鉄道(国鉄)の分割民営化

1872 年(明 5)の鉄道開業以来、政府官庁による経営を軸としてきた国有鉄道事業を、独立採算性の公共事業として継承する事業体として、「日本国有鉄道」が、1949 年(昭 24)に発足しますが、国鉄の経営は悪化する一方で、労働争議・人員整理などが続いています。

1987 年(昭 62)、「日本国有鉄道」(国鉄)は、莫大な負債処理を抱えたままで、分割民営化を図り 115 年の「官営」国鉄の歴史に幕を下ろすことになりました。この国鉄大改革により「民営」となり、J R 北海道(札幌)、J R 東日本(東京)、J R 東海(名古屋)、J R 西日本(大阪)、J R 四国(高松)、J R 九州(福岡)の 6 社に分割されました。

1872 年(明 5)開業以来の国鉄大改革により、1987 年(昭 62)4 月、民営化した「J R 北海道」(北海道旅客鉄道株式会社)は、6 社の中でもっとも厳しい経営状況を抱えてスタートしたといわれます。赤字路線の廃止・人員整理などの苦しい経営を迫られています。「J R タワー」駅ビル商店街などの多角的利用を展開しています。1988 年(昭 63)3 月には、30 年近くに及ぶ歳月をかけた一大事業「青函トンネル」(53.85km)が開通して、本州と北海道が地続きとなりました。さらに、「新幹線」の新函館までの開通・札幌までの延伸などの明るい展望が開けてきました。

■ J R 北海道 苗穂工場 と「鉄道技術館」の公開

さていよいよ、札幌市苗穂地区の一角にある北海道産業遺産のひとつ「J R 北海道苗穂工場」(現札幌市東区北 5 条東 13 丁目)と同工場内にある「北海道鉄道技術館」につて、北海道の「鉄道」の歴史を考えてみたいと思います。

1909 年(明 42)、「J R 北海道苗穂工場」は、当時の鉄道院北海道鉄道管理局の札幌工場として設立されます。19 万 6000 平方メートルという広大な敷地面積を占めています。<5 頁「苗穂工場平面図」参照>旧国鉄時代から、道内の鉄道の各路線延伸などの歴史を担ってきた重要な工場です。

いろいろなメンテナンスや新車両の研究・除雪車の改良、新型電車や振子気動車の製造・改造を手掛け、青函トンネル用の「トレインオントレイン」などの開発も、すべてこの苗穂工場を中心として進められています。

さらにこの苗穂工場で開発されたものとして見落とせないものに、線路と道路両用の DMV (デュアル・モード・ヴィークル)があります。これまでに 7 両のテスト車両が造られているそうです。中古のマイクロバスを改造した 2004 年の第 1 号誕生(発案者は柿沼博彦・後の J R 北海道

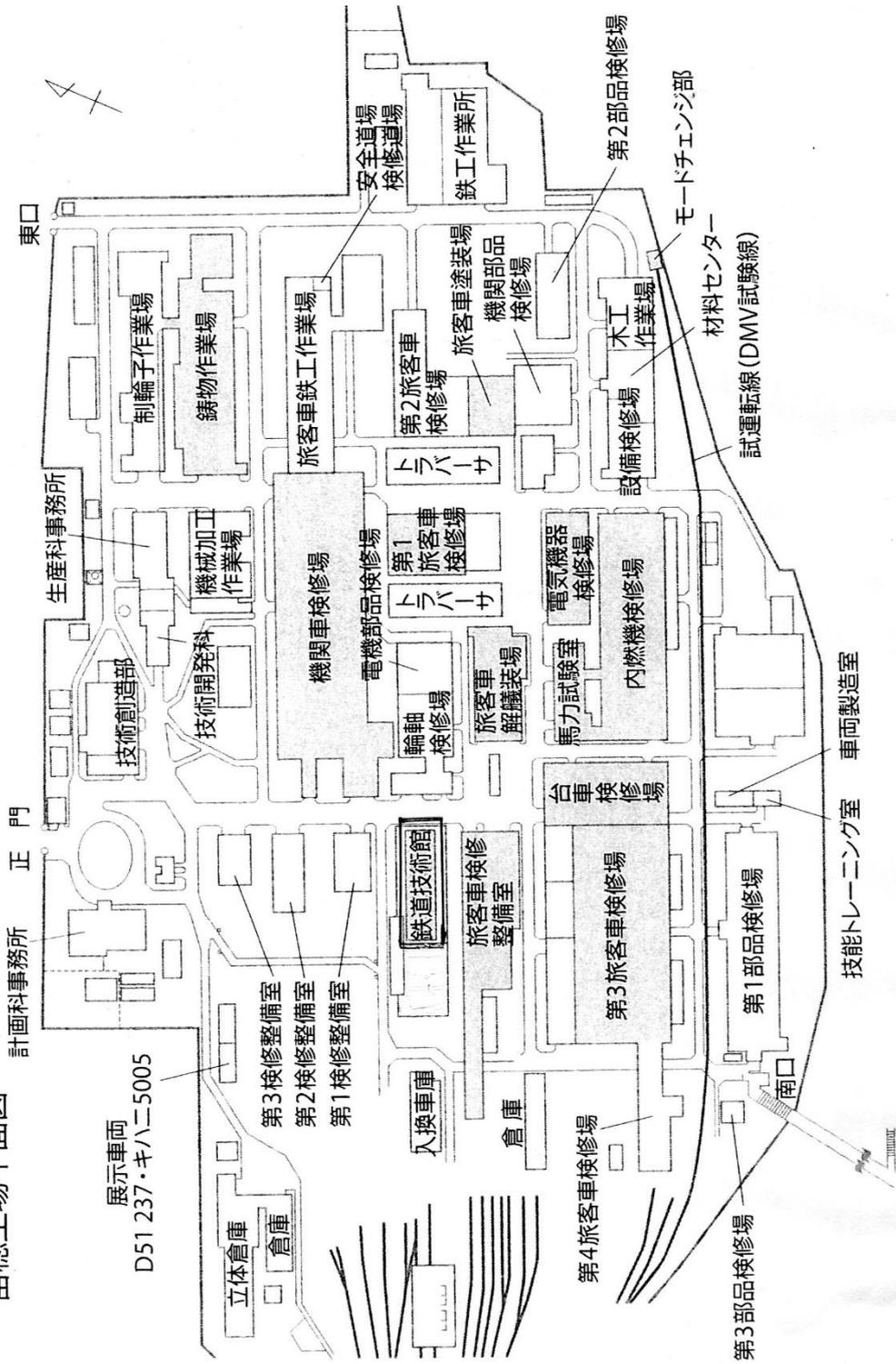
会長)から改善を重ねて、後にトヨタの協力も得てトラックのシャーシーを使うことにより、総許容加重を増やせて定員増も可能となった、ロングボディーの新車両を2011年に完成させています。今後、ローカル線の経営改善への期待が高まっていると言われます。

JR北海道では、五稜郭車両所と釧路運輸車両所も工場機能を持っていますが、北海道の全車両約1,100両のうち約750両を、この苗穂工場が受け持っていると言われます。鉄道のメンテナンス工場は、量産品ではなく、自動化されたライン方式も難しく、マンパワーに頼る面が多い大変さがあると言われます。

この工場内には、産業遺産とされる「鉄道技術館」があります。この建物は、JR北海道苗穂工場が、1909年(明42)12月スタートした翌年に建設されて、当時は用品倉庫として使用されていたものです。この明治時代の面影を残しているレンガ造り建物は、苗穂工場で現存する最古の建物とされます。この明治時代の建造物が産業遺産の指定を受けたわけです。

この「鉄道技術館」には、鉄道開設以来の歴史的な資料や各種技術の発展がわかる実物の機械、屋外の車両なども展示されており、北海道の鉄道文化が凝縮されていると言ってよいでしょう。

苗穂工場平面図



— 「鉄道ジャーナル No. 559 2013, 5」より転載 —

■ 北海道の鉄道の歴史を記念するもの

総合的なものとしては、1971年(昭46)4月に、北海道の開道100年を記念して開設され、2015年(平27)4月にリニューアルオープンした「北海道博物館」(旧開拓記念館)〈札幌市厚別区小野幌53-2〉がありますが、北海道の鉄道の歴史を伝えるものとしては次のような所をおすすめします。

★みどころ① 新しく、2007年(平19)に統合開設された「小樽市総合博物館」(旧鉄道記念館)〈小樽市手宮1-3-6〉があります。1880年(明治13)11月に手宮～札幌間が開通した始発駅跡地です。北海道の鉄道の出発点、旧手宮駅の線路、車両などが見られます。

★みどころ② 1987年(昭62)に開設された「三笠鉄道記念館」〈三笠市幌内町2-287〉があります。1882年(明治15)11月、手宮～札幌～幌内間の「幌内線」が全面開通した終着駅「旧幌内駅」の跡地に建てられています。ジョセフ・クロフォードの銅像もあります。また、「クロフォード公園」〈三笠市本町971-1〉には、三笠駅の跨線橋とホーム、1990年(平成2年)に復元された旧幌内線三笠駅(幌内太駅)駅舎もあります。三笠鉄道記念館の分館的位置にある鉄道公園施設で、北海道で使用された鉄道車両なども保存展示されています。

■ あとがき

これまで、札幌の産業遺産関連では、「HOMAS」の原稿として、村橋久成の「開拓使麦酒醸造所→サッポロビール博物館」や黒沢酉蔵の「北海道製酪販売組合→雪印乳業株式会社」、「福山醸造」などを取り上げて書いてきました。今回は、開拓使時代に建設された北海道鉄道のその後の歴史をたどり、JR北海道苗穂工場が担ってきた重要な役割を考えたいと思います。その中で、北海道遺産の一つとされている「北海道鉄道技術館」に最後のスポットを当てて見ました。

今回の執筆にあたり資料を読み進めて、現地リサーチとして、まず、北海道鉄道の歴史の出発点である「小樽市総合博物館」(旧交通記念館)(小樽市手宮1丁目3-6)へ行って来ました。もう何度目かの視察ですが、正面のクロフォードの銅像を改めて仰ぎ見てきました。ちょうど、「小樽貴賓館」(旧青山別邸)(小樽市祝津3丁目63)のアジサイも満開の美しい季節でした。

また、JR北海道苗穂工場内の「北海道鉄道技術館」(札幌市東区北5条東13丁目)にも行って来ました。毎月第2、第4土曜日の午後(13:30～16:00)だけの限定一般公開(無料)なので、やっと何とか都合をつけて行ってきました。屋外の車両展示と展示館(1階・2階)からなっています。今回はリサーチなので説明員のお話をしっかり聞いてきました。入口前庭に可憐な薄紫の花がたくさん咲いていました。「亜麻」の花であることを知り、また、屯田兵村から始まった大麻(麻→亜麻)栽培、北海道の亜麻栽培、麻糸紡績・麻織物製造の歴史が思い起こされました。この現地リサーチは、いつも新発見があって面白いものだと思っています。

(執筆担当：中垣 正史)

<主な参考文献及び参考資料>

- 「北海道鉄道百年史」上(昭和 51 年発行)・中(昭和 55 年発行)・下(昭和 56 年発行) 日本国有鉄道北海道総局 編集発行
- 歴史群像シリーズ [図説 国鉄全史] 学習研究社発行 2004 年
- 鉄道路線変せん史探訪V「北海道の鉄道」守田久盛・坂本真一 著 吉井書店 発行 1992 年
- 「JR北海道 20 年のあゆみ」 JR北海道 20 年史編集委員会編集 北海道旅客鉄道株式会社 発行 2007 年
- 札幌時計台創建一三五周年記念誌「札幌ものがたり」 NPO法人さっぽろ時計台の会編集 時計台まつり実行委員会発行 2013 年
- 「開拓使時代」さっぽろ文庫 50 札幌市教育委員会編 北海道新聞社発行
- 「鉄道ジャーナル」(特集) -JR北海道とJR九州- 鉄道ジャーナル社 No. 559 2013 年 5 月号
- 「鉄道と歩んだ街小樽—ここから始まった北海道の鉄道史」小樽市総合博物館公式ガイドブック 2013 年 5 月 1 日発行
- 「重要文化財 旧手宮鉄道施設」小樽市総合博物館 小樽市総合博物館友の会発行 2014 年 8 月
- インターネット資料など